
吸血魔王と赤血魔神

美平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血魔王と赤血魔神

【Nコード】

N0191T

【作者名】

美平

【あらすじ】

殺されてしまった俺「葉月零花」（はづき ゼレカ）は自称神？からチート能力？を与えられ、異世界に転生させられた。辿り着いた場所は魔界。^{ニンブルケティック}イロイロな事情が重なり、俺は《赤血魔神》として勇者とか賢者とかその他とかと闘う羽目に。しかし、（キラーン！）自称神？から与えられたチートで闘う、基本ほのぼの・コメディー・その他諸々が入り乱れるストーリー。初めての執筆なので、生暖かく読んでやって下さい。

始まりの会話（前書き）

初投稿です。

誤字・脱字・変な言い回し等ありましたら、教えてください。

始まりの会話

――世界が見える

――真っ黒な世界

――黒くてドロドロしたその世界

――さっきまで俺が居たあの場所

――俺は世界に絶望した

――何故絶望したのか、それは簡単なこと

――俺の大事な人、守りたかった人、愛する人その全てを俺の目の前で……

――『殺された』

――「!」

――不意に聴こえた声。しかし、その声は俺のよく聴く声

――『何時までそこにいるつもりだ』

――また聴こえた? 響いた? いいか。そんな事

――『お前は死んだ』

——・・・知っている。俺が臨んだ事だ

——『・・・悔しく無いか？目の前で殺された事を。これ以上だれも殺させたく無いか？』

——「・・・ああ。」これが死後の世界での残留思念でも、おれはそう願う

——『なら、その願い叶えてやる』

——光に包まれる俺の身体

——行き着く場所は何処だろう・・・

仕事（前書き）

初めてなのでペースが掴めません。
とりあえずメインヒロインが出てきます。

仕事

——此処は魔王城。幾千、幾万の悪魔達の住む城。

此処は魔王城の正門。魔王城の城下街の防壁のようなもの。

「おい、みろよ！あれ！」「あれは！」

「勇者の下僕のセイントペガシスじゃないか！」

「に、に、逃げろ——」

そう言っ、一人が放った一言が混乱を招いた。しかし、

「騒ぐな。俺だよ、俺」

そう言っ、セイントペガシス——普通の馬の三倍程ある体に羽を生やしている——の体が徐に動くと一人の少年が姿を表した。

「何だ、ゼレカか。」

「驚かせやがって。」

口々にいう皆に俺は、

「おいおい、悪魔がそれでいいのか？」

などと、解りきった答えしかかえってこない質問をした。

「いいんだよ、俺達は。元々戦闘用悪魔じゃないんだから。」

（ほら、やっぱり）

「まあいいや。それよりも「そんなことより、流石ゼレカだ。あのセイントペガシスを一人で殺っちまうなんてな！」

「いや、だからそんな事より「そうだぜ！やっぱりお前は『赤血魔神』だぜ！」

——・・・図られたかのように喋るな皆。まあ、そろそろ・・・

「ゼレカー——！！！」

——ほら、来た

「ゼレカあいたかったです」

——コイツはこの国の姫 『エレスナーグ』 本当はもっと長い名前なのだが、あった時にそう呼べと命令^{いわ}れた。これでもこの国の吸血魔王なのだ。姫なのに魔王？ そんな事は気にしちゃいけないぜ☆

「？ さっきから何を言ってるの？」

「いや、なんでもないさ。それよりも倒してきたよ、君の為に」

「／／いやだ、ゼレカ。私の為なんて」

——というかお前宛ての依頼を俺がこなしたただけなんだかな・・

「それよりも早く帰ろうよ」

「わかったわかった。エレスナーグ」

「もう、ゼレカの意地悪」「はいはい。・・・エレス」

仕事（後書き）

「どうも～作者の代弁者のディンです。」

「・・・ゼレカです。」

デ「元気が無いなー、ゼレカ」

ゼ「元気もなにもほとんどでてきてないだろ？」

デ「まあ・・・それは・・・僕のせいなんですけどね」

ゼ「エレスの紹介もほとんどしてないしな」

デ「それは次回ということだ」

ゼ「まあいいや・・・このお話を読んでいただいた皆さん、ありがとうございました。感想やこのダメ作者への不満などございましたら、遠慮なく書いてやって下さい。」

城(までの)一時(前書き)

GWが終わってしまいましたね。

・・・これから学校が再び始まりますが、最低五十話は毎日更新したいです。

城（までの）一時

今、俺とエレスは城に戻ってきた。本当はエレスは城で待っている筈だったのだが、さっきの台詞をみれば分かるように待っていていられなかったらしい。

「むう。待ちくたびれたよ」

「その台詞。此処に来るまで三十回は聞いた」

「それだけ待ってたの」

「ふふっ」

俺が言うのもなんだが、エレスはとても可愛い。水色がかった髪が腰辺りまで伸び、紅く光る瞳が存在感をだしている。

・・・瞳が紅いのは悪魔・吸血鬼等の特徴らしい。背は俺より頭一個分ぐらい小さい。

「ゼレカ」。ゼレカの高さからみた世界って、どんな感じ？」

「んゝ確か俺の身長が169？だから、エレスよりも高い目線かな」

——おおーっと。つい説明口調になってしまったぜ☆

「？あんまりわからないよ」

「つまりこんなかんじ」

俺は後ろからエレスを抱き上げる。

「えっ？ あっ、ひぁ！」

「あー。いきなりでわるかったな」

「抱き上げるなら一言言ってよ」

「ふふっ。ゴメンゴメン」

そういつて肩に座らせた。改めて抱き上げてみると、羽のように軽い。

「わぁー！これがゼレカのみてる世界なんだー！」

「喜んでいただけて光栄です。エレスナーグ様」

いつものように悪戯心がでてきたので、意地悪してみる。

「もう、ゼレカ。エレスって呼んでいつもいつてるでしょ。ゼレカの意地悪」

ふふっ、やっぱり予想通りの反応。

気づいているかもしれないが、エレスは俺に『エレスナーグ』と呼ばれる事を嫌っている。嫌いというか、俺だけの特別な呼び方で呼んで欲しいらしい。

「やっぱり予想通りだった。」

「やっぱりって、もう！」

「君をみていると、悪戯心が刺激されるからね」

「ゼレカ!!」

「何? エレス」

「そう呼んでくれる方が、やっぱり嬉しい」

なーんて言ってる間に玉座の間に着くころだ

「遅いですよ、ゼレカさん」

『! !』

おおっと、やっぱり。ん? 今のは誰かって? それは次回明らかに!
!

城(までの) 一時(後書き)

デ「いやー、ほのぼの甘甘してますねーゼレカさん」

ゼ「今回は予告通りエレスの紹介をしてたな」

デ「裏話はこれから本編の方でばらしていきたいと思いますっております」

ゼ「・・・最初の会話の全貌も明らかにしないといけないしな」

デ「?最初の会話?ナンノコト?」

ゼ「忘れてたな」

デ「いやっ、そんなっ、忘れてたなんて。ちゃんとこれから暴露されますよー」

ゼ「どうだか」

デ「そんなことより、次回はもう一人のメインヒロインがでてきます!」

ゼ「お前があと一人で、メインヒロインをだすのをやめるとは思えないけどな」

デ「まあそれは、作者のみぞ知るということで」

ゼ「結局お前だろ!!それとタイトルにもあるんだから、俺の能りよK」

デ「それでは、また次回」

ゼ「聞けー!ー!」

城での一時（前書き）

いやー、まだ慣れないのでタイトルとサブタイトルを間違えて入力して、その度にタイトル変更しています。

城での一時

「ソルーティア」

俺は目の前の女性へと言った。こいつはソルーティア。エレスの使い魔だが、エレスを『主人』というよりも『妹』の様に扱っている。当の本人も『下僕』ではなく『姉』と思っている。・・・なんでこんなことを言うかと今と、基本姉妹（兄弟もそうだか）は同じ様に扱って欲しいのだ。つまり・・・

「ゼレカ。貴方は何度言ったら分かるの？私のことは・・・」

「OK、OK。俺がわるかったって、ソル」

『妹』であるエレスを特別な呼び方で呼ぶ様に、自分も特別に呼んで欲しいということ。まあ、この時も悪戯心が芽生えたからなのであるが、前に一度からかいすぎたところ『地獄（此処は魔界であるが）』のような目にあわされた。・・・あれは辛かった。まさか

「ゼレカ。何を考えているのかなあー？私に教えて欲しいわー」

「いえ。なんでもないです」

心を読まれたあー！！

毎度毎度のことながら不思議だ。心の中なんて読めるものなのか？

「ソル。どうしたの？」

「エレス！！怪我とかしなかった？」

「うん！大丈夫だよ」

「それならよかったわ」

「！ソっ、ソル。くっ、苦しい」

目の前でおきてるやり取りをみていると、本当の姉妹のようだ。ソルも髪の色が水色で、紅い瞳だから一見するとどっちがどっちか分からない。決定的な違いは、身長と髪の長さ。身長は俺よりも少し小さいぐらいで、髪は後ろで結んでいるエレスとは違いそのまま垂らしているだけである。

「それはそうとソル、何か用があったんじゃないのか？」

「それは今のであらかたかたずきました」

エレスを弄るのが、大半かよ。

「ただ残りの用事が、『この城下街に向かってくる、魔物及び人間達の排除』というのを貴方に伝えることでした」

「ふーん。って、おい！明らかそっちのほうがでかい用事だろ！」

「何を言ってるんですか！エレスを弄る方が重要ですよ！」

「わかった、わかったから。だったらさっさと片付けてくる」

「ゼレカ！！また行っちゃうの！？」

「すぐ戻ってくるさ。だから大人しく待ってて」

「・・・本当に、本当にすぐだよ？」

「ああ。かえってきたら、エレスの大好きな『あれ』を飲ませてあげるから」

「本当！！だったら尚更早くかえってきてよ」

「もちろん。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

「気をつけて」

「ああ」

そうやって俺は走り出した。

城での一時（後書き）

デ「とりあえずのメインヒロインはできましたね」

ゼ「俺は『とりあえず』という言葉が気になるんだが」

デ「そんなことはないじゃないですか。次回はゼレカが楽しみにしていた『戦闘シーン』なんですから」

ゼ「さらりと『さん』をとったな……。まあ、やっと俺の能力が明らかになるな」

デ「とは言っても半分ぐらいしか力をださせないけどな」

ゼ「！もう半分もだすのか！？ちゃんと後々のこと考えてるよな？」

デ「多分考えてると思いますよ。『作者』が」

ゼ「だから、それはお前だろ」

デ「・・・俺としては戦闘の後が一番書きたいんだけどな」

ゼ「何か言ったか？」

デ「いえいえ。なにも」

ゼ「とりあえずは次回から戦闘が始まるので、宜しければ読んでやってください。・・・やっぱり気になる。おい作者」

デ「それではまた次回」

ゼ「逃げやがったな！あの野郎！！」

攻攻戦（前書き）

GW疲れなのか、体調を崩してしまいました。それでも更新は続けます。

『城一時の』の前書きで「最低五十話は毎日更新したい」と書いたんですが、「最低五十話ぐらいまでは、毎日更新したい」の間違いでした。

毎日五十話ってプロ並のペースですよ。時間があつたらそっちの方も修正します。

間違えてしまったことをお詫び申し上げます。

攻攻戦

「……………それにしても、毎回毎回この量の魔物を仲間にしてるってのは一種の才能であり、俺達にとっては厄介極まりない災厄だぜ」
なんてことを目の前の魔物の、そのまえにいる『人間』達に言った。

ああ、早く城に戻ってエレスに『あれ』を飲ませたいなー♪
……………さて。そろそろ片付けるか。

「覚悟しろ！悪魔め！」

おおー。威勢のいい剣使いだな。

「ちょっとー！油断しないでよ」

魔法使い（メイジ）にみえるが賢者だと思う。

魔法使いと賢者は放出してる魔力が若干違うからな。

「二人とも。目の前の敵から目を離すな」

ふーん。この魔法剣士が司令塔か。

「うるせーな！そんなことは言われなくてもわかってるよ」

「覚悟してもらおうわよ、魔王！」

…………… why? 今何か聞き間違えかもしれないけど、おかしい言葉が聞こえた？

「……………おい、人間ども」

ちょっと声色を低くしてみました♪

「何だ？魔王」

……やっぱり、俺を魔王って言った。聞き間違えじゃなかったな。

「クククっ。俺が魔王か。残念ながら俺は魔王じゃない」

「「「!!?」」」

つまるところ、俺はRPGラスボス前の中ボスってことだ。

だけどチートを標準装備してます。謝る気はないけど、ゴメンなさーい♪

「くっ、まだこんな奴がいたなんて」「命ごいは済んだか？」

そう言って俺は魔力を右手に集中させ、棒のような細長い槍を創った。

『深淵の槍』
ランサー・ソロ・ダーク

俺はその槍を人間達の後ろにいた魔物達に投げた。

「「「!!」」」

「なっ！」

俺の投げた槍の周りにいた魔物達が一瞬で消えた。

消えたわけじゃないんだけど。

「そっ、そんな馬鹿な!!」

「魔物達の数は一千万はいた筈だぞ!」

説明ご苦労♪

簡単に言うと、人間達の後ろにいた魔物達はあと四百体程になっていた。

消したわけじゃなくて、正確には『浄化』したんだ。

これである魔物達、はまた俺達に従ってくれるだろう。

「皆、距離をとれ。いつも通りにやればこんな……や………つ………」

ゴキッ!!

長々喋ってる間に一気に近づき、頭を持って首の骨を折った。

「アイザック!!」

「よくもあいつを!」

そんなことはお構いなしに俺はアイザックと呼ばれた魔法剣士の血を抜き、瓶に詰めた。

「何をしてる!! やめろ!」

さて、血を全部抜き採ったから……

「そんなに返してほしければ、返してやる」

白く、冷たくなった身体を放り投げた。

「遅い」

投げつけた後に、自称神にえられた能力の一つ、『想像創造』をつかい一本の『刀』を創った。

『黒刀・鎌鍵』

鎌のような形状をした刀。

その刀で魔物達を斬りつけた。「いくぞ。『命刈り（ブレスキラート）』！」

周りにいた魔物達はみるみる黒い液体をまき散らす。

ある物は、頭をとばしても向かってくる。

ある物は、肉片になるまで暴れる。

「はははっ、はははっ、ハーハーハっ！」

生きてるものを刈り取る刀

「なっ、何だコイツ!？」

「ばっ、化け物!!」

………おおーっと、危ない危ない。つい狂っちゃまった。

「それじゃあそろそろ、魔王様の為に死んでもらおうか」

「いつ、嫌っー!」

「助けてくれー！」

「……見苦しい」

そう言って、刀を振るった
ザシュー！！

――

――

――

「さーってと、服が赤くなっただけど戻るか」服だけじゃなく髪も赤いけど早くエレスに会いたいから、おとす前に先に会おうかな♪

浮かれた足どりで城に帰るのが自分でもわかった。

――

――

俺が後にした場所には生き物が残ることはなかった。

攻攻戦（後書き）

デ「改めて、作者の代弁者のデインです」

ゼ「本当に改めてだな。何かあったのか？」

デ「いや／＼なんとなくもう一度いっと思うって」

ゼ「そうか」

デ「ところで、戦闘のほうはどうでした？ゼレカさん」

ゼ「あれで半分もだしきったのか？俺はまだまだ半分もだしてなかったけど」

デ「まあ、これからチート能力もばんばんだそうと思うのでガンバッて」

ゼ「武器想像もそうだけど、魔力を……魔法なんかの技を使いたいぜ」

デ「さて♪次回はいいよ俺が書きたかった話だ」

ゼ「……ちなみにきくが、どんな内容だ？」

デ「……ガンバレっ、ゼレカ」

ゼ「何が！？」

ぽんっ

デ「身体、大事にしろよ」ゼ「何故肩を叩いた。それに身体って…」

デ「それと、後書きと本編の方を少しだけ変えました」

幸福物質（前書き）

今回は早く書きたかった話です

本当はもっとピンクムードにしたかったんですが、自分の文才のなさが災いして温めになりました。

それでも一応ピンクです。

苦手な方は御注意ください

幸福物質

とりあえず今、俺は城の中に戻ってきた。

服は魔物の血が、髪は人間達の血で真っ赤になっている。

その格好のままで俺は玉座の間に来た。

理由は簡単。早くエレスに会いたかったからだ。

そして、俺は、扉に手をかけた。

「ただいま」

「ゼレカ！！」

「っと。待たせちゃったね」

「もっと早く帰ってくると思ったのに」

「ゴメンごめん」

「ゼレカ。早く」

？俺はなんのことか分からなかった。が、

「ああー。でも、シャワーを浴びてからね」

「シャワー浴びるの？だったら私も…」

「却下」

「即答!？」

「いや、普通にまずいだろ。一緒は」

「ムウゝ。大丈夫だよ」

「はいはい。とりあえずシャワー浴てくるから」

「あつ、ゼレカ!！」

ガチャン

エレスが何か言い終わる前に俺は扉を閉めた。

ドアの中

「ふふふ。ゼレカ、覚悟してなさい」

ドアの外

ゾクゾク!!

今何か悪寒がした……気がする。

「……………さっさと入ってくるか」

———今おもえば、この時に対処しておくべきだった

脱衣所

此処は魔界だけど、血のシャワーがでるわけでも、マグマの湯舟でもない。

俺が創ったんだが、普通の露天風呂と大差ない。

その露天風呂がエレスやソルにも人気だったという、ある意味衝撃だった事実。

なーんて思いながらコートを洗濯し、扉を開ける。

カラカラ

扉を閉めて、身体についた魔物の体液と髪についた人間の体液を洗いながす。

鏡をみると俺の髪が黒ずんだ赤から、漆黒に戻っていた。

チャポン

「ふうー」

湯舟に入ると、つい声がでちまう。これはこの世界にくるまで、つまり殺されるまえからのことである。

それにしても戦闘のあとの風呂は気持ちいい。

チャポン

……………今の音は？もしかしくても……………

「ゼレカ♪あんまり遅いから入っちゃった」

……予想的中

「遅いって、入ってからまだ十分もたってないだろ？」

「？なんで後ろ向いてるの」

「なんでもなにも、タオルまいてないだろ」

「ふふふ、何言ってるの。ちゃんとまいてるよ？ゼレカのエッチ」

「!!」

落ち着け。落ち着け俺。ここで洗濯をミスったら……って選択をミスってる!？

「それよりゼレカ。ここは温泉だから、ここの方が飲みやすいよ」

「ああっ、それもそうか」

振り向いて『あれ』を飲ませる準備をした。

少し鼓動が高まった気がする。

本当にタオルをまいていた

「ゼレカ、顔が赤くなってるよ？」

「／／／何でもない」

そして、おれは……自分の指の皮膚を歯で噛み切った。その指をエレスの口に運んだ。

「はむっ♪」

「!!、くっ」

「チュツ、ハア、チュツ、ンツ」

血を吸われてる時は、痛みを抑える為に快楽成分の含まれた唾液をだしているらしい。

その結果が今の状況

普通の露天風呂で今みたいなカップルがいたら、まず間違いなくピシクなことをしていると思われる。

「クチュ、ズチュ、ハア」

吸血鬼にとって人間の血は最高の代物だから、血を飲んでる時とはとても恍惚している表情だ。

「クチュ、……ゼレカ。もう止まっひゃよ」

「あっ、エレス飲み過ぎだよ」

「ゼレカの血だから、ツク残しなくなかったノ」

酔って潤んだ瞳。そしてここは露天風呂。もちろんのこと、入浴中なので（タオルはあるが）お互いなにもきていない。

……理性が音をたてて崩れるかもしれないが、

「だからって酔うまで飲まなくても……」

……それ程俺が好きならいいかな。

「俺もエレスのことが好きだよ」

「ふえ!?!」

そうして、俺はエレスと唇を重ねた

「チュク、ズルツ、ン」

「ぜっぜレカ!?!今、わっ、私ぜレカと……。キュルーン／／／」

「おおっと」

倒れる前にエレスを抱えた

……抱えた?

今改めて自分のおかれた状況を確認する

……どうすることもできなくね?

仕方ない。あんまりやりたくない手段だけど……

とりあえず、自分で手ぬぐいを創って、目隠しをした。

非常事態だから目隠しなんてしなくてもいいかと思ったが、本人の了解も得ないでみるのはまずい。

……エレスが起きてたら俺の目隠しをとってるだろうが、それでも了解をとらないことには自分からはしない……と思う。

理性が崩れなければな

その格好のままエレスの身体を拭く。

……今の自分を客観的にみると自分に、『どんなプレイだ!!』とツツコミたくなる。

自分の身体も拭き、新しい服を創造する。後は……

「おい、ソル。エレスのことを頼みたい……………」

「はいっ!! わかりました!!」

言い終わるか、終わらないかの速さで来た。これで大丈夫だろ。

「ああ、エレス。今の貴方はなんて可愛いらしいのー♪♪服を着たら私の部屋に行ってあーんなことや、こーんなことをしましょ」

……………これはこれで別の問題が発生しそうだけど、勝手に入ってきたってことで

「それとゼレカー。明日にでも戦いの報告をしてもらいたいんですが」

「それなら今……………」

「『明日』お願いします」

「……………はい!？」

なんだ！？今の！恐怖以上の何かだ。

……………ごめんエレス。明日また血飲ませてあげるから。

そのまま俺は部屋に戻った

幸福物質（後書き）

デ「書きたかった話がやっと書けました」

ゼ「遺言は一文だけゆるしてやる」

デ「ちょっ、ゼレカさん、穏便にいきましようよ。お」

ゼ「一文おわったな。『斬刀狩り』！」

デ「おっと。危ない危ない」

ゼ「ちっ。弱点を知ってたか」

デ「もちろん。真上までは居合がとどかない」

ゼ「まあいいさ。それより、こんな調子でいいのか？」

デ「そういうと思ってゲストをつれてきた」

ゼ「ゲスト？」

デ「エレスナーグさんです」

エ「こんにちわ」

ゼ「!! エレス……」

エ「ゼレカ。あのタイミングで好きって言うてくれるなんて……私

嬉しいですよ」

ゼ「そっそうか／＼／

エ「でも、あのままもつと『楽しい』ことができたらよかったのに」

ゼ（はははっ。それはそれで俺が困る）

デ「ふふふっ」

ゼ（ゾクっ！）

デ「エレスナーグさん。その願い叶えて差し上げましょう」

エ「本当にっ！！」

ゼ「まてっ。本編でそんなことやっていいと思ってるのか！！」

デ「確かに、『本編では』そんなことはまずい」

エ「そうなんですか？」

デ「だがっ！！『後書きなら』何をやっても許される。何故か？それは、『俺が作者だから』だー！！」

エ「すごいですー！！デインさん」

ゼ「ちょっ、待った！！」

デ「なんだ今更。せいぜい『遺言』とか言ったこと、後悔するがいい」

ゼ「なっ!!」

デ「エレスさんは、どんな罰が……間違えた。どんなことがしたい？」

エ「私はとことんゼレカを弄びたいです、デインさん!!」

デ「クククっ。とことん弄ぶかつ。なら『チート能力封印して、女体化』がいいかな」

ゼ「考え直せデイン、エレス!!それにいつのまにか仲良くなってるし」

デ「さうて（黒笑い）次回の後書きが楽しみだなあ」

エ「私も楽しみになってきました」

ゼ「……俺は今すぐ『明日』を壊したいぜ。俺から全てを奪ったアイツに」

デ「シリアスモードになっても、無駄だぞ」

ゼ「ちっ」

デ「それでは……」

デ・エ『次回へ』

ゼ「次回よ。こないでくれ!!」

泡沫会話（前書き）

今回はシリアスです。

そして予告通り後書きで『罰』をやります!!

泡沫会話

「ふう」

俺は風呂から戻ってベットにのった。

ベットの上からみる天井は、何かを錯覚させる。

「今日もいろんなことがあったな」

そういつて、俺は目を閉じた。

――

――

――

――

……………ここは……………。

ああ、……………あれか……………。

いつもの……………『夢』。

「よう、ゼレカ」

こいつが俺にチート能力を与え、黄泉がえらせた自称『神』

「おい、その呼び方をするな。俺のことは『マムート』と呼べといったろ」

……神であるのかなのか、俺の心をよめるらしい。……そんなことより。

「何か用があって現れたんじゃないのか？」

「ああ、そうだ」

「だったら早く用件を言え」

「…………お前の気持ちが変わってないか、聞きにきた」

「なんだ、そんなことか。『俺は友人と恋人を目の前で殺され、俺を殺した奴を許さない』ってことだろ」

「気持ちは変わってないようだな。『あの時』よりも正確に受け答えができてるな」

「当たり前だ。『あの時』は事件の直後だったからな。…………今とは違う」

「気持ちが変わってないようで、俺は嬉しいようで悲しいがな」

「黄泉がえらせてもらった時は驚いたが、今となっては普通のことだ」

「そういえば、お前魔界にきてどのくらい経った？」

「確か一ヶ月くらいだ」

「…………そうか。魔界と下界じゃ時間の速さも違うからな。下界では四ヶ月ぐらいに相当する時間だぞ」

「やっぱりそんなぐらいか」

「時間も伝えたいし、お前が何か聞きたいことがなければ俺は帰るぞ？」

聞きたいことか。なら……

「俺の能力をもう一度確認させてくれ」

「お前の能力か。わかった。

まず一つが『身体能力向上』。これは下界の時のお前よりもいろいろな面で、身体能力が上がっている。

二つ目が『肉体変化』。これは魔力やその属性を付加する能力……というより改造のようなものだ。魔力は魔王や天使よりも上。属性は使い放題だ。

この二つはお前を魔界におとす前に施した能力。『魔神』となったお前の基礎能力のようなものだな。

そして三つ目が『想像創造』。お前が『想像』したものを瞬時に『創造』する力だ。……ただし、生き物を創造することはできない。食糧なんかは大丈夫みたいだが」

みてたのかよ……

「俺は神だからな」

また心をよまれた

「ま、そんな説明でいいや」

「そうか」

「最後にもうひとつ。お前はなんで、俺を黄泉がえらせた？」

「……………それか。それは俺にもよくわからん。別に俺が殺したわけでもないし、お前を黄泉がえらせるように言われたわけでもない。ただ、昔の自分をみているようだったから、かな」

「……………わかった。それだけきければ十分だ」

「なら、俺はもう帰る」

「ああ。……………またな」

「用があつたら現れるからな」

そう言って、マムートは消え俺の意識は闇に溶けた

泡沫会話（後書き）

デ「さーあ！やってまいりました！お待ちかねの後書きタイムです」

エ「うみゅ。ディンさん、私今回出番無かったですよ！」

デ「ごめんごめんエレスさん。ここら辺でゼレカの目的と能力説明があつたほうがいいと思って」

エ「まあ、後書きで沢山出番があるから良いですけど。次回は私
の出番を増やしてください！！」

デ「もっちろん！！明日はエレスさん視点が始まりますから」

エ「そうなんですか！わぁー、明日が楽しみです」

デ「それよりも、予告通り。あれを始めません？」

エ「そうですよ！！それが楽しみだったんですから」

デ「ゼレカの奴はまだ本編と思っているから、今の内に部屋に侵入
してきな。ああそうそう、これも持っていて」

エ「これは？」

デ「通信機のような物だよ。これで合図するから」

エ「わかりました」

デ（ゼレカ。覚悟しろ）

ゼレカの部屋

エ「ゼレカ」

ゼ「どうした？ エレス」

エ「部屋入ってもいい？」

ゼ「いいよ」

ベツトに腰掛けるエレス

エ「ゼレカも隣に座って」

ゼ「はいはい」

ゼ（やっぱり、エレスはおすのが好きだな。自分がおしに弱いのは
気づいてないみたいだけど）

デ「エレス。もういいよ」

ゼ「？あのバカ作者の声がしたきがしたけど」

エ「！！！！覚悟して下さい。ゼレカちゃん」

ゼ「わあっと。いきなり押し倒すなって。……ゼレカ『ちゃん』？
まさか！！」

エ「もう気づいたんですか？…遅いですけど」

ゼ「なんかやたら身体が軽いし、胸も少し重いような……」

デ（それが女体化です）

ゼ「シリアスだからすっかり忘れてたぜ」

エ「それでは早速脱いでもらいましょう♪」

ゼ「ちよっ、まっ……!？」

エ「むう。ゼレカちゃんの胸、ソルより小さいけどそれでも私より大きい」

ゼ「いや、俺男だから胸があっても嬉しくないし」

エ「………かぷっ」

ゼ「!! エっエレス。まっ、だっ…ダメだっ……。」

エ「ジュル、……ぬぶ、はっ……ジュル」

ゼ「なんかっ……、いつもとはっ……、違う…感じ」

エ「ジュル、……ゼレカちゃん……可愛い声です、」

ゼ「本当につ、……エレスは……おすのが……好きだな」

エ「そろそろ……限界ですっ!!」

ゼ「!! まっ、エレス!!」

———18歳未満閲覧禁止中———

デ「エレスさんが限界をむかえられた為、ゼレカの無事を祈りつつ
祈らないように終わります。後日談は次回の後書きに載せますの
で」

会話の外（前書き）

今回はエレス視点で書いてみました。

前話の現実でおこっていることですので、お間違いなく。

会話の外

私は今ゼレカの部屋にむかっていた。

昨日、ゼレカに血をのませてもらってからの記憶が無いのはなんでもか分からないけど。

／／それに、その時のことを思いだそうとすると恥ずかしいなる。

そんなことを考えてる内にゼレカの部屋についた。

コンコン

いちおうノックを試してみる

「…………返事が無い。ただの魔神のようだ」

…………自分でもわけがわからないことを言った。

いわなきゃいけない気がしたから。

扉をあける。

ギィッ

ゼレカはベットの上にいた

「ゼレカ。もう朝だよ」

私はゼレカの上で足とか腕を踏まないように、ひざまずいた。

……上からゼレカの顔をまじまじと見つめている。
漆黒のような髪が首の付け根までのびて、今はみえないけど緑と黒の瞳が妖しく魅える。

「……うにゅ／＼／／」

改めてみると顔が赤くなりそう。

今へんな声でちゃった…。
はっ!!

そっそうだ!

「ぜ〜れ〜カ!! 早く起きてよ!」

自分が何をしにきたのか思い出した。

「おい? ゼレカ?」

何をしてもし起きない。

「むにゅ。……そっか。何をしてもし起きないなら……。」

私は、ゼレカの口に私の口を重ねた。

「…はあん……ジュル……っんふ……」

私、ゼレカとキスしてる。

「…グチュ……ふっ……」

.....

キス！？わっ私が！？えっ、えーと！？

「きっキュルーン／／／」

そこで私の意識が途切れた

会話の外（後書き）

ゼ「…………あれ？俺なにしてたんだっけ」

デ「しりたいかな？ゼレカ」

ゼ「ああ。お前がいるから『後書き』ってのは分かるが」

デ「昨日、『後書き』で何してたかな？」

ゼ「昨日？確か…………あっ！！」

デ「思い出したようだな」

ゼ「…………ああ。思い出した。とりあえず刺されとK…」

デ「その格好でそれをいう？」

ゼ「ああっ？身体は元に戻って…………」

デ「戻ってるな。身体は」

ゼ「！？なんで何も着てない！？」

デ「思い出してないのか」

エ「はぁむ。あれ？おはようゼレカ。それとディンさんも」

ゼ「！？ちよっ、エレス！！なんで何も着てないんだ！？」

エ「何いってるの？ゼレカ。昨日はあんなに《自主規制》したのに」

ゼ「いやっ、それはともかく…」

エ「朝から《18歳未満禁止》するの？ 私は準備してるけど」

ゼ「はあ！？ 何言ってる…」

エ「（キラーン☆）それでは！」

ぴとっ

エ「…………柔らかない」

ゼ「もう戻ってるよ」

エ「…………え？ ……………それじゃあ…………／／／／／！！！！！」

ゼ「どうした？ エレス？」

エ「…………二人とも、出てて！！！」

ゼ「ちよっ、何が…」

エ「いいから出てて！！」

——部屋の外

ゼ「イテッ！ いきなり魔王の力で放り出さなくても」

デ「俺途中から空気だった」

ゼ「確かなに。にしても、突然なんだ？ こいつはともかく、俺は昨日散々果てさせたろ」

デ「うわー。こいついきなりなんてことを。マジでうわー」

ゼ「うるせえ」

デ「エレスはおすのが好きだから、おされるのは嫌いなんだぞ」

ゼ「つまり、昨日は俺が『女』だったから大丈夫だったのか？」

デ「当たり前だろ。男女と女の子同士は違うんだぜ。……俺もお前も覚悟したほうがいいかもな」

ゼ「あっ？なんでだ」

デ「そんな気がするだけ。それよりも、次回またお会いしましょう」

ゼ「いきなりしめやがった。まあいいか。感想・誤字脱字・不満・リクエスト等がございましたら遠慮なく書いてやって下さい。それではっ」

———部屋の中

エ「もうっ。ゼレカのっ、バカ」

会話の後の後（前書き）

毎日更新してますけど、なかなか話が進まない今日この頃です。

前話の後のゼレカ視点です

会話の後

「……ん？」

マムートと会って、目が覚めたみたいだ。

それにしても、やたら右腕に違和感を感じる。

右腕に目をやる。

「すう……すう……」

エレスがいた……いた！？おっ落ち着け、O☆T I☆T U☆K E俺。
あああ、やっぱり錯乱してる……混乱？そんなことはない！！

気を落ち着ける。

「ふう」

……やっと冷静になった
あれこれ考えても始まらないから、エレスが起きるまで待とう。

「……………」

エレスは俺の右腕を枕にして寝てる。

気持ち良さそう顔をしてる。

「……………」

どれくらい経ったか分からない。それだけ、眺めているんだろう。

「……」

このまま眺めてたら……理性が破壊されそう。

よし。後十分で起きなければk…

「ん……うにゅ？」

……馬鹿なこと考えてる間に起きた。

「おはよう。エレス」

「あ、おはよう」

「エレス、君はどうして俺の部屋で寝てたんだ？」

「え？それは……」

（ぽっ／＼／＼）

「何故に顔が赤くなる？」

「なっ…なんでもない！」

「そっ、そうなんだ!？」

「そうなの。あっ……それより、ソルがよんでたよ」

「ソルが?……ああ。だいたいわかった。それじゃ、行こうか」

「うん！」

「……」

「……？」

「……」

「ねえゼレカ、行かないの？」

「行くよ。……着替えてからね」

「じゃあ早く着替えなよ」

「……わかってて言ってる？」

「何を？」

「着替えられないだろ、君がいたら」

「昨日、一緒にお風呂入ったのに？」

「……／＼それとこれとは別だろ」

「大丈夫だよ（黒笑）」

「……わかった……って言うと思ったか！！」

「！！」

そういつて、エレスを部屋の外にだした。

「ちょ、ゼレカ！？なんで！？」

「なんでもなにも、君の前で着替えたら後ろから襲うだろ！」

「もちろんでしょ!!」

「ほら、みろ！すぐ着替えるから、そこで待ってろ!!」

「むう」

——部屋の中

俺はエレスに聞こえないように言った。

「……………はぁー。全く、無防備なんだから。俺以外にはこんなことすんなよ」

会話の後（後書き）

デ「人は何かを捨てなくちゃ、生きられないの？」

ゼ「……なんだ、突然？」

デ「いやー、今日買ったゲームを遊んでたらメモリーがいっぱいだったから」

ゼ「そりゃ、画像やらビデオやらアップデートデータがあんだけありゃ、容量もいっぱいだろ」

デ「いつの世も、用意周到な奴が生き残るのさ」

ゼ「つまり新しいメモリーを買ってあったと」

デ「全部あてんなよ！！もれなく全問正解だ！」

ゼ「なんとなく分かるんだから、しょうがないだろ？」

デ「いいけどさっ」

ゼ「だいたいなんだ？その名言？みたいなのは」

デ「即興で思いついた」

ゼ「……そうですか」

デ「そんなことより、今日下校中に雨が降ってて考えついたことが

ある」

ゼ「なんだ？」

デ「Yシャツ着て雨に濡れると、すごい透ける」

ゼ「それが？」

デ「『後書き』か『本編』でお前とエレスにやらせてみようと考えた！」

ゼ「何言ってやがる！？」

デ「あつ、エレスと『ゼレカちゃん』でもいいよ」

ゼ「……止まれないなら、壊せばいい。それが壊れた玩具の処理方法だ」

デ「言ってわからなきゃ力づくで、ってことか」

ゼ「そういうことだ」

デ「じゃ近い内にどっちかでやろうかなー」

ゼ「壊れろっ！」

仕事報告（前書き）

たまには、パソコンで書いてみようかと思う今日この頃です。

仕事報告

今、玉座の間にきている。

俺が着替えるから部屋の外にだしていたエレスが魔王の力で部屋をぶち破ったり、「着替えが終わった」と言ったら「じゃあまた脱いで♪」とか言われたりしたが、まあなんとか玉座の間に着いた。

……つくづくエレスはおすのが好きだって思った。

っと、そんなことより

「やっと来てくれましたか、ゼレカ」

「ああ悪い悪い。いろいろとあったからな」

「それより…」

「昨日の報告だろ？」

「…話が早く助かります。では、昨日葬ったのは？」

「セイントペガサス 一匹

下界に毒された魔物 三千匹

勇者と思わしき人間 三人

……かな」

「ペガサスの方は昨夜の内に毒しましたし、人間は消滅を確認しましたが…」

「魔物は全て『浄化』した」

「そうですか……。わかりました」

「ああ、後、人間から採取した『血液』を一瓶」

「……………。それで、どうするのです？」

「……ぷっ！ハハハハハっ！ソっ、ソル！今の瞳の動き方！ハハハっ！！」

「／／こほん。ゼレカ、笑いすぎですよ」

「ハハハっ、わっ、わるい。……ごほっ……。ふう、落ち着いた。ああ。好きにしていよいよ」

「そうですか。では、私が飲ませて頂きましょう」

「じゃあ報告はこのぐらいで大丈夫か？」

「大丈夫ですよ……………」

ん？今の間が気になるけど、

「なら……………っほっと」

そうって、異空間から瓶を取り出した。

「では……………」

「仕事。今日無かったよな？」

「ありませんよ」

「なら、久々にエレス連れて城下街にでも行くかな」

「それでは、エレスに『何かあったら、直ぐに私をよんでね』とお伝え下さい」

「……相変わらずエレスに対しては言葉遣いが違うな

「伝えとくさ」

「……それと。ゼレカもお気をつけて……」

「……ああ」

今、一瞬ソルの表情が変わった気がした。

そして玉座の間を後にした

——玉座の間

「……たまには貴方の血を飲ませてくれてもいいじゃない」

仕事報告（後書き）

ゼ「海に行きたい」

デ「…………どうした？突然」

ゼ「なんか無性に海に行きたいんだ」

デ「失恋？」

ゼ「今日もエレスといろいろしてた」

デ「嫉妬？」

ゼ「ソルには微笑まれた」

デ「ストレス？」

ゼ「髪質も変わってない」

デ「んー……。何だろ？」

ゼ「……山の頂上でもいいかも」

デ「山！？」

ゼ「何だろ」

デ「あー、なんとなく分かる気がする」

ゼ「分かったか？」

デ「…………熱い！」

ゼ「…………あ……………」

デ「今日はいつもの調子がでないな」

ゼ「そうだな」

デ「それにしても……………」

ゼ・デ『熱い！』

下界も魔界も似た様な場所（前書き）

今朝起きたら、肩甲骨が悲鳴をあげていました。

昨日の運動が原因みたいです。

……体、鍛えようかな……。

下界も魔界も似た様な場所

「エレス。今日ってなにもなかったっけ？」

「んーと……なにもない筈だよ」

「なら、久しぶりに城下街でも行かないか？」

「それはつまり、『デート』ってこと!？」

「……そうは言っていないけど」

「まあ、街の中を一緒歩いたり、買い物をしたりするわけだからそういう言い方もしなくはないな」

「……ホントに!! だったら今から着替えてくる!」

「じゃあ、用意が終わったら門のところで」

「うん!!」

エレスは目を輝かせながら走って行った。

俺も、着替えてこようかな

……ん？今の格好？紫の長袖に黒と赤のロングコート、黒を基調とした赤と青が入り混じったボトムに黒の靴。

全身暗い色のファッションはどう考えても『デート』には不釣り合いだ。

魔界でも暗い色が好きって奴は思った程いないらしいからな。

「とりあえず、部屋に行くか」

――俺の部屋

クローゼットから適当に服をだしている。

……なかなかデートって感じの服が見当たらない。

今着ているのは如何にも魔王とかの服だからな。俺は魔神だけど…。

とはいったって、別に城下街に知らない奴が沢山いるってわけでもない。

いつも狩りが終わって帰る時に会うからな。

「おっ……あったあった」

なんて考えてたら下界にいた時に……つまり、俺がまだ死ぬ前にいた場所（人間界）で着ていた服があった。

赤いチェックの上着に黒い長ズボン、銀色のスニーカー、それと鎖の腕輪。

「これならいつもよりは、ましだろ」

上着の下はいつもの長袖を着て、準備完了。

「さっさと門で待ってるか」

俺はそう言い、門へ向かった。

——終焉の門

「……エレス、どんな服で来るかな……」

いつものエレスの服は赤と青のローブを白いキャミソールの上に着て、下は少し長めの青いミニスカート。『ローブを着ていても、スカートまで長くないローブなのは、かわいいから』だそうだ。

「……それにしても遅いな……」

……この後俺は少しだけ、意識を闇に沈めた。

下界も魔界も似た様な場所（後書き）

デ「眠いです」

ゼ「いきなりだな、おい」

デ「最近ゼレカをいじくる気力も無いんだよな」

ゼ「それは俺にとっては良いことだ」

デ「明日は眠くてもゼレカをいじくりまわすので、今日はいじくるのはやめときまーす」

ゼ「なに宣言してんだ!」

デ「ではこの辺りで、お休みなさい」

ゼ「おい、デイン」

デ「…ZZZ…ZZZ…」

ゼ「マジで寝てやがる…」

城下街でのデート（前書き）

今回はいつもより長めです
いろいろと疲れました。

城下街でのデート

——三時間後

「……………」

意識を闇から引き上げた。

寝てる間に来たかと思ったが、気配も物音も立てず来るはずが無いからまだ悩んでいると思う。

「……………もう少し待って来なければ、様子見に行こう」

再び意識を沈めた。

——……………更に二時間後

「……………寝てるのか？」

流石に心配になったから様子を見るに…

「おまたせ」

……やっと来たか。

「待った？」

『凄い待った』

と言いたいところだが、

「いや。俺も今来たところ」

……このセリフは最早デフォルトだ。

「！」

改めて見ると……／／／ヤバイ。今のエレスの格好、凄くカワイイ。

ピンクのパーカーに赤いチェックのミニスカート。そしていつもはただ垂らしているだけの髪を右に結んでいる。

／／／

「どうしたの？あつ、もしかしていつもとぜんぜん違うから見とれてるの？」

「……否定はしない／／／」

「にゅひゅ♪早く行こうよ」

「ああ」

自分がどれだけ待ったかなんて、忘れた。

——城下街

「久しぶりだな」

「うん！」

なんて言ったけど、俺は昨日来たばかりだ。

「何処に行く？」

「んーと……まような」

「だったら、ギルドにでも顔出す？」

「ギルドになら一昨日いったばかりだよ」

「……………ん？」

「あっ！……………なんでもない……………」

「……………なら、服でも見に行く？」

「うん！じゃあそうする」

——服屋『地獄の衣』

「いらっしゃっ！？エレスナーグさんとゼレカさんじゃないですか
！」

「おう。久しぶり、ミラル」

「しばらくぶり」

「なんだ！前もって連絡してくればよかったじゃないですか」

「いや、今日たまたま仕事が無かったから城下街に行こうって事になったから」

「いわゆる『デート』ってわけ♪」

「デートですか。それで城下をぶらついているんですね」

「ミラルは、彼をつくらないの？」

「……おいおい。」

「いやあ、私にはそんな人できませんよ」

そう言ってるわりにはよく告白されるじゃないか。

「あっ！それで用事のほうは？」

「新しい服でも見ようかと思ってな」

「ゼレカさんのですか？」

「いや、エレスの」

「そうですか。では、こちらの棚です」

「エレス、どんな服が良い？」

「ローブかキャミ」

またピンポイントな注文で……。

「ローブだったらこのちょっと短めので、キャミソールだったらリボンが着いてるのかな」

「んゝ……ローブは色がそんなにすきじゃない。あつても、キャミは色も好き」

「じゃあキャミソールだけ買うか」

「そうする」

――城下街

「次はどうする？」

「おそろいのアクセサリが欲しいから装飾店に行きたい」

「装飾屋か……。だったら」

――装飾屋『魅惑の小物』カラン

店のベルが店内に響いた。

「どうも！『魅惑の……』ってエレスナーグとゼレカじゃねえか」

「おう、アレク」

「こんにちは」

……アレクもミラルも基本エレスに『様』を付けて呼ばない。

理由はエレスが『様』付けで呼ばれたくないからだ。

魔王としての器が高いから、ってわけではないと本人は言ってるが、十分だと思う。

「ほお、お二人さん。もしかしてデートかい」

「うん！デートの真っ最中」

「それはそれは。好きなだけ見ていってくれよ」

「揃いのアクセサリーか。どんなのがいいかな……」

「やっぱりおそろいの物は恋人同士は持たなきゃね♪」

「／／／恋人って……」

「あっ！！このイヤリング。ゼレカににあうと思うよ」

それは『羽』がモチーフの緑のイヤリングだった。

「ん？……ああ、良いんじゃないか。だったら、同じデザインのペンダントがいいと思うな」

そういつて同じく、『羽』がモチーフの緑のペンダントを差し出した。

「わぁー！！すてき！うん、これにする！」

「決まったみたいだな」

「ああ、イヤリングとペンダントにする」

「分かった。包装するか？」

「いやこのまま着けるからいいや」

——城下街

このイヤリングは耳に穴をあけなくても大丈夫らしい

「ふっふ。にあう？」

「似合うぜ」

「／／ありがとう。ゼレカもすてきだよ」

「これはどうも。……さて、このあとはスイーツ店にでも行くのが普通だけど……」

「どうしたの？」

「……人気の無い所に行こう」

「? いいけど」

——路地裏

「何しに来たかわかる？」

「わかんないよ」

「……つまり、こういうこと」

そういつて、俺はエレスの口に自分の口を重ねた。

「!?!」

「…ふっ…んっ…クチュ…ジュル…」

「んっ…ふぁあゝ」

口を重ねる前に唇を少し切っておいたから、程良く血が出る。

「クチュ…んっ…はっ」

「ん? もう出ないみたいだな」

「…………いきなり…」

「君にとっては俺の血は最高のスイーツだろ」

「…………一言言ってくればいいのに」

「サプライズがあったほうが面白いからな。っと…………もうこんな時間か。じゃあそろそろ帰るか」

「…………／／／ありがとう」

エレスが小さい声で何かを言ったが、聞こえなかった
「ん?」

「なんでもない。また来ようね♪」

「ああ、また暇な時にでも来ような」

そして俺達は城下街を後に、城の帰路についた。

城下街でのデート（後書き）

デ「どうもー♪」

ゼ「復活したのか……」

デ「復活もなにも、あんなことがあって寝てられるかー」

ゼ「何があった」

デ「PV 8000

ユニークPV 2000 突破!!

これが寝てられるかー」

ゼ「そうか。それは嬉しいことだな。今まで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。これから何とぞよろしくお願いします」

デ「それを記念して次回は特別企画をやろうと思います」

ゼ「特別企画？」

デ「はい。なので次回は本編をやめて外伝にします」

ゼ「……嫌な予感しかしないが……」

デ「というわけで次回、お楽しみに」

外伝というか企画『記念話』（前書き）

デ「今回はggggdになりました」

ゼ「收拾がつかなかったじゃねえか！」

デ「ほのほのあまあまggggdしています」

外伝というか企画『記念話』

「いや、外伝ですねゼレカさん」

「おいてめえ、何出てきてんだよ」

「ちっちっち。今回は本編が後書きの様なもんだから、俺が出てきても大丈夫なのだ」

「はぁーあ、でだディン。記念って何をする気だ?」

「……すいません。何も考えていません」

「おい!!」

「仕方ないので一服してお開きということで。ゼレカは何かいい?」

「……レモネードで」

「OK OK。それじゃあどうぞ」

「ふん」

ゴク、ゴク

ニヤ（黒笑）

「ん? 何だ!？」

ポン

「……大成功！」

「ゴホッゴホッ、おいディ……ン？なんでそんなに身長が高くなってやがる！」

「あはははー、俺が高くなったんじゃないかってお前が小さくなったんだよー」

「ああ？俺が小さくなった？……マジだ」

「それでは改めまして『記念』に『ゼレカを幼児化してみよう！』を始めました」

「この野郎さっきは何もねえって言ってただろ！」

「そーんな、俺が忘れてたと思った？」

「ちっ」

「でもこの提案はとある人が『ゼレカが私より頭ひとつ分くらい大きいから、逆転したい』って言ったから決めたんだけど」

「……誰かはすぐ分かった」

「それじゃあ覚悟を決めたってことですね」

「待つ、だれがそん……」

「じゃあエレスさん、後はどうぞ」

「お疲れさまです、ディンさん」

「エレス！いつの間に」

「はじめから居たけど？」

「俺の後ろに隠れてた」

「……………全く気付かなかった」

「ゼーレカ♪」

そういつてエレスは俺に飛び付いた。

……………後ろには『何故か』ベッドがあつた。

なのでそのままエレスに押し倒される形で、ベッドに倒れた。

「！……………おいおい、いきなりだな」

「えへへ、だってゼレカがこんなに小さいなんて、なんか『弄りがい』がありそうだから……………」

「……………は？」

「いつも私が弄ろうとすると逆に弄られるから、いつか逆転さたいとおもって」

「え？あの、エレスさん…」

「ああ、今のゼレカに『エレスさん』なんてよばれたら弄らないわけには…」

しまった！逆効果か！

「まあとりあえず、弄ろうか！」

「いや、それなら元の身体に戻ってから幾らでもできるし」

「元に戻ったら私より大きくなるでしょ？」

「もちろん！」

「だから今じゃなきゃだめなの」

（くっ、こうなったら『力を解放』して…）

（あっちなみにゼレカ、俺まだこの部屋に居るから）

（デイン！お前まだ居たのか！）

（当たり前だろ。もしお前が逃げ出そうとしたらその身体のまま女性体化させるからな）

（それなんて拷問！！）

（ほら覚悟決めろ、ハヅキ。）

（なんで名字でよんだ？）（文字だけだからわかんないだろ）

（そんな理由かよ！）

「さあゝゼレカ。っと、まちがえた。ハヅキ、おとなしくしててね」

「今は子供だ」

ガシッ

「……なっ!？」

「今のあなたは力も子供並だから、こうやって力づくで押さえ付けることもできるんだよ」

今の状況

幼児化して、エレスにベッドの上で片手首を押さえ付けられてる

……うん、これが逆だったら俺は凄く嬉しい。

「んっ」

いきなりキスされた。

確かにここまで強引じゃないが、俺もしている。

「ぷはっ」

「もう息があがってるよ、ハヅキ。肺まで小さくなってるから?」

「多分な……」

「手だって足だってこんなに小さい」

「いつもより二回りも小さえからだろ」

「つまり、いつもと逆ってこと」

「力で押し負ける程差があったとは……驚きだ……っ!？」

「ふふふ、ホントだ。こんなとこまで小さい」

「どこ触って!？」

「どこって、背中」

「／／いやそうじゃなくって、いきなり服の中に手入れるから…」

「いつもみてたあなたの大きな背中」

「大きいといっても、俺と同じ身長 of 奴の中では俺は肩幅が狭いぞ」

「そうじゃなくって、私を守ってくれる時のあなたはそれだけカッコイイってこと」

「いつもそういうこと言う時は赤くなってるのにな」

「だって今は私が弄ってるから」

「……くっ、忘れてると思ってのに覚えてたか」

「ふふふ、どこまで小さくなったかたしかめてあげる」

「いっいやあ、そんなこと確かめなくても、ってまったまった」

「大丈夫。怖がらなくてもいいよ」

「その割には目が狂った感じだけど」

「ふふふ」

その後俺とエレスは時間を忘れて（忘れさせられて）
《自主規制》
をやって（やらされて）いた……

「俺？ずっと居たけど空気だった」

外伝というか企画『記念話』（後書き）

デ「どうでした？ゼレカさん」

ゼ「どうもこうも大変だったんだぞ！あの後…」

デ「いってもどうせ伏せ字になるからいいよ」

ゼ「まったく。……でもエレスが楽しそうだったな」

エ「私はもっと弄りたかったけど」

ゼ「いや、マジでもう『ハヅキ』にならないことを願う」

デ「ゼレカ」

ゼ「あ？どうした…」

バシヤーン

ゼ「……………」

エ「水びたしになったね」

ゼ「まさか……」

デ「安心しろ。『幼児化』じゃないから」

エ「『女体化』ですよね」

デ「もちろん♪」

零「貴様！！」

エ「零花。そんなかつこうで暴れるとさらに服が透けるよ」

零「……漢字表記なのは女体化したからですね、わかります」

デ「さっさと風呂に入ってこい。もちろんエレスと一緒に」

零「まで、話会おう」

エ「早く行こう、零花ちゃん♪」

零「まっ……」

デ「がんばってねー」

休息後の仕事（前書き）

今日某雑誌を買ったら、とても僕好みの漫画が二つあったので、「たまには買ってみるもんだな」と思いました。

休息後の仕事

城に帰って来た俺達は玉座の間にいる。

「おかえりーエレス！怪我しなかった？」

「ただいまーソル」

……おかしいな。俺はそこまで信頼されて無いのか？

「お風呂に行きましょう」

「うん！」

考えてる内に会話が凄いとこまですすんだな。

「あっそうだ、ゼレカ。机の上の報告書よんでおいてね」

……今のエレスみたいな口調は疑いたくなるかもしれないが、間違
いなくソルである。

エレスと話してる時に誰かと話すと、そのままの口調で話すからな。

「はいよ」

「じゃ、行きましょう」

二人はこの城にもともとあった風呂ではなく、俺が創った露天風呂
に行った。

「……確認しとくか」

そういつて、机の報告書に目をやる。

「なになに……『ナブラート村の影』か……」

概要はこうだ……ナブラート村で、度々おきる事件の元凶を退治してほしい。

ナブラート村はここ、『ニブル城』から徒歩で三日、飛んで一日の場所だ。

「……『テレポート』で行くか」

テレポートは闇と光と土と時が混ざった魔法だ。普通に習得しようとするばただの悪魔が三十年間修業して覚える魔法だ。

「さてと……場所を固定して」

そして俺は跳んだ。

——ナブラート村

「よつと」

ナブラート村に着いたが、別に変わったところは無い。

「おい。誰かいなか」

「……どなたですかな？」

「俺は城からの使い魔だ」

……一応身分は隠しておく

前にゼレカと名乗って切り掛かれたから、その用心というわけだ。

「おお、よく来て下さいました。失礼ですが、あなたの所属は？」

「衛生部隊第二所属アルト・シャートです」

……全て嘘☆

「衛生部隊の方でしたか。それならよかった……」

「怪我人ですか？」

「いえ……それなら『喰らいやすい』からな！」

「……『魔喰』か」

「なに!!」

「そうか……ナブラートの陰つてのはお前達か」

「くっ…何者だ！」

「ただのしがない『衛生兵』だよ」

「くそお！」

「『秘剣・十刃の舞』」
クロスブレード

……さてと、まだ生き残りがいないか調べるか。

まだ気付かれてないみたいだし。

「おい、城からの使いで来た者だが……」

「グア！」

「ギエ！」

そういうと五匹の魔喰が出てきた。

「……面倒だな」

武器を『創造』してまっている。

「『電撃の槍』」
ショックロート

向かってきた奴に槍を向けている。
ただそれだけでいい。

「ギエエ」

向けるだけで槍が勝手に放電してくれる。

俺は黒焦げの『何か』に槍をむけて、

「お前達、こうなりたくなければ目的を言え」

「ぐをおー！」

……どうやら言葉が通じないみたいだ。

「『無双乱舞』派手に消し飛べ」

目の前の奴らを消し飛ばした。

……

「いない！！だれも！」

わざと大声で言った。

「てあー！」

誰かが斬りかかってきた。

「覚悟しろ、魔喰！」

「生き残りか？」

「そうだ。だったらなんだ？」

「背後注意」

「え？」

俺はそいつの後ろを指す。

「ぐをお！」

「しまっ…」

「『雷の舞』
ライトニング」

「ギェエ」

「うん。反応速度、気配察知、筋も悪くない」

「あんたは……」

「俺はゼレカ。城の使いだ」

「城の奴か……ならよかった」

「お前の他に生存者は？」

「……おれの知り合いが……一人」

「そいつだけか？」

「ああ」「だったらそいつ連れてこの村から出るぞ」

「……助けられるよな？」

「どうした、突然」

「いや……なんでもない。場所は愚者の祭壇だ」

「ああ、あの地下の」

——愚者の祭壇

「……シェイド？」

「マリーナ！」

「よかった……無事だったんだ……そっちの人は？」

「ただの城の使いだ。…それより、何があったか教えてくれないか？」

「そうだったな。俺はシェイド、こっちはマリーナ」

「……よろしく」

「どうも♪」

「それで……村の奴が突然魔喰になっちゃったんだ。俺はマリーナを連れて逃げようとしたんだが、何分あいつらの数の多さと強さにな……、それでこの祭壇に隠れたってことだ」

「……ちがう……よ。突然じゃ……なくて、少しずつ……入れ……代わってた」

「無理に喋るな」

「……ごめん」

「……マリーナ、少し手をかしてくれないか？」

「……はい」

「……」

やっぱり、徐々に魔力が吸われてってる。

このままじゃまずいな……。

「……」

「おい、ゼレカ！何してんだ」

「早くこっから出るぞ。このままだったらこの娘は死ぬ」

「！！なにいつて…」

「祭壇に魔力を吸われてってる。ここに長くいたから、もう魔力が枯れてる」

「そっ…そんな！」

「落ち着け。まだ間に合う」

「……何か…来る」

「！」

「ああ、漸く出やがった。シェイド、マリーナ連れてこっから逃げろ」

「分かった。あんたは？」

「俺はこいつ倒したら行く……と言いたいが、この大きさは……」

ゴゴゴ、ゴゴゴ

「なんだ！？地震？」

「シェイド！マリーナ連れて俺に捕まれ！」

「分かった」

「『テレポート』」

——ナブラート村上空

「見てみろ」

「!あれは……」

「あの村全てが魔喰だったんだ」

「そうだったのか」

「……」

こいつ……

「シェイド。降りたら少し遠くまで逃げろ」

シェイドを地上に降ろした

「下から見るとさらにでけえな……」

「ぐももー!!!!」

「勝てっかな?」

俺は嬉々として武器を創造した。

休息後の仕事（後書き）

デ「（読書中）」

ゼ「静かだと思ったら雑誌読んでたのか」

デ「もう三回目だけだな」

ゼ「はえーよ。もらったのってさっきじゃねえか」

デ「……久しぶりに読んだら新しいのが増えてた」

ゼ「お前は単行本派だからな。たまにしか本誌買ってないから、新しい漫画だって増えてるだろ」

デ「その新しい漫画で二つ程俺好みのがあった。……早く単行本発売されないかなー♪」

ゼ「さっきまで『今日の後書きは補足でもしようかな』って言うてたくせに」

デ「あっそうだ。そういえば今回あった技の紹介しないと」

ゼ「……忘れてたのかよ」デ「（読書中）」

ゼ「馬鹿が逃避して読書してるみたいだから、また次回会おう」

デ「言い忘れたけど、本編と後書きを少し変えましたので」

常闇の炎（前書き）

多分、次の話までナブラート村編をやります。

戦闘シーン、楽しいけど難しいです。

常闇の炎

……改めて見るとでかいなー

あの村は直径二百メートルぐらいで、今俺の前にいる魔喰が口を開けた状態でスタンバってたみたいだからとんでもなく大きい。

緑の皮膚、紫色のぼつぼつ、短い足で四足歩行。おまけに目がカメレオンみたい。……総合すると口が裂けている巨大カメレオンだな。

「ぶっー!!」

おもわず吹き出した。

「キエエエエエー!!」

「うるせえな」

剣に炎の魔力を注ぎ込む。

「『焔の一撃』バーニングインパクト」

その剣を目玉に向かって投げつける。

ブシュ、ベチャベチャ

「アアアッアアアア!」

目玉までは届かなかったけど、顎から左の目の下までえぐれ緑の体液が大量に流れでた。

「……キモチ悪い。一体どれくらいの奴らを喰ったら気が済むんだ？」

マリナーとシェイド以外の村の奴は喰ったみたいだから：

「あの二人。逃げられたかな？」

俺はゼレカに言われた通り逃げている。地震の後、村がカメレオンモドキの化け物になったが、こっちに気付いた様子はない。

「……シェイド……あの人は……」

「ゼレカはあいつを倒したら来るって」

「……あの魔喰……は……弱点を……壊さないと倒せない」

「何だって！なら早くゼレカに……」

そういつて振り向いたら、カメレオンモドキの触手が無数に迫っていた。

「斬っても斬っても死なないな」

カメレオンは右後足と左前足が無く、胴体は緑の皮膚が更に緑になり、顔は至る箇所に傷がある。

……やったのは俺だけ☆

「ウヲエ？ニア、グワァー！！」

「なんだ？」

紫のぼつぼつから触手が生えている。

それを後ろに……

「まさか！！」

マリーナとシェイドか！

「させるかよ！テレポート！」

二人の場所に跳んだ。

「くっ、ここまでか。ならマリーナだけでも、『静寂の壁』！！」

「…しっシェイド！無茶はっ！」

「駄目ならお前だけでも！」

「シェイドー！！」

ザシュ

「……生きてる？」

「危ない危ない。まさかこっちを狙うとはな……侮ってたぜ」

「ゼレカ！どうやって…」

「説明は後。今はコイツを……どうするか！」

剣に力を込めて触手をぶった斬る。

「なかなか死んでくれないからなあ」

「……祭壇だ」

「何が？」

「そいつの弱点。さっきの祭壇だ」

「……成る程、やっぱりか。あそこが一番魔力の変動があったからな」

「気付いていたの？」

「マリーナ！？身体、大丈夫なのか？」

「えっ……うん。治ってるみたい」

「あー、さっき俺が魔力を流し込んだからな。でも俺の魔力……属性はあわせたけど、だからあんまり無茶はしないほうがいい」

「あつ、ありがとう」

「なーに、お安い御用ですよ。それからシェイド、さっきの魔法で守っておけ」

「ああ……」

「敵からじゃない。俺から、な」

「え？」

「テレポート」

ヒュン

タツ

「さーてと。祭壇だったけな」

カメレオンの中の祭壇にテレポートした。

「んー、まとめて吹っ飛ばせばいいか。……ん？」

足を止めて『それ』を見る

「……祭壇の下……腕輪かな？」

銀色の腕輪が祭壇の下にあった。

「持って帰っても大丈夫だろ。それに、俺の記憶違いでなければこれは……」

「ギエエエエエオオ！」

「うるさくなつたな。じゃ、片付けるか」

右掌に闇と炎の魔力を溜める。この技は俺のお気に入り技に入る程の威力だからな……。

自分の回りには光と水の壁を展開する。

「《全てを包む闇よ、炎の如く侵略し如何なる敵をも焼き尽くせ》、魔力解放32%。『常闇の炎』ジェノサイドダウン！！！」

たまには詠唱もやってみようと思って詠んでみた。

……実際、詠唱すると威力も増すしね☆

——荒野

「あつ、おい」

「跳んじゃたね」

「ああ。それよりも本当に大丈夫なのかマリーナ？」

「ええ。あの人に分けてもらった魔力があるから、なんの不調も無くなつたわ」

「そうか、なら良かった」

「キエエエエエオオ！」

「くっ、また触手が！」

そう思って、壁に注いだ魔力を最大にした。

「あ？え？お、お？」

「なんだ？」

「なにかあったのかな？」

カッ！！

次の瞬間、カメレオンモドキの体が爆発した。

——祭壇

俺は『常闇の炎』を回りに散らした。

この真っ黒い炎は俺の意志を確認するまで増え、燃やしつづける。消えても消えてもすぐ増える、本当に『炎の様に侵略する闇』だ。

カッ！！

そして、こいつの体が爆発した。

「……やり過ぎたかな？」

あの二人まで吹っ飛んでなきやいいけど。

「テレポート」

シュッ

——荒野

「けほっ、けほっ」

「ゴホッゴホッ」

カメレオンモドキの体が爆発したら、後には何も残っていなかった。

あの巨大な体が吹き飛んだことは一目瞭然だ。

それに、俺の『静寂の壁』まで無くなってる。俺はまだこの魔法を解いていない筈だが、それすらも無い。

「……ここまでだとは」

シュッ

そんなことを考えてたら、そいつが戻って来た。

常闇の炎（後書き）

ゼ「なあエレス、何を真剣にやってるんだ？」

エ「料理」

ゼ「……何を作っていらっしゃるのです？」

エ「こっちは『地獄魚のムニエル』で、そっちは『針山草と苦隋のソテー』。で、今作ってるのが『鬼土牛のステーキ』だよ」

ゼ「……名前がやばい」

エ「え？魔界では結構有名な料理だけど？」

ゼ「まあそうだと思うよ。魔界だし」

エ「でもゼレカが作ってくれる料理もおいしいよね」

ゼ「ん、確かに作ると皆食べてくれるな。下界の料理だけど、味覚は悪魔も人も変わらないみたいだな」

エ「私もゼレカの料理好きだよ」

ゼ「それはどうもありがとう。……それよりも、さっきの『地獄魚のムニエル』が暴れ出してゐるぞ」

エ「あれ？おかしいな。作り方まちがえたかな？」

ゼ「作り方間違えて暴れるもんなのか」

――部屋の外

デ」という具合にほのぼのしてましたーってことで」

契約（前書き）

眠いです。

それに試験一週間前です。

……大変です。

契約

「やれやれ、おもわずはしゃぎすぎたな。まさかここら辺一帯を焼き尽くしていたとはな」

『……………』

「ん？その何か言いたそうな目はなんだ」

「どんたけの魔力をつかったんだよ！！カメレオンモドキがいた場所がえぐれてるじゃないか！」

「それは魔力を込めすぎたから。あの場所は『光の安息地』プレスタイフを張っておいたから、修復作用が発動して元通りだ。……………ちなみに『光の安息地』をつかったから俺は無傷であり、ここの衝撃も和らいだってわけ」

「……俺の『静寂の壁』は一点に集中すればたいいの魔法は掻き消せる盾だぜ。それを和らいだ余波を防いだだけでも消えるなんて……………」

「あの、まだ貴方のお名前を聞いていなかったのですが」

「そうか、まだ名乗ってなかったっけ。俺はゼレカ、衛生兵兼空撃隊隊長『夢幻のゼレカ』だ」

「やはり……………」

「何がやはりなんだ？」

「ほら、昨日セントペガサスを一人で倒した…」

「あー、あれがお前だったのか」

「まあな。それはそうと二つ程確認しておきたいんだがいいか？」

「？」

「いいですよ」

「一つ目は帰る場所。ナブラート村に帰るなり修復するけど、村のやつらは全員いないだろう？」

「そのことでしたら、どの道一度『ニブル城下街』に戻ろと思います。魔喰が出たので、両親に伝えようと思うので」

「そうか。だったら、俺が帰る時に一緒に送っていくから」

「ありがとうございます」

「いやいいって。二つ目はシェイド。お前に兄弟っている？」

「シェイド……」

「……構わないよ。ああ、いるさ。でも俺は…」

「『召喚魔獣』だっていうんだろ？」

「!?!」

「お前、それをどこで!?!」

「初めに気付いたのは俺が『他に誰か生存者はいるか?』って聞いた時に、お前は悩んでいた。あれはマリーナを自分の何なのか考えていたから。二回目は、祭壇にいた時、普通の悪魔なら分かる魔力の変動が分からなかったこと。魔獣なら自分の魔力の流れしか分からないからな」

「……流石だぜ。それでさっきの質問の答えだが、弟がいる。あいつはまだ誰とも契約していない『白紙の召喚獣』ノーブリストだ。今は行方不明になってるさ」

「そうか。シェイド、お前の召喚色は銀色か?」

「みての通り銀色の髪、白い眼おまけに小柄と純正の銀色だよ」

「私が契約者になったのも、私の属性が光と水だからよ」

「……やっぱりか」

「やっぱり?」

「ああ、祭壇に行った時にマリーナから流れでた魔力の一部がおかしな方向に流れてたからな」

「私の魔力が?」

「あの祭壇は悪魔の魔力を吸収するためにつくられた物、つまり『魔獣契約者』の力……君を封じるための物ってこと」

「話が見えねえな。それと俺の弟と何の関係が…」

「まだ分からない？ 簡単に言うと、あの祭壇は『魔獣契約者』を封じるための物なのにその魔力の一部がへんな方向に注がれるってこと」

「なんのために？」

「そこでさっきカメレオンを仕留める時に見つけたこの銀色の腕輪」

「！？ そっ、それは！？」

「私の指輪と、同じ！？」

「多分、これはお前の弟だと思う」

「そうか……。生きてたか……」

「この腕輪はお前が持っていたら？」

「いや、ゼレカ。あんたがこいつの主になってくれ」

「……いいのか？」

「あんたなら、こいつを悪いようにはしないだろう？」

「……分かった。じゃ、さっさと契約するか」

「……ありがとう」

シェイドが言ったことは気にしないでおく。

「『我、汝の力を求む者なり。血に刻まれし盟約に従い、顕現せよ。』」

シュワシュワ

光を放ち、腕輪から何かが現れる。

「我が名は『アルフォート』。汝が……などと、今更だな。腕輪から先の顛末を観ていたので、大方の事情は掴めた」

「……フォート、もういなくなったかと心配したぜ」

「私もです、兄上。再び出会えた事を感謝します」

「……良かった、良かったねシェイド！」

「ああ、これで俺の役目はマリーナと一緒にいることだけだ」

「我を呼び出し者よ。汝は我と契約するか？」

「当然だ」

「ならば名を」

「…俺の名はゼレカ」

「あい分かった。我が主、ゼレカよ」

シュン

「腕輪に戻ったな」

「外で活動しない時は違う形になる。それが俺達だ」

「なら、契約も終わったし城下街に戻るか」

「シェイド、指輪に戻って。また城下街に着いたら呼ぶから」

「そうだったな。今はゼレカの魔力だから魔力を使えないな」

「……うん」

「分かった。……ゼレカ弟の事もマリーナの事もありがとな。感謝しても仕切れないぜ」

「俺は当然の事をしただけだ。それに今生の別れてわけでもないだろう？」

「……ああ！じゃあな」

シュン

シェイドが消えた。

「じゃ、掴まってね」

「はい」

「テレポート」

城下街に跳んだ。

契約（後書き）

デ「いろいろとあれでしたね、前は」

ゼ「そういえばお前、前回いなかったな」

デ「最後ちらっと出てたけど」

ゼ「そうだったか？」

デ「そんなことより！次回はゼレカが修羅場を経験します。あつ、本編でね」

ゼ「さらっと犯行予告流すな」

デ「ゼレカとエレスさんの出会いを今日考えていたんですが、それは絶好のタイミングで書きたいと思います！！」

ゼ「あー、あれね。うんうん」

デ「後は補足で『人物&技&場所紹介』も後書き風にやらないとなあ」

ゼ「どのタイミングで」

デ「考え中です」

ゼ「……ふう。明日は修羅場、か」

仕事の後の騒動・前編（前書き）

ヒヤッホー――

………すみません、何かテンション高いです。

仕事の後の騒動・前編

「じゃあな。たまには城に……って、ガードが堅いな。こっちから行くかもしれない」

「はい！ シェイドと二人で楽しみに待ってます」

城下街に着いたので、マリーナと別れて城に戻る。

マリーナの両親は二日前に違う街へ行ったから、連絡だけしてこの街へ残るらしい。

「さあーとと、エレスにばれない内に帰るか」

俺が城を飛び出してから、まだ一時間も経っていない
だからばれずに済むだろ。

――ニブル城・自室

「《報告書『ナブラート村の陰』は多数の魔喰とダミ魔喰カメレオンによる事件であった。生存者は一名。全ての魔喰とダミ魔喰を浄化した後、生存者を城下街に避難させた》っと、こんなもんかな」

生存者をマリーナだけにしたのは、彼女の力を公にしない為。

ばれるとイロイロ面倒なことがあるからだ。

「ソルに渡してくるか」

って、俺独り言多いなあ

——玉座の間

「ソル、報告書を……ってあれ？居ない」

だったらエレスの部屋か？

——エレスの部屋

コンコン

「エレス、居る？」

……静かだ

「……まさか……」

——露天風呂

「……まさか……な」

ドアに手を掛けた

ガチャ

……スゲー静かだけど、服とかあるしなあ

コンコン

「二人とも居る？」

冷静に声をかけた様に見えるが、内心ドキドキもんだぜ。これが俺でなければ八つ裂きクラスの罰だ

「……………エレス？ソル？」

……………おかしい。話声どころか、水の動く音すらしない。

「……………」

意を決して扉をひく

カラカラ

バタン

「……………予想通り」

扉を開けて瞬時に中の様子をみたが、俺が予想した半分が当たっていた。

二人が俺だと気づき罠にはめられるパターン。

もう一つが……………今現実起きてるパターン。

何があったって？……………二人とものぼせてる。

……………何はともあれ二人を介抱しなきゃな。

「クレ……」

クレアを予防としたが、止めた。

クレアは一度妄想にふけると止まらない癖がある。

……こんな状況で真面目だけど妄想癖が強い女使い魔呼んでみ？
リアルゲームオーバーになるさ。

「まいったな。この場所だと一番近くに居るのはクレアだしな……」

……

「……………よしっ」

覚悟を決めて手ぬぐいを創った。

例によって例の如く目隠し用な。

カラカラ

魔力で探知して一人ずつ脱衣所に抱き抱えて連れてくる。

……抱き抱えてる途中、みょーに柔らかい何かに触れた気がする。

……スゲー罪悪感。一応主の為を思ってるんだけど

カラカラ

二人を脱衣所に抱き抱えてきた。

「後は……」

俺のお気に入り魔法の一つである『瞬間装着』リメンチエックを発動する。

『瞬間装着』は服や鎧なんかを一瞬で着る魔法。
カシツカシツ

「ふう……」

二人に服を着せたので、目隠しをとる。

運よく服を畳んで置いてあったから助かった。

……そうじゃなかったら、服を『想像創造』で創らなきゃいけなかったぜ。

「……俺の部屋よりも、二人の部屋の法が良いよな」
何かって？ 運ぶ場所。

「よつと」

まず、ソルを背負ってからエレスを前に抱える（俗に言うお姫様抱っこ）。

テレポートを使わない理由？……魔力の減少。幾ら魔力が枯渇しないっても、あんだだけ魔法使いや疲れるわな。

実際、テレポートは魔力を結構浪費するから。

……重さをほとんど感じない。エレスは普段から抱えたりしてるから知っているけど、ソルもほとんど重さを感じないなんて驚きだ。

そんなことを考えている内に部屋に着いた。

ギィ

エレスをベットに寝かせて、ソルも寝かせた。

「のぼせたんだっけ」

そう思って

『氷解の粒』
アイスブロック
ウインディブレス
『風の抱擁』

二つの魔法を威力を最小にして使っておいた。

この程度の魔法なら今の魔力でも十分まかなえる。

「……後は目が覚めるまで待ちますかね」

仕事の後の騒動・前編（後書き）

デ「ヘタレ」

ゼ「ヘタレたわけじゃない、忠誠心だ」

デ「あれをヘタレと言わず何と言えと？」

ゼ「忠誠心と言え」

デ「……あくまでも忠誠心と言うか。ならば貴様の主に聞いてみよう。…ということ、エレスさんどう思います？」

エ「ゼレカは今のままがいいと思う」

デ「おっと、今回は珍しく意見があわなかった」

エ「ゼレカが積極的になっちゃうと、『あるとき』みたいになるからね」

ゼ「／／／」

デ「……つまりエレスさんがゼレカのことを弄れなくなるのが嫌と」

エ「うん！だって『あるとき』は…」

ゼ「エッエレス！その話はその辺で…」

デ「ゼレカはさk…」

ゼ「罪深き魂を浄化する闇よ。今ここに列を成し滅亡の果ての梯となれ。『闇の道』ダークネスカペロ！」

デ「危ない危ない、逃げた方がいいな」

キシャー

エ「そんなに恥ずかしかったなんて……」

キシャー

デ「なんだこの蛇、追ってくるぞ!？」

ゼ「追えカペロ！」

キシャー

仕事の後の喜び（後編）（前書き）

前回とタイトルは違いますが、前回の続きです。

仕事の後の喜び（後編）

——数十分程前

「ん……ソル、……ふぁ……何して……」

「何って、身体を隅々まで洗ってるだけよ？」

「それは……わかって……るけど……」

「ああ、エレス、なんて可愛いの」

「ふえっ！ソル待っ……」

——『禁断の花畑中』

——現在

「……」

二人ともものぼせたまま起きないな

大体の予想はつくけど、何してたのかな？

「……ん、あれ？私」

「目が覚めた？ソル」

「ああ、ゼレカ。はい、起きましたよ」

「風呂場でのぼせてたけど何があった？」

答えは解りきってるけど一応聞いておく

「エレスを可愛いがってました」

「……………」

予想通りというか何と言うか……

「報告書、机に置いておいたから」

「報告書？……まさか、もう片付けたのですか！？」

「ああ」

「……今更ですが、仕事が早いですね」

……あれ？さっきから話してるけど、ソルがいつもと違う様な……

「……………ゼレカ。一応聞いておきますが、私とエレスを部屋まで運んできたのって貴方ですよね？」

……………あれ？やっぱり怒ってる様な……

「そうだけど……………！？ああ、そういう事か……………」

理解した

「理解が早くて助かります。それで？」

……やばい……めっちゃオーラでてる……

「もちろんの事ながら目隠しをしました」

「……………そうですか。まあ貴方ならそんな下劣なことはしないと、信じてますので」

「当然。二人が意識を失ってる間にやましい事をするなんて、そんな俺に反する事はしないさ」

……心の底から思っていることだ

「今日城下街で何をしたんですか？」

「ん？珍しいな、俺に聞くなんて」

「たまには貴方から話を聞いてみたいと思って」

今日城下街であったことをソルに話した

――

――

――

「……………って具合かな」

「……………やはり、貴方に聞くとエレスに聞いたのと同じくまで違いま

すか」

「？」

「いえ、エレスに聞いた話とはまた違ったように感じられましたので」

「……確かにな。エレスは今日何を想っていたのか？、なんて考えてみたけど分からなかったよ」

「それはそ…」

チャリン

「……？」

「『エレスが渡した方が喜ぶだろ？』って言ったら、『ゼレカが渡して』って言われた」

「……」

「さっき話した俺のイヤリングとエレスのペンダントと同じデザインのアミュレットだよ。さっき渡そうと思ってたけど、時間がなかったから」

「……ありがとうございます」

「ふふっ、どう致しまして」

「…／／／」

「ふぁー、……あれ？ゼレカ？」

「あっ起きた？」

「うん」

「なら、風呂行ってくる」

「うん」

「まだ完全に起きたわけじゃないの？」

「うーんと、まだみたい」

「エレス、ならもう寝ましょ？」

「うん、そうする。お休みゼレカ、お休みソル」

「お休み、エレス」

「……じゃあ私も寝ますのでごゆっくりと」

「ああ、お休み」

カチャン

……さっきのソル、とても嬉しそうだったな

あんなに喜んでもらえるなんて、あれを選んで良かった

「……風呂に入るか」

そう言って風呂場に行く

仕事の後の喜び（後編）（後書き）

デ「はあ……はあ……」

ゼ「ちっ、カペロから逃げ切るとはな」

デ「当たり前だ……俺を誰だと……思っている？」

ゼ「まあいい、今度こそ終わりに……」

デ「頭上注意」

ゼ「は？」

バーシャン

零「………はあー！？」

デ「よう、零花」

零「はめられた……」

デ「次回の後書きは『零花ちゃん』でスタートな」

零「くっ……悔しいー！」

鏡の本音（前書き）

……ああ。シリアス&ダークになりました。

久々の真面目ルートです。

鏡の本音

「……………」

風呂から戻って自分の部屋のベッドに身体を投げ出した。

流石に寝る時はアルフォート……銀の腕輪は外してる

腕に付けてるのに肌には触れず、宙に浮いてるが寝ずらい

「……………」

そんなことを……考えて……意識が……落ちた

――――

――

――

|

『…………せ』

？

『コ……せ』

……

『壊せ!!..!』

……

『全てをマモリタインダロ？ならカントンなはなシだ』

.....

『スベテ壊せばイイ』

.....

『オマエは弱い！！ソンなんでダレカヲ守れルと思っテンのか！！』

.....おい

『キニイラネエ奴、ムカつく奴、ハムカウ奴らそのスベテを無に帰すまでヤツザキにしロ！！できねえナラ俺にやらせろ！！』

.....ちっ、おい！！お前が誰だか知らねえが、俺のやり方に口だしてんじゃねえ！！

『はっ、ようやくこたえタか。オマエが何と言おうガ、いつかは壊れるサダメなんだよ！！』

.....うるせえ！！俺の道は俺が決める！誰にも邪魔させねえ！！

『.....クククっ、ハハハ、ハっハーハはハ！！！！良くりカイしてんじゃねえか。その通りだ！！.....だから俺が何シテも大丈夫ダロ！！！！？』

.....何言っテヤがる？

『その内会エるカもしれないナ！それまでオアズケだ！！』

………今のは？

『おう、やっと来たか』

「………マムート」

『何してたんだ？』

「いや、俺にも分からない」

………ホントにな

『……まあいいか。それより、お前を呼んだのは《あれ》ができたからだ』

……《あれ》？

『いいからいいから、とりあえず目つぶれ。あつ、右目だけでいいぞ』

「………わかったよ。………これでいいか？」

『えいっ☆』

！？

「ぐああああ、ああー！！！？」

なっ何だ！？目がえぐり出された、痛み！

「……はぁ……はぁ……」

少しは、治まった、か？

『《夢幻の眼》。いれといたからな』

「はぁ……はぁ……、それなら……こんな……痛みがあるって……先に
言えよ」

『てへっ☆そこはお前が聞かなかったから』

……自称神め

『自称じゃなくて、本物の神だぜ』

どっちでも同じだ

「……でも、ありがとな」

『………気にするな』

………

「もう用事ないだろ。なければ目覚めるけど」

『使い方は……分かるよな。おう、もういいぞ』

「じゃあな」

フ
ユ
ン

『…………おいぜレカ。あんまり自分を追い込むな』

『……………キヒっ』

鏡の本音（後書き）

零「はぁーい、零花です！皆さん、楽しんでくださいね！零花との、お約束ですう」

デ「……………」

エ「ワハア／＼／／／」

デ「…………ギャップの差がありすぎる。さっきの今だもんなー」

零「うるせえ！！これやんなきゃ更に《幼児化》だって言ったのはお前だろ！」

デ「いやー、さっきまで『スプラッタな死を望むか？』なんて言つて、槍と刀持って追いかけられた後だもんな」

零「なんなら今からでも再開してやろうか？」

デ「丁重にお断りします」

エ「……………」

零「どうした？エレス」

エ「零花ちゃんが…………私にそんなことされてるなんて」

デ「ありゃ、完全に自分の世界に入ってる」

零「…………命の危険を感じる気がする」

エ「…………あれ？私に弄られてた零花ちゃんは？」

デ「こちらに」

エ「なんだ、そこにいたの」

零「エレスに忠誠を誓ったのは《ゼレカ》であって《零花》じゃないから、逃げろー！」

エ「私から逃げきられると思っているの？」

零「くそっ、何時になったら元に戻るんだ!？」

特殊な日（前書き）

暑いです!!

自分の部屋で窓を閉め切って執筆しています。

特殊な日

「……あっ？」

……右目に違和感を覚えた
触ってみる

「……血？」

多分、《夢幻の眼》のせいだろ

「……まあいいか」

右目の血を拭って、身体を起こす

「……今日はなにがあるかな」

ガチャ

扉を開けて足早に玉座の間に向かった

——玉座の間

「おはよう、エレス」

「おはよう、ゼレカ」

「……ソルの姿がないけど？」

「ソルならまだ寝てる」

「へえー、珍しい事もあるもんだな」

「ねっ。それよりゼ…」

キュルルル

「……………」

「……………」

「……………そうか。そういえば今日は城の皆は里帰りだったな。一昨日
隊の奴がいったな」

「……………そっ、それで、だから……………」

「ふふっ、じゃあ何か作ろうか？」

（コクン）

——キッチン

「なにが食べたい？」

「ゼレカが作れる物ならなんでもいいよ」

「つつても、基本俺はなんでも作れるからな……………よしっ、前作っ

た時にエレスが好きって言ってた《サンドイッチ》と《ポトフ》にする？」

「うん!!」

俺は食材を『創造』して調理に取り掛かる

普通に生活してた時は自炊だったから、調理はできる方だ

最も、此処の食材は見たことがない物ばかりだから最初は戸惑ったな……

そうこうしている内に出来上がりだ

「ほい完成っ」と

……えっ？ポトフを作るのに、そんな短時間じゃできないって？

『速出』を使ったのさ

この魔法は……ああまた今度説明するな

「ねえ、せっかくだからバルコニーで食べようよ」

「そうだな。たまにはそうゆうのもいいな」

一応念の為にソルに書き置きしておこう

それから料理をバルコニーに運ぶ

——バルコニー

「いい眺めだな」

「たまに仕事中心で見てるけど、やっぱりきれいだねえ」

此処から見える景色は城下街とは真逆の方をむいていて、『贖罪の山』と『嘆きの川』、『沈黙の平野』の全てを一望できる

そのスケールは地上では見れないようなスケールだ

キュルルルー

「あっごめんごめん。お腹空いたよね」

「昨日の夜からなにもたべてないもん」

昨日はあのまま寝てたみたいだから、よっぽど空腹らしい

『いただきます』

二人で少し早い『昼食』を食べる

「んー、おいしい！」

早速エレスはサンドイッチを食べている

中身はトマト・タマゴ・ハムときゅうりにした

「ふふっ、なら良かった」

「やっぱり、はむっ、ゼレカの料理も、こくんっ、おいしいね！」

「わかったから口の中のもん全部食べてから話しなよ」

「むぐっ、いつもみんなが作ってくれるのと、ゼレカが作ってくれるのってなにが違うの？」

「んー、材料だと思う。俺はいつも想像したのを使っているから」

「たしかに、ここにはないものばかりだね」

「下界で暮らしてた時にあった食材だしな。魔界にはなくて当然だ」

「ふーん」

あれっ、俺のカコバナよりも料理に夢中ですか

「はいゼレカ、あーんしてっ」

……突然のむちゃぶりですね

「自分で食うから…」

シューー！！！！

「……………」

スプーンが消し飛んだ！！

「ごっめーん、むりやりにでも食べさせたかったから」

ちよつとでも動いてたら俺が消し飛んだな

「それならそうと早く言えば良かったのに」

俺は躊躇なく差し出されたスプーンを口にくわえた

「ふふふ、恋人どうしみたい」

「それは光栄な事ですよ」

……少しばかり魔が差したのでからかってみる

「むー、また意地悪なこといってえ」

「ごめんごめん」

「じゃあ罰として、はいっ」

スプーンを差し出された

俺はそれを受け取り、さっきされたことをエレスにした

「はいっ、あーん」

「はむっ」

……それから食べ終わるまで交代でそれを続けた

特殊な日（後書き）

デ「よかったなゼレカ」

ゼ「漸く元の身体に戻れたからな」

デ「いや、そっちもあるけどもうひとつの方」

ゼ「もうひとつ？」

デ「ホントはエレスの罰が『口移しで』ってことにする予定だったんだけどな」

ゼ「何故変えた！」

デ「次の話と内容微妙にかぶるかなって思ったから」

ゼ「じゃあ次回はそういう話なんだな！？」

デ「そうしようと思う」

ゼ「そうゆうことなら今回、これで終わるぞ！」

デ「ちよっ、待っ t…」

Sな彼女とNな俺（前書き）

S……サディストの略

M……マゾヒストの略

N……ノーマルの略

だから何だってことですよね……

Sな彼女とNな俺

やあ、俺は今とんでもない状況にあるんだぜ

どんな状況かって？

自室のベッドで横になって、エレスが俺の上に座ってるって感じだ

えっ？

……………おいおいアルフォート。きじょーいなんて言うんじゃないよ

考えないようにしてたんだから

そもそも何でこんな状況になったかっていうと……………

———ついさっき

「ゼレカ、弄られて」

「わお、大胆発言」

「最近弄られてくれてないじゃん」

「確かにな。こっちに来た当初は……………毎日弄られてたな」

「でも最近、逆に私が意地悪されてる」

「はははっ、いやだなあ。意地悪なんてしてないよー」

「だから、ねっ？」

「まあ、そのうちな」

「…………『我が身に刻まれし魔王の力。我が呼びかけに応え、その力解放せよ。』魔王化！」

ヒュン！！

「…………えっ？」

「はい、捕獲完了」

「捕まっちゃたー」

「何処がいい？」

「自室」

「……まるっきり抵抗しないね」

「もうこうなったら抜け出すのは俺でも至難の技だからね」

てくてく

ガチャ

ぽすん

ドサッ

——今

ってわけだ

「久しぶりにゼレカを弄れる」

「久しぶりの光景だな」

「ゼレカ、どんな気分？」

「なんか微妙に動悸がしてる」

あれ？俺ってM？

クチュ

エレスが口を重ねてきた

もちろん抵抗はできない、というよりしない

ひっしになっているエレスの顔を見てるのが好きだから

「クチュ……ハアッ…ジュル……ん!？」

舌を入れた

抵抗……ではないけど、彼女の仕草をみてたら無意識にしてた」

「ヒュル……ジュル……クチャ……」

「ハッ……ひゃっ……んん!!」

……やばい、歯止めがきかなくなってる

そして徐に拘束を解いて、エレスと俺の位置を変えた

「ひゃあ!!」

「ごめんエレス。そろそろ限界かも」

「……むゝ。やっぱりこうなった」

「はははっ。俺、Sなのかな？」

Mだと思ってたけど

「むにゅゝ、それだと私とおなじ」

「多分大丈夫。自分ではNだと自負してるから」

「私のこんな姿見て楽しんでるのにふつうなわけないでしょ!」

「さあエレス、楽にして」

／／きつ、気持ち良くしてよ」

『自主規制』に発展中ゝ

Sな彼女とNな俺（後書き）

デ「最初に補足、今回の話は前回の話の次の日です」

エ「最初はうまくいくとおもったのに」

デ「『魔王化』までしたのに残念でしたね」

エ「デインさん！どうかしてゼレカをいため……コホン、いじめられませんか？」

デ「押し倒すところまでは良かったけど、そのあとがなあ……よし、なら力を抑える薬品でも作るか」

エ「ホントですか！ぜひお願いします！」

デ「おまかせ下さい」

エ「ふふっ、これでゼレカを……ふふふ」

——ゼレカの部屋
ゾワッ

ゼ「なっ何だ！？今の！」

抑えない衝動・小さな優しさ（前書き）

今日は疲れました。

なので話を考える暇がなかったので突然思いついた話です。

……そろそろ重要な話を書こうかな。

抑えない衝動・小さな優しさ

「覚悟しろ！魔王」

「今日がお前の命日だ！」

「倒させてもらう！」

「……………はぁーあ、面倒だ」

今俺は勇者達に囲まれている

街の皆に被害が及ばないように、街から数十？離れた場所に、まあ自分から跳んだわけだ

……………俺の見立てでは、おそらく勇者が三人いる

その勇者一人に三人程の仲間がいるから合計十二人だ

「どうした、怖じけづいたか！」

「今更後悔しても遅い！」

「滅びるがいい！」

「……………最初に言っておくが、俺は魔王じゃないぜ」
事実だ。俺は『魔神』ではあるが、『魔王』じゃない
魔王は……………というよりも、魔王姫はエレスだ

「なに！？」

「魔王じゃないだと？」

「こいつじゃなかったのか！」

……うん、そろそろこの話し方がうざったくなってきた

「……貴様等、死にたくなければ下界に帰って二度魔界に来るな。」

「誰が帰るもんk……」

「忠告はしたからな？」

右手に剣を、左手に銃を創造した

剣は両刃、銃はマグナムを想像

パン！

「なっ！」

銃の引き金を引いた

……目の前が赤くそまる

「わあー!？」

今ので一人

「後、十一人」

剣を近くの奴の右足目掛けて滑らせる

スパンツ

「え？」

そいつの右足が落ちる

赤い飛沫と白い石の様な何かが見えた

「はぁー！」

ザクッ

後ろから向かってきた奴の首に剣の先端を向けておいた

パン

先程の右足のない奴に向けて引き金を引く

「後、九人」

「くそっ、魔王は女だって聞いてたから倒したら俺の…」

チッ

後ろでウザったい事を呟いたゲスの左手を切り落とす

「あっ……ああ！」

次に左足を、右手、右足、喉、頭、腹……原型を留めなくなるまで
グチャグチャに切り刻んだ

「イラツクんだよ」

溜まったイラツキを晴らすべく、剣と銃をしまう

「魔力よ。『深淵の槍』」
アビスソロランス

闇と風の魔力を帯びた槍をだした

魔力を武器の形にしただけの技だ

それを……回転させて……跳んだ

「ぎゃあ!!」

「ぐわあ!」

「……」

不思議な気分だ

目の前には血の雨、肉塊、白骨が飛び散ってる

のに、どうして俺は……

『ワラッテいるんだろう』

………何だ? 自分じゃない自分に支配されるこの感覚は

………

「はっ!？」

気がついたら周りは赤い水溜まり

勇者一行もいない

「…………やりすぎたな」

「はぁ…………はぁ…」

目線の下から呼吸が聞こえる

「……」

「ひっ!？」

さっきの勇者の仲間かな？

そういえば金髪の女の子がいたな……

「どうした?」

少しだけ威厳のある声をだす

「（がたがたがた）」

怖がらせ過ぎたな……

全く、さっきはどうかしてたぜ

「いや、そこまで怖がらなくても……」

いつもの話し方に戻した

「はぁ……ん……」

ありやりや、ホントにやり過ぎたか

「どうやらお前が最後の一人みたいだな。なに、今更どうもしねえよ。帰るなら帰ってもいいさ」

「わた……しは、貴方に……負けた。どうされても……構わない」

……度胸はないけど、流儀はあるな

「なら下界に戻れ」

「それはできない！アレク達が戻らないで私だけなんて！」

……今少しだけびびった

まさかここまで芯があるなんて……

「……ならば、俺に逆らわないというわけだな？」

「それが私の流儀だから」

「わかったよ。……だったら俺が無理矢理でも下界に帰してやる」

「だから……」

「まあ待て。俺の遊びに付き合ってもらってからだ」
「遊び？」

——下界・パレスト王国

「勇者達はどうしてるだろうな？」

「王よ、勇者達を信じましょう」

「……その問い掛けだが、俺が答えてやる」

「!？」

空間が歪む

「ふははは！久しぶりだな、パレスト王」

「ぜ、ゼレカ！」

「相変わらず勇者制度があるなんてな」

「き、貴様！何しに来た」

「このイケニエとしては役立たずの少女を歸しに来た」

「す、スティ！」

「……」

「こいつには傷を癒してもらったからな。その札にこうして来たわけだ」

「他の者達は！」

「俺が喰らってやった」

「……」

「それと一つ言っておいてやる、ゲス王。その少女に手を出したら、俺がこの国をぶっこわすからな」

「なに…」

「たとえばその少女が奴隷だとしても、だ」

「わ、わかった」

「じゃあな、ステイ」

「……じゃあ」

ぼそっ

（アレク、な。蘇らせておいたから。多分城の外にいる）

「!!」

「さらばだ、人間の小娘よ」

「ゼレカ……ありがとう!!」

ブユン

空間を歪ませて魔界に戻った

抑えない衝動・小さな優しさ（後書き）

デ「完成ー！！」

エ「できたんですか！」

デ「思いの外早くできたよ」

エ「わあ〜うれしいです！！」

デ「効果時間は一時間だから、飲ませたら一時間は好き勝手し放題ですよ」

エ「一時間か〜、それだけあれば……」

デ「無味無臭無香料という、どう飲ませてもばれないスグレモノ」

エ「じゃあ紅茶にいれてもばれないの？」

デ「もちろん」

エ「なら、ゼレカが帰ってきたらさりげなくお茶にさそってのませよう」

デ「これならゼレカでも動けまい」

エ「デインさん、ありがとうございます！」

デ「いやいや、それよりもがんばってね」

「はー！」

密談（前書き）

前話のゼレカとスティの会話です。

三十話まで更新できたら、タイトル変えるかもです。

密談

「改めて名乗っておくが、俺はゼレカ」

「わ、私はスティ」

「君の服装やさっきの奴の紋様をみるかぎり、君はパレスト王国の人間だろ？」

「……………ええ、噂には聞いてたけど、貴方が『幻惑の大魔』なの？」

「へえ、そっちじゃそう呼ばれてるのか。確かに一度パレストへ単独で攻め行ったこともあったな。その時に誰かが『幻惑の大魔』なんて言ってたっけ」

「前って、『降伏戦争』！？」

「いや、名前までは知らないど」

「城に攻めてきた悪魔に負けた戦いのこと。……………確か数は一人」

「多分、それ俺」

「……………何で…」

「あれはパレスト王が先に仕掛けてきた戦争だ。俺達は何もしてないぜ？」

「でも！悪魔が大量に攻めてきた！人も沢山亡くなった！」

「今俺と戦った時に、勇者は何人いた？」

「……アレク含めて三人」

「その三人は全員パレストの勇者？」

「そんなわけ……あつ」

「理解してくれたみたいだな。悪魔が攻めてきても、それは別世界の魔界」

「私達が違う人間界から来たように」

「だから、俺達は何もしてない」

「そんな……じゃあ、アレクは……」

「……アレクって、さっきの白髪の勇者？」

「うん……」

「俺がグチャグチャにした奴も君達のパーティー？」

「そうだよ」

「……じゃあ最後に一つだけ」

「？」

「君は奴隷でしょ」

「!？」

「その反応、やっぱりか……」

「どうして……それを？」

「……ここからはきな臭い話になるけど、パレスト王国の勇者制度は魔界の王……つまり、魔王のイケニエの為の制度なんだ」

「嘘!？」

「残念ながら現実。だいたいイケニエは男女一人ずつ。あとは見張りが一人の三人のパーティーってわけ。だいたい、魔王を倒すのに三人なんてふざけた話だ」

「……」

「毎回そのイケニエは、地位的に邪魔な奴、死んでも困らない奴、命令をきかない奴なんて具合に選ばれる」

「……」

「だから勇者制度がある国……勇者に関する法律が徹底してる国は、イケニエの為の勇者が存在するんだ」

「……じゃあ、アレクは地位的に邪魔だったってこと……」

「そのアレクって、奴隷廃止とか言ってた？」

「うん、『奴隷制度は廃止しなければならない!』って言ってた」

「パレスト王は奴隷がいなくなるのを恐れてたから、邪魔だと判断したんだろ」

「……そんな……アレクは、私の為に……」

「……」

「アレク……私……うわぁーん!!」

――

――

――

――30分後

「……落ち着いた?」

「……うん、ごめんなさい」

「謝る必要なんてないよ。……こういうのは慣れてるから」

「……」

「よしっ、そろそろ下界に行くか」

「……私……」

「大丈夫、あの王は俺をなにより恐れてるから。少し脅かせば絶対に安全になるよ」

「……ゼレカ」

「ほら、行くよ?」

「……うん」

……蘇らせておいてやるか、あいつ

ふふっ、俺は魔神が似合っていないな

密談（後書き）

デ「今日はエレスさんもゼレカもないから、新しいゲストをお呼びしてます。では初めに、ソルーティアさん！」

ソ「よろしく願いします」

デ「そしてゼレカの契約魔獣、アルフオート！」

ア「よろしく頼む」

ソ「貴方がデインさんでしたか。エレスからたまに聞いてます」

ア「主が溜息混じりに、おぬしの名を呟いてたぞ」

デ「ということは、だいたいは俺のことを知ってるってことで良いみたいだな」

ソ「あのーデインさん。ここはどういった場所です？」

デ「後書きですね。普段とはまた違った場所ですので、自由にどうぞ」

ア「デイン殿、一つ言いたいことがあるのだが」

デ「はい？」

ア「我はまだ本編では一回しか登場してないぞ」

ソ「ですが私とは面識ありますよね？」

ア「うむ。ソルーティア殿とは、主が我を召喚した時にな」

デ「ああ、そうか。その話は書いてなかったから、今のままじゃ二人は会ってないことになるのか。でも会ったことがあるから本編でもそんな感じで」

ソ「私からも一つ言わせていただきたいのですが」

デ「どうぞどうぞ」

ソ「私もメインヒロインの一人なのに、出番が少ないってどういう事ですか！」

デ「ああ……、確かに基本ゼレカはエレスとラブってることが多いな」

ソ「フラグ立てても回収しきれないかもしれないじゃないですか」

デ「まあ、いざとなったら『後書き』がありますからそれで解決していきましょう」

ソ「それなら構いませんけど……」

デ「では文字数も稼げたことだし、また次話で！」

ほのゝぼのゝな午後（前書き）

中間テスト中なので、あまり長くはできませんが更新します。

ほのぼのな午後

「はあー、疲れた」

「あ、ゼレカ。もう終わったの？」

「うん。久しぶりに下界まで行ってきたけどね」

「下界って、どこの？」

「パレスト王国」

「パレスト？きいたことないなあ」

「俺も二回しか行ってないよ」

「ふーん」

「……それよりもエレス。あとどのくらいこうしてるつもり？」

「あつ、もうきづいちゃった？」

「気付くもなにも、いきなり目隠しされて横にならされたら嫌でも
気付くだろう」

「話してるすきにすれば、ばれないかなって」

「……いや、目隠しはすぐわかるよ」

「もうとってもいいよ」

「うん、とうろうとは思っただけど……頭に柔らかい感触があるのは何で？」

「とっってみれば解るよ」

「……」

目元に手をのばす

シュル

「あっ」

「えへへ、気分はどう？」

「／／／成る程、そういうことか」

俺の目の前にエレスの顔がある

柔らかいと思ってたのは膝枕されてるからだった

「とても気分が良いよ。このまま寝てもいいなーってぐらいに」

「ふふふ、いいよ。休んでも」

「なら、お言葉に甘えて少しだけ寝かせてもらおうかな」

「ゆっくりでいいよ、ゼレカ」

「そうは……言っても……」
そのまま意識が薄れていった

ほの／＼な午後（後書き）

デ「……………」

ゼ「起きろ」

パコッ

デ「！！何だ何だ、事件か！？」

ゼ「……………」

デ「なんだゼレカか。脅かしやがって」

ゼ「どんだけ寝てんだよ。昨日はソルとアルフォートと別れてからずっとだろ」

デ「昨日縛られてた奴よりはましだと思っぞ」

ゼ「…………もう一度寝てろ」

パコッ

デ「イタッ！」

物忘れの日（前書き）

まだ中間テスト中です。

物忘れの日

「はははっ、ちょっ、くすぐったいって！」

ゴロゴロ

「はははっ、ははは、そんなじゃれるなよ」

ゴロゴロ

「……主よ。何故このような事をしているのだ？」

「……うん、俺も何してんだか分からない」

アルフォートを召喚してじゃれてた

「何となくアルフォートを召喚してみようと思って」

「それは構わないが、急ぎの用事では無いのだな？」

「ああ、何となく喚んだだけ」

「ならゆっくりすればいいのではないか？」

「……それもそうだな。じゃあエレスのところに行こうかな」

「確か『主の主』、だな」

「うん、お前から見たらそうだな」

アルフォートの表現が面白かった

……堅苦しい喋り方なのに、天然なのか何なのかギャグセンスがあるな

そんなことを考えてるとアルフォートがいらないことに気付いた

「アルフォート？」

「呼んだか、主」

「ああー、上か」

歩いてたから後ろにいてると思ってたんだけどな

「後ろにいてると思ったから呼んだだけだ」

「そうか」

カツカツ

玉座の間……じゃなく、エレスとソルの部屋に着た

コン……

「ゼレカッ！」

「おっと」

ノックする前に扉が空いた

「俺だと分かったのは？」

「わかるよ、ゼレカだもん」

「……………」

「あっ」

「ん？ああ、こいつは俺が契約した契約魔獣のアルフォート」

「初めて御目にかかる、主の主よ。我的名はアルフォート、以後御見知りおきを」

「私はエレスナーグ。よろしく」

「そういえばエレスにはまだ会わせて無かったね」

「私にはって、ソルにはあわせたの？」

「報告がてら紹介したからな」

「……………ソルの反応どうだった？」

「？別に普通だったけど」

「ソルってああ見えてかわいいもの好きだから……」

「ふむ、それでソルーティア殿が我に触ろとしてたのか」

「そうだった？」

「うむ」

「……………全く気付かなかった」

「ねえゼレカ、空撃隊の皆がさがしてたよ」

「……そういえばそうだった気が……」

「だから先程『急ぎの用事は』と聞いたのだ」

「おいー！アルフォート！わかってたんなら言えよ！」

「ふふふ、主の記憶力を試したのだ」

「いや、それは言えよ！じゃあエレス、会議が終わったらな」

「……会議？ああっ！そうだ、城の会議忘れてた！」

「人のこと言え無いけど、忘れるなよ」

「じっ、じゃあ後でね！」

「ああ！」

空撃隊の隊舎に（急いで）行く

物忘れの日（後書き）

デ「嫌ー！ー！！！」

ゼ「どうした？突然」

デ「予約注文したら、日にちが『6月6日』で金額が『6666円』だったんだよ！」

ゼ「わおー、不吉」

デ「しかも今日はよく物落とすし、シャー芯折りまくるし、傘折れるし散々だぜ！」

ゼ「……お疲れです」

デ「リアルでこういう事があるとまいるねー」

ゼ「はははっ！日頃の行いだろ」

デ「やだなあー」

報告&自己紹介（前書き）

やあー、一気に内容が思い付いたので一気に書きます。

報告&自己紹介

「はぁ……はぁ……はぁ……」

今俺は全力で走ってる

「はぁ……たつく、何で空撃部隊舎がこんなに遠いんだよ！」

玉座の間から隊舎まで遠いったらありやしない

「だぁー、っと！」

ガチャ ドンッ！

「セーフ！じゃないよな？」

「ゼレカ！遅い！」

「いや、悪い忘れてた」

「忘れてた？だから集合十分前には来てろって言ったでしょ！」

「そんな怒るなって、メフィスト」

「……それにしたって遅かつぞ、隊長」

「おう、ベルゼブ。待たせたな」

「……全く、あんたはいつもそうだ」

「そういうなって……って、アスタノトは？」

『……………』

「?」

「ドーン!!」

「グヘッ!」

「全く、遅いですよゼレカさん」

「……アスタノト、何で上からおちてきた？」

「細かい事は気にしちゃいけないですよー」

「とりあえず降りろ」

「このままでもいいんじゃないんですか？」

「このままじゃ、なんも出来ないだろ」

「ちえー」

「ふう、皆……あれ? いつも一番早く来てる筈の奴がいないな」

「え?」

「そういえばいないですね」

「…………俺の後ろのソファーを見てみな」

ヒョイ

「アラクネ、ゼレカ来たよ」

「すう、すう」

「アゝラクゝネ」

「すう、すう」

「……起きないと思うぞ」

「アラクネさん、三十分遅れの定例会はじめますよ」
「ぐっ」

アスタノトめ、何気に痛い一言を

「…………アラクネ、隊長が三十分遅れで来たぞ」

「はう」

ベルゼブ、便乗するな

「アラクネ、早く起きないと一時間遅れになるよ」

「ぐはっ」

メフィスト……

「真に申し訳ございませんでした」

「すう、すう」

「……起きないな」

「しゃーあない、ゼレカが起こしてあげて。もちろんいつもみたい
に」

「マジでー」

「遅れたんですから、そのぐらひはアラクネさんにしないと」

「……隊長」

「くっ、分かったよ！やればいいんだな、やれば！」
『うんうん』

「……」

俺はアラクネが寝ているソファーに近づく

そしてアラクネの耳元で

「アラクネ。いつまで寝てるんだ？俺が来たのに」
そう呟いた、瞬間

「うん……ゼレカ？来てたの？」

……………目覚めるの早くないですか？

「やっぱりゼレカね」

「流石ですゼレカさん」

「……………タラシ」

「今聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだが？」

「ふぁー、定例会始めるの？」

「……………まあ今はいいか。じゃあ皆揃ったことだし、定例会始めるか」

それぞれ自分の席に着く

俺はボードの前

メフィストはアスタノトの隣で扉の前

アスタノトはベルゼブの正面で棚の前

ベルゼブはアラクネの隣でソファーの前

アラクネはメフィストの正面でベッドの前

がそれぞれの席だ
といってもソファー

「いやぁー、黒い扉に緑と黄色のソファーなんていかにもって感じだな」

「何言ってるのゼレカ？」

「久しぶりに来たからな」

「久しぶりって言っても四日前に私に会いに来たよね？」

「おい、アラクネ。それはお前の夢だ」

「そうだっけ？ いや、でも……」

「アラクネが自分の世界に入っただけ話しを始めるか」

「……話し、か」

「いつもと何にも変わりませんね」

「『定例会』だから変わらなくてもいいだろ」

「んー、おかしいな。ゼレカが私に……」

「アラクネ、そろそろ話しに参加しような」

「？ まあいいわ、今私の目の前にいるんだもん♪」

「はぁ……全く、アラクネといいクレアといい、どうしてこう『妄想癖』が強いんだろうな」

「それはそうとして、何すんの？」

「ああ、んー……じゃあ最近何してた？」

「私は自分の魔界に行ったりしてたわ」

「私はお昼寝してました」

「……俺はギルドの仕事をやってた」

「……一応言っておくが、皆『魔王』だ

「自分の魔界……メフィストは別として、の仕事しろよ」

「レイレイに任せてあるから大丈夫」

「……同じく」

「全く、兄妹揃って怠けやがって」

「ベルお兄ちゃんが敵さん全滅させてたから平気だよ」

「……ふっ、若気の至りだ」

「はいはいそうだったな」

「ゼレカ、私は人助けしてた」

「人助け？ちなみにどんなことを？」

「下界に行って悪さしてる雑魚悪魔を倒してた」

「へえー、珍しいな」

「ゼレカが、『悪さしてる奴らは暇だったら倒しておいて』って言ったから」

……雑魚って、アラクネに頼んだのは魔人じゃなかったか？

「ああー、そんなことも言ってたな」

「ところであんたは何してたの？」

「俺は……いろいろやってたな」

「いろいろって？」

「勇者全滅させたり、洗脳魔物を浄化させたり、ナブラートまで行ったり大変だったぜ」

「流石ゼレカさん」

「あっ……そうだ。契約したから紹介しとくな」

「……契約までしたのか」

「ナブラートの時にな、『契約者の……』」

「詠唱しなくても喚べるよね？」

「………できるけど、できるけどさー」

「どうしたの、ゼレカ？」

「………なんでもない。いでよ、アルフォート！」

「………さっきから居たぞ、主」

………忘れてた

まだ還してなかったんだ

「へえー」

「わぁー!」

「……」

「銀色の魔獣」

「こいつが俺が契約した契約魔獣のアルフォート」

「お見知りおきを」

「皆、とりあえず自己紹介してやってくれ」

「私はメフィスト。魔界『ゲノムルーツ』の魔王よ。ゼレカに助けてもらってから、ここにいるの」

うんうん、必要なこと全部言ってくれたな

「私はアスタノト。『リリードネメス』の魔王姫。よろしくね」

「……ベルゼブだ。別に覚えなくてもいい」

おい、兄貴! アスタノトはちゃんと自己紹介したのに、なんでお前は手短かだ!

「ベル兄ちゃんはメフィストと付き合ってるんだよ」

「!……アスタノト、それは言わなくてもいい」

「あら、別に隠す事も無いでしょ?」

「メフィスト……少しは恥じらいをだな……」

はっはっは、ざまあ!

「私はアラクネ。人間と魔王のハーフよ。一応は『ケルムノイド』の魔王だけど……ゼレカについてきたの♪」

「基本、俺がどうこう言ってるけど、俺じゃなくても大丈夫だからな」

「でもー、今はゼレカがいいの」

「『今は』、な。俺はエレスに仕えてる『魔王の騎士』なんだから付き合ったりなんなりできないぞ?」

「大丈夫♪それまでにどうにかするから」

「どうにかって……」

「……だから、お前は……」

「ベルゼブ、意識しすぎ」

「メフィスト、もっと言ってやれ〜♪」

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……要するに、騒がしい部隊と言うことなんだな。主よ？」

報告&自己紹介（後書き）

（会議中）

エ「じゃあ今から会議をはじめる！」

ソ「では今回はフルエさんの意見を考査しようと思いますので、フルエさんどうぞ」

フ「はっはい！えーっと、最近の報告のかにん、じゃなくって確認ですが今のところ表だった異常報告はありませんので、大丈夫だとおもっと思います！」

エ「かみかみだねフルエ」

フ「すっすみません」

ソ「確かに、報告としては何かあったという報告はありませんね。それでは…」

エ「会議おわりー。みんなできゅうけいしよう」

『はいっ！』

ソ「本日も平和な会議ですね」

悪戯夢―終焉の始まり―(前書き)

今回の話はこれからのシリアスシーンに深く関わってきます。

悪戯夢―終焉の始まり―

「おはよう、零花」

「おう、■■■。今日何かあったっけ？」

「忘れたの？二時限目科学のテストだよ」

「げっ、やべえ。何もやってない」

「そんなこと言って零花はいつも高得点じゃん」

「■■■は勉強してるわりに点数低いよな」

「むっ、そんなことないよ！」

「じゃあ今日のテストで、点数が高い方が低い方の言うことを一つだけきくっていうのは？」

「やっぱり自信あるじゃん」

「全く勉強してないからハンデにはなるだろ」

「ふっふっふ、予想通り！▲▲から今日の範囲は教えてもらってたのだ！」

「ええ！▲▲から！？……やばいな……」

「今日のテストが楽しみだわ」

ドンッ

「おーす、零花。■■■■」

「◆◆かよ。おどかすな」

「おはよう、◆◆」

「ん？ 『おどかすな』？ 何があったのか白状しろ」

「別になんもないって。ただ▲▲かと思ったから」

「▲▲と何かあったの？」

「■■■■との話を聞かれたかと思って」

「ほほう？ 聞かれたらまずい話なのかね？」

「んなんじゃねえよ。……って、後5分じゃねえか！」

「マジか！」

「走るぞ■■■■、◆◆！」

「ちよっ、待ってよ零花」

「零花、●●●●に頼まれた物持ってきたか？」 「ああ、『プレイン
グラブフォーエバー』なんてマニアックなゲームやりたがるなんて、
●●●●も変わってるよな」

「それを持ってるお前もどうかと思うぞ」

「二人とも、足、早いよー」

「おっと、わるいわるい。」

「■■■■も見た目はスポーツ得意そうなんだけどな」

「そんなこと言ったって」

チャンチャン チャンチャン テテロテローリ

「うん？」

ピッ

「零花ではありませんよ」

「いや、零花の携帯に掛けて零花の声で違うって言われても」

「それで●●●何の用だ」

「今家に居るんだけど、今日何かあったっけ？」

「呑気だなーおい！後二分で始まるぞ」

「はえ？後十五分はあるけど？」

「え？……あつ、ホントだ。腕時計くるってた」

「まあいいんじゃない？早く着くぶんには」

「確かにな。今日は科学の……って、お前はバリバリの理系だから大丈夫か」

「あーそういうえはあるって言ってたな」

「ほんじゃあ」

「待った！……あれは持ってきたろうな？」

「ああ」

「じゃあーな♪」

ピッ

「おい、零花！何スピード落としてんだ」

「ああ、腕時計がくるってた」

「え！？なんだく！」

「うっかり者め」

「はははー。まあゆっくり行こうや」

「走らせといてよくいうぜ」

「はあ、はあ」

「大丈夫か？ ■■■」

「ちょっと、休ま、せて」

「…………ホント体力無いな」

「陸上のエースの▲▲と比べたら仕方ないだろ」

「その俺に着いてくるお前も相当だけどな」

「ふっ、二人とも早いよ」

「落ち着いた？」

「うん、ほとんどは、落ち着いた」

「じゃあ行きますか」

――
――
――

『アト三日ダぜ』

――
――

「……………」

夢か……………

「随分懐かしい夢だな」

……確かアスタノトが『魔王化』してメフィストと一緒にベルゼブを追いかけてたのを収拾したんだっとな

「……風呂」

そうだった、それで疲れて風呂入ってなかった

「よっと」

着替えを持って風呂場に行く

悪戯夢―終焉の始まり下（後書き）

デ「……ヤッホー!!」

ゼ「どうした馬鹿作者？」

デ「はっはっは！久しぶりの登場だぜ！」

ゼ「……そういえばそうだったな」

デ「そろそろ全体的な話を進めようかなー」

ゼ「あのシーンをやるのか」

デ「心機一転、タイトルも変えようと思うんだ」

ゼ「話を進める時に変えればいいだろ」

デ「じゃあ『吸血魔王と赤血魔神』にかえる」

ゼ「………というわけで、『吸血魔王【とりあえずチートで。】』

で検索してでなければ『吸血魔王と赤血魔神』になってるかもしれないので、ご了承下さい」

デ「でもまだ変えませんよー」

悪戯夢―決別・目的―（前書き）

何か無駄に続いてますが、この話が連続するわけではありませんよ。

悪戯夢―決別・目的―

ポチャ

「……………」

……なんであんな夢を見たんだろ

……もうとっくに決別したつもりだったのに

「……………まだ俺は『葉月零花』のままでいたいのか、『ゼレカ・ハヅキ』の願望なのか」

どちらにしろ俺の目的に変わりはない

……………そう、変わらない

「……………ふっ、ヒデー顔」
鏡を覗き込み呟いた

……………そろそろ出るかな

ザバン

カラカラ

扉を閉めた

――風呂場

『……………ソリゃそうだ。オマエのココロを映シ出しタんだからナ!』

——自室

「……」

眠い

けれど、少しだけ寝るのを躊躇う

「……………から…だは……………しようじ……………きだ」

……………

——

——

——

……………ここは

『久しぶりだな、ゼレカ』

「マムート。まさかお前が…」

『言いたいことは分かってる。だが、あれはお前が勝手に見た夢だ』

「……………そうか」

『今のお前の目的はなんだ』

「エレスを、この世界を守ることだ」

『やはり、変わらないな。あの魔王の為ならなんでもする、か』

「当然だ」

『……なら。昔の…葉月零花の目的は？』

「……」

その問い掛けに、俺は少し戸惑った

『どうした？ 忘れたか』

「……俺を、俺の友人を、俺の大切な人を殺した『大天使』を抹殺することだ」

『……願いや目的なんて、良くも悪くも変わらないんだな』

「そのために転生したんだからな」

『今の自分の選択に後悔はないな？』

「ああ！」

『オーケー。それが聞ければ十分だ』

「ふん、何を今更」

『そうだったな』

「当たり前だ」

『……ゼレカ、自分に負けるなよ』

「……？」

『いや、なんでもない』

「変な神だぜ」

『おう、それと名前で呼ぼうな』

「へいへい。じゃあ起きるな」

ふゆん

『なんだよ、忠告のツモりか？』

『……』

『忘れたのか？オレがダレかって』

『……追い詰めてどうするつもりだ』

『決まってんだろーよ。オレが身体をシハイするたメだ！！』

『……』

そんな会話が あったなんて、俺は知る由も無かった

悪戯夢」決別・目的下（後書き）

デ「デンドロデンドロー」

ゼ「とうとう頭がいかれたか」

デ「おいゼレカ。聞いて驚け、喜べ。なんと！PV32000、ユニーク5000突破だぜ！」

ゼ「！もうそんなにか」

デ「昨日解析したらそうだったぜ☆」

ゼ「そいつはめでたいな」

デ「これもこんな駄文を読んで下さっている皆様のおかげです」

ゼ「これからも日々書かせますので」

ゼ・デ『よろしくお願いしまーす！』

デ「ってなわけで記念番外編を書こうと思うのですが、今週体育祭なので来週ぐらいにupする予定です」

ゼ「番外編……まさか！」

デ「女体化、幼児化なんでもこいですね」

ゼ「早まるなディン」

デ「まあどうするかは気分次第ですので。人物紹介とか、能力説明とかにするかもだからね」

ぜ「俺はそっちを祈ってるぜ」

デ「読んで下さっている皆様方、本当にありがとうございます。これからの励みになります」

恵みの雨（前書き）

いつもよりは遅くなってしまいました。

恵みの雨

「あつ、ゼレカ。ちょっとつきあってほしい場所があるの。ソルには見つからずに」

「ソルに見つからずってことは……ギルド？」

「……いいよね？」

「もちろん。君が望むなら何処へもお付き合いしますよ」
遊びに行くのかな？

確かにソルにばれるとあれだけど……

「えへへ、アリガト」

「ふふっ、いえいえ」

……確か今日は雨降るってサリアがぼやいてたけど

——城下街

「今日雨降るって言ってなかった？」

「ああー、それで今日は空の魔力がたかいんだ」

空にも魔力がある

雨が降るって事はそれだけ大気中の魔力が高まる

「……雲行きがあれだな」

「はやく行こうよ」

そしてギルド目指して足を早める

——ギルド・悪魔達の眼デモンズアイ

ギィィ

扉を開ける音が鈍い

「ようこそ、悪魔達の眼へ。四日ぶりぐらいねエレスナーグ」

「メトリア、報告書できてる？」

「はい、これでしょ？」

「よっと、じゃあたしかに受けとったからね」

「確かにお渡ししました♪」

——同盟国軍空・特別管理所

エレスが自分の用事を済ませてる間に俺も用事をしている

「ん？」

「……隊長か」

「奇遇だな、ベルゼブ。SSランクの依頼ってきてるか？」

「……今はきてないみたいだ」

「そうか。ならいいや」

「……SSランクは魔王クラス（俺達）の依頼だ。なのに魔王でも大魔王でもないあんたがなんで達成できるんだ？」

「気になるか？」

「……当然だろ。聖馬の時も、『あの時』も、普通の魔王じゃどうにもならないことだぞ」

「……それは俺が『魔神』だからだ」

「……何？」

「だから、俺は『魔神』なんだよ」

「……そうか」

「びっくりしたか？」

「……ふん、あんたなら天使や神つつても驚きはしないよ」

「あらら、薄いリアクション」

「……それよりも姫さんの用事は終わったみたいだぜ？」

「ん、そうか。じゃあな」

「……ああ」

――カウンター・入り口

「あつ、ゼレカ。何処行ってたの？」

「ちよつと自分の用事をね。それより用事は終わった？」

「報告書ももらったし、みんなにも会えたから終わったよ」

「じゃあ帰ろうか」

扉を開ける

ザー

「……降ってきたな」

小降り……とは言えない量が降っている

「どうしたの？こんなに降ってるのに」

「魔界と下界はやっぱり違うと思ってな」

「そういえばゼレカがいた世界は雨にうたれないんだっけ？」

「たまにはおもいっきりうたれた事もあるけど、毎回毎回はうたれないな」

「魔力が通ってないからしかたないよ」

「そうだな」

魔界の雨は魔力の塊だから大事な魔力の供給源になる

魔力が身体に満ちてくる

「それでは参りましょう。姫様」

「エスコートしてくださいるなら」エレスの手を取り導くように歩きます

「ふふっ、ホントのお姫様みたい」

「何言ってるんだ。正真正銘の姫じゃないか」

「『魔王姫』だけどね」

「変わらないさ」

話していると雨が身体に当たる

「魔力が満ちてくる」

「ゼレカの魔力は膨大だからね」

「魔力が膨大だと完全回復するまで時間がかかるんだよなあー」

「魔力の上限がおおきければおおきい程、つかえる魔法もあつかいやすくなるんだよ」

「それは知らなかったな。俺の場合はイメージさえ出来れば扱い易いも何もないけど」

「それはゼレカだけだよ」

「ははは、そう……いえ……ば……」

不意にエレスに目を向ける

「どしたの？」

「／／／エレス、服」

目を逸らしながら言う

「服って……」

「……」

「……」

今日のエレスの服は純白のローブと青のミニスカート

「あっ／／／」

顔を真っ赤にしている

「そういえば何で今日は服がいつもと違うんだろうな……って聞こうとしたらね」

「ん／＼／……それは今日はソルの誕生日だから」

「ああ。ソルに見つからずってそういう意味だったんだ」

自分の黒いコートを脱ぎながら言う

「っと。着てなよ」

「アリガト／＼／」

俺のコートは防水性だから雨を弾く……魔力は弾かずにだけど

「だからパーティーみたいな格好してるんだ」

「今日の夜にはじめるから、ゼレカも出席してあげてね」

「もちろん」歩きながら、まだまだこの世界のことが分かってなかったと思ってみる

恵みの雨（後書き）

デ「ゼレカ。今思ったんだが、名前のある主要人物の男の割合が少くないか？」

ゼ「そうか？」

デ「お前だろ、シェイドだろ、アルフォートだろ、ベルゼブと四人（？）だけしかないじゃないか」

ゼ「……お前の趣味だろ？」

デ「もちろんだとも☆」

ゼ「……」

肩揉み（前書き）

ほのぼのであまあまな話が書きたかったんです。

肩揉み

「はっ…ん…ゼレカっ」

「……」

「ああっ…あっ…」

「……」

「んあっ…ひっ…」

「おいエレス。誤解を招かれような声をだすな」

「だって…気持ち…いいん…だもん」

「全く、休憩しないで事務仕事やるからこうなるんだよ」

誤解されないように言っておくが、俺は肩を揉んでるだけだからな

「ゼレカって、肩揉むのじょうずだね」

「ん、そうか？」

「いままでしてもらった中でいちばん気持ちいいよ」

人間生活してる時に少しだけ習ったことがあるからかな

「それは良かった」

「今度はもう少し下のほうをおねがい」

「下っつーと、肩じゃなくて背中だな」

手を動かす

「あー……気持ちいい」

「これにこりたら今度からは休憩挟めよ」

「大丈夫、そしたらゼレカがマッサージしてくれるから」

「ふふっ、はいはい」

……今改めて思ったけど、この状況下手に誤解した奴が見たらやばくない？

「もうちょつと右」

「はいよ」

まあ、それはそれでいいけどさ

ハァーあ、今日も一日平和だなあ

肩揉み（後書き）

エ「デインさん！聞いてください！」

デ「何をですか？」

エ「最近、ゼレカが『零花』になってくれないんです」

デ「安心して下さい。例の番外編でやりますから」

エ「もう内容きまってたんですか？」

デ「ゼレカに『零花』の格好で一日過ごすっていう感じでほぼ決定しましたから。リクエストがない限りはこれでいいと思います」

エ「一日ですか……それだけあれば、何でもできる気がします」

デ「まあリクエストがあっても、いつかはやろうと思ってたからやりますけど」

エ「それなら、『あの時』の薬もよういしてくださいね」

デ「あの『マヒ薬』を？」

エ「あの時はホントにゼレカが動けなかったんですよ」

デ「内容はヤバイから載せてないけど、さうとう『あれ』でしたからね。なら用意しておきますね」

エ「楽しみですね」

デ「本当に、楽しい事になりそうだ」

出会い〜アラクネ〜（前書き）

少しずつストーリーとして進めて行こうか、ほのぼののしょうか悩んでいます。

出会い〜アラクネ〜

「人間風情が図にのらないで」

「その人間に負ける気持ちはどうだ？」

「くっ」

……悔しいけどこいつのゆう通り

……もう負けを認めようか

「……みんな、ごめん……」

「お祈りは済んだようだな。なら!!」

目の前の人間が剣を掲げた

「終わりだ!!」

ガキン

「……………?」

おかしい

もう剣を振り下ろしている筈なのに

目を開けてみる

「…………!？」

……剣が折れていた

なんで？

「なっ!？」

「困るんだよなあ。勝手に魔界荒らされちゃ」

黒いロングコートが、風に揺られていた

「だっ、誰だ!？」

「誰でもいいだろ。今引き下がるっていうなら見逃してやってもいいぞ」

「誰が逃げるか!俺は最強の勇者だぞ!」

「……最強になんの意味があるんだろうな」

私の前に現れたひとは小さく呟いた

「喰らえ!!『天上展開斬』!」

「!?!」

私が喰らったのと同じ技!

「逃げた方がいいわ!」

目の前のひと言う

「終わりだ！」

「ああ！」

あの斬撃は周りの地表を変えてしまう程の威力があるのに！

「……」

ピシィ

「！！」

「はあっ！？」

そのひとは、たった二本の指ではさんで、止めた

「……はあー、こんなもんが最強か？」

「ばかな……」

「『炎帝よ、嵐の如く燃え盛り傲慢なる者を焼き尽くせ。皇炎の風』」
ウインドインペリアル

ボコォ ボコォボコォ

「何だ！？何が起きてる！」

「炎帝の怒りに触れたんだろ。この辺りは火山活動が活発だからね」

「う、うわあー！」

シュウー

「……」

何が起こってたのか、魔王の私にも分からなかった

「立てる？」

「え！？あつ、はい」

差し延べられた手を掴む

「貴方は？」

「俺？俺は《ニブルケティック》から来たゼレカ。一応は陛下の命で来た」

「エレスナーグが。助かったわー」

「ということは、貴女がアラクネさんですね？」

「そうよ」

「陛下から助けに行くように言われましたので」

「今回ばかりはエレスナーグに助けられたのね。ありがとう」

「お礼でしたら、陛下に」

「エレスナーグの命令でも、私を助けてくれたのは貴方だもん。お礼を言わせてほしいは」

「ありがとうございます」

チャン チャチャチャンチャン

「あつ、と。失礼」

ピッ

「エレス？こっちは終わったよ。……次？……うん、分かった」

ピッ

「陛下から次の場所に行くように言われましたので、失礼します」

「あつ、ちよっ…」

デローン

空間が歪んで、さっきのひと……ゼレカはいなくなってた

「……ふふつ、念話ぐらいで本性がでるなんて。……また会えるかなあ？」

消えていった空間を眺めながら、私は言った

出会い〜アラクネ〜（後書き）

デ「重大発表」

ゼ「なんだよ」

デ「そろそろ後書きのネタが無いから、新しい企画を考えついたので！」

ゼ「どんな内容だ？」

デ「それは！」

ア「主よ、そろそろ主の所に行く時間だ」

ゼ「あー、そうか。悪いな後で聞くわ」

デ「それは……人物紹介だ！って、誰もいない」

補佐と世話係の二コマ（前書き）

いつもと違う方向性です。

補佐と世話係の二コマ

「ゼレカさん、いらっしやいます?」

「いるけど」

「!! おっ、脅かさないで下さいよ」

「あー、わるい」

ソルが俺の部屋を訪ねてたから、つい（ここ重要）脅かし……後ろから声を掛けなくなったんだ

……うん、何のフォローにもなってないな

「まあそれはそうと、この間の《ヒンブル》との同盟は結べました?」

「ヒンブル……ああー、ちょっと壁殴ったらすぐに同意してくれた魔界の」

「……そのような結び方をしたので?」

「冗談だよ。《ヘルヴォート》って軍を蹴散らしたら、是非同盟を結ばしてくれて」

「……やはりヘルヴォートが……」

「ん?」

「いえ、何でもありません……」

「何でもないって言うなら深くは詮索しないよ」

「ありがとうございます」

「それよりも、そんな堅苦しく話さなくてもいいのに。もう結構長く……はないか。とにかく、もっと気楽に話せば？」

「私はこれで慣れてしまってるので」

「とかいいつつ、エレスにはめっちゃめっちゃ碎けて話してるよね」

「エレスとは前の代……ご両親の頃から一緒にいるから、あの話し方に落ち着いているんです」

「……あれは最早『落ち着いた』なんて生易しいもんじゃないと思うけどな」

「とにかく、違和感を覚えてしまうんですよ」

「じゃあ、違和感がなくなるまで話せば？」

「……それは……つまり……」

「ほら試しに俺を呼び捨てで」

「いいいいです」

「即答！？ 試しにって言ってるのに即答ですか！」

「いつ、嫌なものは嫌なんです／＼／」

「あはははー、ソルが照れてるとこ初めて見た」

「ぜっ、ゼレカ………やっぱり………恥ずかしい………です／＼／」

言葉が紡がれる度に小さくなってる

「言えたみたいだね」

ソルの頭を撫でる

「こっ、子供じゃないんですよ！／＼／」

「っでも俺よりは（人間界単位で）年下なんだから。嫌ならやめるけど？」

「……もう少しこのままがいいです」

ふふっ、素直だけど素直じゃないんだから

「ゼレカ、ソル。仕事がおわらないよ」

……事務仕事が終わらなくて困ってるエレスを忘れてた、俺とソルであった

補佐と世話係の一コマ（後書き）

デ「それでは、宣言通り人物紹介です！

ゼレカ・ハヅキ

魔神。黒髪。

左目が緑、右目が黒。

全ての属性の魔力を扱え、魔力の上限が膨大である。称号は『魔王補佐』『破壊の大魔』『空撃部隊隊長』等がある。
身長は168?ぐらい。

葉月零花

高校一年生。

髪の色や性格、声はゼレカと同じ（というよりもゼレカ本人）
ただし、目の色は両方とも黒。
魔神になる前のゼレカ。

ゼ「ん？初めは俺か」

エ「一人だけど二人分紹介してるね」

デ「同一人物ですからね」

エ「でも、これでぜんぶではないですよね？」

デ「もちろん。ゼレカやエレスさん、ソルは何回か紹介しますから」

ゼ「……あれか」

デ「次回は誰かなー？」

番外編『PV35000 ユニーク5000 記念』 零花の一日前（前書き）

やっと落ち着いたので書きました。

零「はぁー」

ん？何でため息から始まったかって？

……仕方ないさ

起きたら身体が女の子♪になってるんだもの

零「……」

幸い、子供になってるわけじゃないからまだ良かったけど

零「鏡の位置が少しだけ高いな」

とりあえず服を着替えて洗面台にいる

零「よっと、これでいつもと同じくらいだ」

手頃な台を見つけてその上に乗る

零「……これからどうするかなあ」

エレスの所に行ったらゲームオーバーフラグだし、かといって部屋に閉じこもるのもいかなものか

零「そうだ！空撃隊舎に行こう」

メ「空撃隊舎に何か用、お嬢ちゃん？」

零「！……って、メフィストか。脅かすなよ」

メ「何で私の名前を知ってるの？」

零「それは、隊長だからさ☆」

何時ものノリで言ってみた

メ「隊長……隊長……！もしかしてゼレカ！？」

零「そうだよ」

メ「えっ、でも……」

零「ちょっとした事情があって身体が女の子♪になってるんだ」

メ「へえー」

零「さーてと、隊舎に行こうかな」

メ「……」

零「静かだけど、どうしふにゃ」

メ「ぷっ、あははは！！」

メフィストにほっぺをつままれている

零「なっ、なにふるんあえふいふと（なっ、何すんだメフィスト）」

メ「だっ、だって面白いんだもん」

零「はなひえ（はなせ）」

メ「ふふふ、仕方ない」

パツン

零「全く」

メ「あー、おもしろかった」

零「隊舎に行くぞ」

メ「私も行く」

——隊舎

零「おーすっ」

ベ「…………誰だ？」

零「おい!!」

ア「ゼレカさん、どうしたてちっちゃくなっただんですか？」

零「気付いてくれてありがとうアスタノト」

メ「ベルゼブ以外は気付いてるけど」

ベ「…………真面目に分からなかった」

零「こうなったわけは説明すると長くなるからカットで」

ア「……今、身体はどうなってるんです？」

零「ギクッ」

メ「何時もと違うよね」

零「余計な事は…」

ア「えいっ♪」

おもいつきり抱き着いてきた

ア「やっぱり、女の子になってるんですね」

ベ「………！」

零「ばれてるー」

メ「一目で分かると思うけど」

ア「ふわー」

ベ「……起きたか」

零「………何か来る度にアラクネは寝てるな」

ア「あれ？ゼレカが少し小さい？」

ア「女の子になったんです」

零「アスタノトそれは…」

ア「そーなんだ？」

零「あー良かった、寝ぼけてる」

メ「そういえばゼレカ。軍協会議って何時だっけ？」

零「あれ？明日か今日だよね」

ア「今日じゃなかった？」

零「やっべ。じゃあな『テレポート』」

零「あれ、会議は？」

ソ「会議は明日ですよ。日にちが変更になったとお伝えした筈ですが」

零「……」

――回想

ゼ「じゃ、会議が終わったからいくぜ」

ソ「ゼレカさん、次の会議は八日後になりましたから」

ゼ「八日後な、オーケー分かった」

――回想終了

零「ああーそういうばそうだったな。会議がないならゆっくりできるし」

エ「ゼレカ、暇だったら後で部屋行ってもいい？」

零「構わないよ」

エ「書類だけ書いたら行くからね」

零「あいよ、じゃ部屋で待ってるな」

——自室

零「はぁー、最近物忘れというか忘れということが多いぜ」

トントン

零「どうぞ」

ガチャ

エ「まったく？」

零「全然」

エ「ゼレカに聞きたいことがあって」

零「聞きたいこと？」

エ「あんまり大きな声ではいえから」

零「ん」

俺は自分の隣を指す

エレスが座ってるイスからベッドはそんなに遠くないけど、内緒話ならこっちの方が近いからだ

エ「よいしょっと、それで話しつていうのは」

そこまで聞いたらわけもわからず俺の口を塞がれた

塞いでいるのはエレスの口

エ「はっ……ん……ジュル」

零「ふっ……ヌル……ゴクン」

ん？ゴクン？

明らかに何かを飲んだ気がする

零「ん……エレス、何飲ませ……！？」

ガクン

そのままベッドに力なく倒れる

エ「ふふふ、作戦せいこう♪」

零「まさか……これって」

エ「前に零花が飲んで動けなかった薬だよ」

零「じゃあ俺をゼレカって呼んだのも……」

エ「モチロンわざと。ソルにも口止めしてあったし」

零「はははー。ところでこのあとは如何お過ごしで？」

エ「ふふっ」

零「ですよね♪」

……覚悟を決めろというわけですか

零「どんな姿でも忙しく騒がしい一日だったなあ」

デ「終わりましたー！」

ゼ「……殴らせろ」

デ「まあまあ落ち着いて」

ゼ「一発でいいから殴らせろ」

デ「身体だって元に戻してやったんだからいいだろ」

ゼ「……戻さなかったら、俺の最強魔法で消し炭にしてやったぞ」

デ「わあー、戻しておいてよかったです。それはさておき、連載してから無事一ヶ月を迎えることができました」

ゼ「こんな駄目野郎につきあって頂いて感謝です」

デ「口が悪くなってきたなおい」

ゼ「どうだっていいだろ。それより聞こうと思ったんだが、何であの薬をエレスが持ってたんだ？」

デ「俺があげた」

ゼ「……『邪なる福音……』

デ「詠唱中失礼しますが、宣伝しときます。次回も番外編です」

ゼ「……交わりし……」って、何時になったら本編進むんだよ」

デ「また企画物……ゼレカ、これは俺の中で会心の出来だと思う」

ゼ「期待しないで待ってるさ」

番外編『連載一ヶ月記念』　いつもと違う魔王姫（前書き）

昨日は何故か接続出来なかったです

番外編『連載一ヶ月記念』　いつもと違う魔王姫

「うん、まあ出来たろ」

俺は今自室でチョコレートを作ってる

もともと一人暮らしだったから毎日自炊してたし、菓子作りを趣味にしていたぐらいだから今でも時々作ってる

「後は保存して……ん？保存？」

保存……ほぞん……ホゾン……あっ！

「やっべ、冷蔵庫の中に氷入れんの忘れてた」

鞆の中の氷を持ってキッチンに向かう

「ぜ〜レカ、何かおもしろいことない？」

ゼレカの部屋にきてみたけどゼレカは居なかった

「むう〜、ん？甘いかわり」

机の上にチョコがならべてあった

「ゼレカが作ったのかな？」

甘いかおりに綺麗なかたち

「……食べてみてもだいじょうぶかな」

一番ちいさいのを取って食べてみた

「はむっ……おいしい!」

もう一つだけ……

「ぱくっ………」

「ふう、あつぶねえ」

あの氷は溶けるとんでもないことになるからな

ガチャ

「ん、エレス。来てたんだ」

ビクッ

「ひっ! あ……あの……」

「どうしたの?」

「な……なんでも……ないです」

……明らかに何時もと様子が違う

「あ……あの、ゼ…ゼレカさん」

「ん？」

「その……ち…ちちち……」

………？

「もしかして血が飲みたいの？」

「ひっ！ご…ごめんなさい！無理な事言っ…」

「……エレス、チョコ食べたでしょ」

「ごめん……なさい。おいしそうだったんで……」

「いや食べたのはいいんだけど、ブランデーが入ってるのがあったから」

「ブランデー……だから酔ってるんですね」

「酔ってるって……もしかしなくても性格変わってる？」

「はい……」

知らなかった。酔うと性格変わるんだ

「あ……あの……」

「ああ、血が飲みたいんだっけ」

俺は人差し指の先を嚙んで血をだした

「はい」

「失礼します……」

エレスは少し怯えながら俺の親指と手の甲を持って優しく舐めてる

……いつもは人差し指をそのままくわえて吸うように飲んでるのに

「はぁ……ん……」

目を閉じてビクビクしながら少しずつ舐めてる

……ヤベエ。めっちゃ可愛い

めちやくちやにしたくなるくらいヤバイ

「はぁ……クチュ……と……止まりましたよ」

「終わった？」

「はい……ありがとうございます……」

……ああ。終わっちゃったのか

「エレスが酔うと性格が変わるなんて知らなかった」

「酔うと何故か回りが怖くなる気がして……」

「ふーん」

そのままエレスにキスした
いつものディープではなくフレンチで

「あ…ああああの、ゼ…ゼゼレカさん！！／／／なにして…」

「いつものことじゃん。今更だよ」

「ですけど…」

キスだけで顔真っ赤にしてる

そのままゆっくりベッドに押し倒す

「ひあっ！わ……私、このままゼレカさんに食べられちゃうんですか？／／／」

Sの血が騒いだのか限界寸前だ

「今の君とてもそられるけど、震えてるからそんなことしないよ」

「ご…ごめんなさい……」

「謝る必要なんてないさ。それよりも、一昨日の夜は俺に痺れ葉を飲ませて俺の上で激しく動いてたのに、今の状況が怖いなんてね」

「／／／あれは……いつものことですから、今とは違うんです」

「そうなの？」

「そうなんです！」

俺もエレスの横に倒れる

「ビクン！」

「このままずっと居たら、慣れるかな？」

「か…顔が近い…です」

「震えてる君も可愛いよ」

「／／／そ…それじゃあ、抱き着いてもいいですか？」

「顔が見れなくなっちゃうけど、いいよ」

「それでは…」

俺の胸に顔を埋めた

「このまま寝ちゃいなよ」

「へ…変な事とかしないで下さいね」

「安心して寝ていいよ」

「スウ…スウ…」

酔ったせいなのか、言い終わるか終わらないかで寝息をたてていた

「ありゃ、あんなに警戒してたのにあっさり寝たって事は性格変わった俺を信頼してくれてたんだ」

……ありがと

そして俺も意識を手放した

「ふっああー、あれ？私……」

「ん、起きた？」

「おはようゼレカ。それより何でゼレカの部屋で寝てたの？」

「覚えてないんだ」

「え？」

「昨日の君、とても可愛かったよ」

「んゝ覚えてない」

「いいさ、覚えてなくても」

「貴方がそういうなら……ねえ、今日はお料理おしえてよ」

「いいよ。じゃあ着替えるからキッチンで待ってて」

「わかった」

外にでていったエレスを見て、昨日のエレスを思い出す

番外編『連載一ヶ月記念』　いつもと違う魔王姫（後書き）

デ「どうでしたかゼレカ？」

ゼ「うん最高。あんなエレス見たの初めて」

デ「次からは本編に戻ります」

ゼ「戦闘シーンもバリバリありますよ」

デ「それではこの辺りで。……疲れた」

連合会議（前書き）

構想を練るのが楽しいです

連合会議

「では、魔界連合会議を始める」

「今回の議題は……」

ああー怠い。今はエレスの付き添いで連合会議に来てる

空撃部隊の皆も魔王か付き添いかで全員揃ってる

一応空撃部隊といっても、単なる飛行隊ではない。時空間にまで衝撃が届くことからこの名前がついたらしい。とりあえず説明してみました

「……………とまあこれを如何に処理するか？」

「私達が片付けてもいいですよ♪」

「…………その程度なら自分達でも処理できるだろ」

わあ、兄妹なのに言ってることが真逆。流石としか言えないゼブルゼブ

「……………」

ほら議長も黙っちゃったよ

「…………異論が無ければ決まりだ」「さて、大魔王よ。お前には『紅

月の荒野』を調べてきてもらう」

「……『紅月の荒野』？聞いたこともねえ場所だな」

「本来なら魔王しか入れない場所なのだが、何者かが侵入した形跡があるのだ」

「貴殿にはその調査を頼みたい」

「……アスタノト、どうする？」

「私はいいよ」

「行ってくれるのか。それでは……」

しかし、うちの『ニンブルケティック』をはじめ合計十ヶ界の魔王が手をくむなんてな

……その内三つはうちと友好関係にあるけど

「誰が処理してくれるかね？」

『……』

ボソッ

（エレス、今何決めてんの？）

（『地獄海岸』の魔物の退治だよ）

（『地獄海岸』っていうと……ああ、『フルーリエドロ』のか）

『フルーリエドロ』は議長……マクステリアの世界だったな

「議長、自分で行ったらいじゃないですか」

「なっ!？」

「あんただって魔王なんだからそのくらいはできる筈だ」

「……同感だな」

「あの程度の魔物ならあんただけでも十分ですよ」

「………そうなのか？」

「おそろくは」

まがりなりにも魔王なら大丈夫かな

「ならそれはおいといて…」

『……』

『!？』

ガタッ

「ん、どうした？」

「俺いくよ」

「そう?結構な数いるよゼレカ」

「アラクネ、俺が負けると思うか」

「ううん、『あの時』みたくなっここよく倒すと思う」
「じゃ皆エレスのこと頼んだよ」

「気をつけてねゼレカ」

「行ってきますエレス」

剣を二本創造して跳んだ

連合会議（後書き）

デ「それでは今回は人物紹介二人目エレスさんです。」

エレスナーク・デルト・ネメス・ニンブルケティック

白の強い水色の髪に紅い瞳の魔王兼魔王姫。

とある事情があり兼任している。

争い事が嫌いで、城や城下街の住人達の評判も良い理想の魔王。
ゼレカとソルからはエレスと呼ばれる。

エ「まだあまり力を使っていませんが、魔王です」

ゼ「その実力は魔王の中でも上位ランクに入る程だからな」

デ「補足ありがとう。補足ついでに前回の補足をしておくと、エレスさんが『血を飲んで酔う』のと『酒で酔う』のは別の酔いですからお間違いなく」

激突（前書き）

久しぶりの本編です

激突

「おー、随分な数だな」

テレポートで跳んだ先は会議場所から少し離れた荒野だった

「数は………一万…いや、一万二千か」

大した強さじゃないが一つだけ気になることがある

………普通じゃ有り得ない魔物達の『統率』だ

「グルルっ！」

「グワァー!!」

「キエっ！」

俺という邪魔者を察知したみたいだな

「それじゃあいきますか」

一対の剣を構えて突っ込む

ザクッ

グシヤ

ベチャッ

右の剣は闇を、左は雷の魔力を込めて振るう

「ガァッ!!」

「キシヤァ!」

「ちっ」

斬っても斬ってもきりがない

「怠惰の光よ、雨となり風となり抗うものたちに注がれる。犠牲の
人形、孤独の時計、交わりて先を見よ! 『ポイズニツクレイン堕落の雨』」

ザァー

身体を蝕む雨を降らせた

「ガガァ?」

「クエ!?!」

魔力の弱い奴はこれで動けない。強くても身体能力が低下している

「これでっ!」

さっきより動きの悪くなった魔物達を浄化していく

「あと三千……!!」

黒い液体が飛び散る中で確かに『見えた』

左目が『それ』を捉えた

ガキイン

「ふん、全く無礼な挨拶だな」

「アシュラ！！てめえ！」

『それ』は俺が見たことのある、首元まで伸びた金色の髪に全てを見透かす様な黄色の目、身体を覆っている白い服に……………背中から生えた『白い翼』！！

「まあそれはいいとして、ゼレカよ。そんな姿じゃ私は倒せないぞ」

「黙れ！テメエにとやかく言われる必要はねえ！！」

「ふっふっふ、今のお前は良くて魔王だ。そんな力で大天使であるこの私に勝てるわけが無かろう」

「……一つ聞く。『あのやろう』は何処だ」

「あの方の居場所？さあ、何処だろうな」

「答えないならお前に用は無い。消え失せろ」

瞬間的に『墮落の雨』が降り注ぐ場所から魔力を取り出した

「汚れし魂、その罪を償^{すべ}う術^{ハデストケージ}を行使したまえ。知るべき理は我の言葉。『冥界の揺り籠』！！！」

有りったけの魔力を注ぎ込んだ上級魔法を放った

ガチャ

パリーン

「この程度か。ガッカリだよ」

「ふっ、かかったな」

「？」

「弾け飛べ！！『暗黒の樂園』」
アルテエデン

さっきの取り出した魔力を全部注ぎ込んだ俺の禁術だ
雑魚魔物でも九千体分の魔物の魔力を集めたんだ

「…………消えたか？」

「あっぶない危ない。ホントに消し炭になるかと思った」

「…………馬鹿な！！」

無傷だと！？

「ふっふっふ、残念だったね♪」

「…………くっ」

「だから言っただろ。『あの姿』になれと」

「うるせえ！！」

「…………興ざめだよ。この程度の器なんてね」

「……………」

パチンっ

「帰る」

魔物達の統率を解いてアシユラは消えた

「……………」

『あの姿』か……

「……………帰ろう」

そして会議場所に跳んだ

激突（後書き）

デ「今日は皆さん居ないので何もすることがありません」

ア「我だけ居るぞ」

デ「うわっ、ビックリした！」

ア「主と主の主は会議、ソルーティア殿は城の警備にあたってるのでな」

デ「説明ありがとう。だったらアルフォートの紹介する？」

ア「今は誰も居ないからつまらないぞ」

デ「なら……寝るか」

ア「そうするか」

怒りを表に（前書き）

スランプ注意報がなりっぱなしになりました。

……細かい部分が浮かびません。

怒りを表に

「ただい……ま？」

戻ってきたら凄いことになっていた

エレスが魔王化してマクステリアに剣を向けていた

よくみればマクステリアの足もとが溶けたり焦げたりしてる

「……………何があったんだ？」

「……………イロイロな」

アラクネとメフィストも魔王化していた

大体の想像はつく

「……………エレス、止めなよ」

「ゼレカ！？戻ってたの？」

「今な。場所も場所なんだから剣をしまいなよ」

「……………うん」

スチャ

「とりあえず魔物は処理しといたから」

『……………』

皆口を閉ざしたままだ

「…………どのくらいだった？」

「一万二千体」『! !』

うちの同盟の奴以外は皆驚き、同盟の奴は毅然とした態度をとっていた

「そうだ、悪いなベルゼブ。行った場所多分『紅月の荒野』だと思う」

「…………別に構わない」

「ちょっとからんでた事情が事情だったんでな。それと…」

「……………いい加減にしろ『夢幻』よ! !」

議長…………マクステリアが怒った

「一悪魔がそんな態度をとっていいと思ってるのか!」

怒りの中に恐怖が混じってる

…………エレスに剣を向けられたのがそんなに怖かったのか、それとも俺にびびったか

「全く、お前達より前世代の…」

メフィストもアラクネもベルゼブもアスタウトもエレスも怒りを表に一齐に『魔王化』ないし『大魔王化』をした

「魔王のほうがよくぽど…」

そこまで言いかけてマクステリアは言葉を紡げなくなる

皆も一歩動かず啞然としていた

パラパラ

「おい、それ以上ふざけた事吐かしやがったら消し飛ばすぞ」

俺の魔力を流して回りの空間を支配した

「お前には関係ねえだろ。あんまし調子乗ると連合破棄して跡形もなく潰すからな」

更に濃い……視覚化できる程の魔力が空間を覆う

「今からだってやれるんだからな。テメエの命は俺の手の上だ」

今俺を見ていると、俺の後ろに大量の蛇やら鬼やらの幻影が見えるはずだ

「……………返事はどうした」

「……………はっ、はい!!」

この世の物とは思えない恐怖を味わっただろうな

「…………ふん」

魔力をといた

「じゃあ帰ろうよ皆」

「…………え、うっうん」

飛行艇に向かう

——帰路の廊下

ちよつと魔力使いすぎたからテレポートは使えない

『…………』

「ん？皆どうしたの」

「…………あんたがあそこまで本気で怒るなんてな」

「いやあ、あれは怒っても文句ないだろ？皆の事情を知らないくせに知ったようなこと言ったから」

「…………確かにな」

「ゼレカさん怖かったですよ」

アスタノトがマジで震えてる

「ははは、ゴメンゴメン。ホントは皆には見えないようにしようと思っただけど、つい力が入りすぎた」

「ホントにぞくぞくとしたわ

」

「そうだった？てゆーか皆本気でビビリ過ぎ」

「……あれは俺でも恐怖を抱いた」

「大魔王なんだから怖くないはずだよ」

「心が折れるかと思った」

「メフィスト、ゴメンね」

「直視してたら危なかったかも」

「じゃあ今頃あいつはまずいかもね」

「……ゼレカ、ありがとう」

エレスから感謝の言葉が紡がれた

「あの時の私達の怒りをゼレカが晴らしてくれたから……だからありがとう」

「いやいや、それは俺の台詞。俺がいない間になんか言われたから剣を向けてたんでしょ？メフィストもアラクネも力使ったみたいだし。ありがとう」

「ゼレカ……」 「あら、気付いてたの？」

「ばれないと思ったのに」

「アスタノトとベルゼブも他の奴を抑えてくれてありがとう」

「……」

「よかったです。何時ものゼレカさんに戻ってくれて」

「ははは、俺はもう戻したつもりだったんだがな」

……エレスにはアシユラに会った事は言わなかった

余計な心配をさせない為に
そして……『あの事』も

怒りを表に（後書き）

ゼレカが魔物退治に行った後

「魔物？ そんな魔力は感じなかったけど」

「それよりもニンブルケティックの魔王よ。そなたはあんな『ただの悪魔』をそんなに信じているのか？ 魔力が他の悪魔より強いだけではないか」

ゼレカを悪く言われて『魔王化』しようと思った

「じゃあ、その『ただの悪魔』よりも弱い貴方は一体何なのかしらね」

「魔力だけで全て決まるなら、貴方は魔王にはなっていないと思います」

アラクネもメフィストも私と同じ気持ちみたい

「ふう、あまり議長をいじめるのはよくないと思うよ」

「全くだ。お前らは戦争の申し出に着たのか？」

「……」

『ビクッ!!』

ベルゼブが他の魔王を睨みつける

アスタノトも魔力を抑えてる

「止めないか。……………それで、どうなのだ？」

「……………私は彼を信賴してるだけ。力なんてかんけいないです」

自分の思ってる事を話す

さっきの間にふたりは魔王化してた

「それは『禁術』を使ったかがあったな。ただのいけ…」

「！」

そこまで言われて無意識の内に剣を抜いていた

「…なっ」

魔王化もしてただ一言

「ゼレカは……………ゼレカは、『イケニエ』なんかじゃない!!」

悪戯夢―望郷―（前書き）

体内時計が狂ったのか、昼夜逆転しています

悪戯夢―望郷―

「零花、何点だった？」

「お前は？」

「ふふん、梨絵に教えてもらった成果がでて八十点！」

「俺九十五」

「負けた」

「もう、■■■。私が教えたのに負けてどうするの」

「ごめーん梨絵。負けちゃった」

「零花、どうだった？ちなみに俺は七十だ」

「英司、お前■■■にも負けてるぞ」

「■■■にも！？」

「英司には勝てたー！」

「目標は零花だったでしょ？」

「むぐっ」

「梨絵はどうだったんだ？」

「貴方と五点差」

「ようするに満点だろ」

「そうとも言うわね」

ガラガラっ

「おはよっございまーす」

……おいおい、もう授業終わったぞ

そいつは鞆も置かずに俺のところに来た

「零っ花ー♪例の物は？」

「……多矩夜^{たくや}、せめて鞆置いてから来いよ」

「細かい事を気にしてちゃ人生つまんないぜ」

「……はいはい」

「それより、持ってきただろうな？」

「ほらよ」

「ふおっほー♪ありが…」

「その前に、報告してからな」

「わかった、すぐ行ってくる！」

多矩夜は全力で教室をでていく

「はぁ、クラス中の注目の的じゃねえ」

「まあまあ。いーだろそのぐらい」

「俺はお前みたいに脳みそまで筋肉じゃねえの」

「誰が筋肉だ！見た目じゃもやしみたいだろ」

「自分で言ってる恥ずかしくないの？」

「梨絵、多矩夜は自虐趣味なんだからあんまり虐めてやるなよ」

「あー、そうね」

「おい！天才コンビめ！■■■も何とか言ってくれよ」

「えーとここがあれでこれが……」

「真面目な娘は見直ししてる！」

「ふふっ、ははは！やれやれ、毎日が楽しいや」

『……………残りフツカ』

「……………またあの夢」

目を覚ますと見慣れない天井だった

「あれ？ここは……」

「目、覚めた？」

「メフィストか。俺どうしたんだっけ」

「覚えてないの？」

「……………時空船に乗ったところまでは覚えてる」

「その後すぐ倒れて驚いたよ」

「まあ、あんなだけ魔力使えば倒れもするだろう」

「全く無茶ばかりして……………」

「心配かけたな。今はどの辺？」

「深航路に差し掛かったあたり」

「……………最航路までに魔力を回復しておくか」

「それはベルゼブがやってくれるって。そのかわり、『……………ゆっくり寝てろ』だって」

「ふふ、わかった。じゃあお言葉に甘えて寝かせてもらおうか……………」

言い終わるか終わらないかで意識がとんだ

悪戯夢―望郷―（後書き）

ゼ「今日はデインが居ないから適当に進める事にする」

エ「デインさん居ないんだね」

ゼ「なんか急用があるからそっちに行くって」

エ「じゃあ何する？」

ゼ「んー、吸血魔王について説明するか」

『吸血魔王』

吸血鬼の上位種。

黒血を吸って生きながらえるが、赤血を吸う事によって黒血を吸う必要がなくなり魔力を回復させる事もできる。

魔王化、吸血等ができる。

ゼ「軽く説明するとこんな感じかな」

エ「まだほそくする必要があるから完全な説明じゃないよ」

眼鏡（前書き）

『眼鏡』と書いて『めがね』と読む不思議

眼鏡

「…………あれ？寝てた」

んーと、書類があまりにもあったから処理しようと思って……
「ああ、そっか。書類片付けてたんだっけ」

「ゼレカ、寝てたでしょ？」

「寝てたみたい」

眼鏡をかけて書類に目を通す

「まだまだ終わらないよ。この多さはいじょうだって」

「会議行ったりさぼったり逃げたりしてたからしょうがないよ」

「最初以外はみみが痛いです」

「会議はしょうがないとしてもサボりはなあ……」

「さぼったわけじゃないんだけどね」

「よっと、残り半分」

「もう半分！？はやくない？」

「書類なんて内容を隅々まで目を通してサインすれば終わりなんだから簡単でしょ」

言いながらサインしていく

「それが面倒なの」

「たしかにこれだけ数があると面倒だけど」

「だくから、そろそろきゅうけいにしようよ」

「まあ、俺は少し寝てたけど働きっぱなしだからね。じゃあ休憩にしますか」

「はあー。やっときゅうけいだよ」

「……一……十……百……この量なら今日中には片付けられるね」

エレスがこつちを振り向く

「ゼレ……カ？なぁにそれ？」

赤紫のフレームの眼鏡の事らしい

「ん？これは眼鏡。下界にいた時に使ってた物だよ」

基本悪魔は皆視力がいいから、こういうのは使わないらしい

「度もゆるいのを使ってるから誰がかけてもあうと思うよ」

「へえ……」

おおっと。お姫様は眼鏡に興味深々のようだ

「かけてみる？」

「いいの？」

「もちろん」

俺が見たいっていうのもあるし

カチャ

「どう？ 似合うかな」

「！！」

眼鏡をかけて上目遣い。その可愛さ殺人級である

「とても良く似合ってるよ。いつもとは違う可愛さがある」

「そ、そうかな／＼／＼」

「よければあげるよ」

「え？ でも……」

「造ればあるし、君が持つてる方が似合うからね」

「ありがと、ゼレカ」

「いえいえ、それよりも残りを片付けようよ」

「もうきゅうけい終わり？」

「終わったら肩揉んであげるから」

「……それだったらいいかも」

眼鏡の威力半端ないですよ

眼鏡（後書き）

デ「ふふふ、私は帰ってきた！」

ゼ「随分と早い帰りだったな。予定では後もう丸一日かかる予定だったろ？」

デ「一日中安静にしてたら思いの他早く回復したらしい」

ゼ「全く、そんなになるまで我慢してんじゃねえよ」

デ「我慢というか気づかなかっただけだけどな」

ゼ「はあ、作者が帰って来たので更新できるようになりました。今後ともよろしくお願いします」

デ「次回分はソルの紹介をします」

諸々（前書き）

ジメジメ空気が辛いです

諸々

「……………」

鏡の自分を凝視している

「やっぱりオッドアイは目立つな」

左目が緑ってというのが気になる

マムートから貰った『夢幻の眼』だけど、一回……………だけ使ったな

とにかく、今度使ってみよう

「ゼレカさん？ いませんか？」

「後ろにいるよ」

「……………もう驚きませんよ」

「なんだ。もう慣れたか」

「いえ、それよりも時空船が損傷していたので修理をお願いしたいんですが」

「……………あー、うん。じゃ直しとくわ」

多分、深航路の時に傷ついたんだろうな

時空航路の深航路には『パニックツイスト』が住んでるから仕方な

いっちゃ仕方ないんだけど

「そうだ。言い忘れてたけど城の警備お疲れ様」「いえいえ、警備といってもアルフォートさんと城の中に居ただけでしたから」

「それでも安心して連合会議に行けたのはソルとアルフォートのおかげだよ」

「信頼されていますね」

振り向いて格納庫の方に歩きながら答える

「もちろん。貴女が信頼してくれているように」

――格納庫

「結構浅いな」

率直な感想がそれだった

今までパニックツイストを片付けてたのは俺だったから、ベルゼブが倒せるか心配だった

別にベルゼブが弱いってわけじゃないが、……あの巨大なタコみたいなのは初めて相手にすると結構手こずるからな

「このこと……そこ……後は……っと」

修理を終わらせて戻る

——ギルド『悪魔の眼』

「あっゼレカさん」

「暇になったから適当な依頼を請けにきた」

「ランクはどうします？」

「もちろん最高ランクで」

「んー、現在の最高ランクですとS級の『マグマドラコの排除』だけですよ」

「マグマドラコか。熱いのはやなんだけど困ってるなら手なずけてくるか」

「また魔物を連れてくるんですか？」

「街外れの牧場……『フラワーハウス』で育ててるから大丈夫ですよ」

「たしかに依頼の内容は排除ですから連れてきても大丈夫ですけど……」

「じゃ、これで決める」

「受理完了しますね」

諸々（後書き）

デ「予告通りソルさんの紹介です」

ソルーティア

髪と瞳の色はエレスと同じ。

エレスの世話係。

普通の悪魔より魔力が大きく、扱える属性が多い。
エレスの親の代から遣えているが歳はゼレカより下。

ソ「久しぶりに出番があった気がします」

ゼ「確かに。最後に出たのって番外編の前だね」

デ「話の向きがどっちにいか迷ってたのでなかなか出させてあげられませんでした」

ソ「今度からはもっと出番を増やしてほしいですね」
デ「多分次回はアルフォートを紹介します」

火山探索（前書き）

そういえばタイトル変えました

火山探索

「……………あっつ」

マグマドラコを探しに火山の中に入ったまではよかったけど、ものすごく熱い

暑いを通り越して熱い

呼吸するだけで痛いし

「だぁーもう、歩くだけで汗がでる！まともに集中もできやしないぜ」

……………なんて言ってるけど後ろの気配に気づかない俺じゃないさ

「さっさとマグマドラコを倒さなきゃいけないのに」
気配がどんどん近づいてくる

後ろを振り返らずに言ってみる

「……………何の用だ？」

「お前こそマグマドラコに何のようだ。俺はどうしてもあの竜の鱗が欲しいんだ」

ん？どこかで聞いた覚えがある声だな

それも同じような状況で

「……………シェイド？」

「ゼレカ！なんだお前か」

「それはこっちの台詞だ。どうしてマグマドラコの鱗をとりに来たんだ？」

「いや、その、いつもマリーヌには世話になっているからプレゼントでもしてやりたいなーって思ったからさ／＼／＼」

「世話になっているからじゃなくて好きだからって言っちゃまえよ」

「そ、そそそそんなわ、わけわけないだろ」

「バレバレの動揺どうもです」

「そ、それよりお前は何しに来たんだ？」

「暇だから何か狩ろうと思って」

「……………マグマドラコって、ギルドじゃSランクの魔物だろ？」

「俺ランクとか関係ないもん」

「……………そうですか」

「つーかドラコいなくね？マグマの中覗いたけどいなかったし」

「マグマの中にはいないぞ。奴らは溶岩に擬態して逃げ場をなくしてから獲物を喰らう習性があるからな」

「道理でさっきから足場が動いてるとおもった」

「…………え？」

「いや、だから足場が……逃げ場を絶ってから獲物を喰らう？」

「ああ」

「ふーん」

『…………』

足元に指を指す

「ん？」

「うん」

それにシェイドが頷いた

「あれ？こんな大きかったっけ」

「デカイのはこのぐらいの大きさだ」

「……とりあえず鱗採つとけば？」

「そうだな」

シェイドが鱗を採ってる最中も暴れる気配がなさそうだしな

「……よし、っと」

「採れたのか？」

「ああ、これだけあれば指輪が造れる」

「婚約指輪？」

「違うっつーの！」

「結婚したっていいんじゃない？互いに好きなんだから」

「!!？」

もう言葉がでてないな

そんなに恥ずかしいのか？

火山探索（後書き）

ゼ「それでは予告通りアルフォートの紹介です」

ア「何をしているのだ主？」

ゼ「デインの奴に『たまにはゼレカが進行役やってよ』って言われたから仕方なく進行役やってるんだよ」

ア「私の紹介だったな」

ゼ「無視するな無視を」

アルフォート

決まった姿をしてないが、いつもはひとがたで銀色の服に銀色の髪、銀色の瞳と肌以外は銀一色である。

ゼレカと契約するまではナブラート村の祭壇に埋もれていた。

シェイドとは兄弟。

炎竜の幼体（前書き）

前書きに何を書こうかなー♪

炎竜の幼体

……おかしい

これだけ騒いで暴れているのに、全くと言っていいほど補喰する意思がみられない

「どうしたゼレカ？」

「やっと言葉が出たか。喋れるようになるまで待ってたんだからな」

「お前が変なこと言うからだろ！！」

シェイドの言葉は聞こえないふりをするとして、真面目に敵意を見せてこない

「……ИЙΨБЦЧШ？」

『ΨШБНЩЮΦ』

「やっぱりそうか」

「何だって？」

「簡単に言うと『私達は今逃げている最中ですが、成体はともかく幼体はともひとりでは逃げられません。保護してもらいたいのです』と言われた」

「あの短い言葉の中にそこまでの意味があるとはな。自分に驚かないうって驚いてただろ？」

「まあ一番驚いてたのは、『私の言葉が分かるんですか!?!』だったけど」

「ああ、そっちな」

「Жμξο……φυ?」

「!?! Ж К Л Б π τ Ш?」

「τ Ш」

『К τ Л』

「どうだった?」

「今はマグマドラコの大移動期だから、次にここに戻って来るまで保護してあげるって言った」

「それで?」

「『ありがとうございます!! 私達は悪魔から危険視されていますが、迷惑はかからないですか?』って言われて俺は魔神だと返答したら……」

「ストップ!! 簡単に魔神だとばらすな」

「大丈夫だろ。ともかく、『それでしたらお願いします』と言われただけだからマグマドラコの幼体を引き取る事にしたから」

「どこで育てるのか見当はついてるのか?」

「フラワーハウス」

「フラワーハウス……大丈夫なのか？あそこはAランクないしSランクの魔物達が住家になっている所だぞ。よくお前も魔王もどうかしようよ思わないな」

「それは俺が管理つか、俺が創った場所だから何の心配もない」
「……うん、もうお前が神だって言われても疑えない」

「魔がつくけど神ではあるからな」

なーんて話してる間にマグマドラコに連れられて『巢』のような場所にたどり着いた

『ΔΓΟΩκX』

「ДНПёЖ」

『ピイイイ』

そこには炎が小さく形どった竜がいた

「こいつが……」

「『炎竜の幼体』……マグマドラコの中でも一際潜在能力の高い幼体か」

『НДТΥ……夢幻の遣魔よ。汝に任せるぞ』

「!」

「何だ、俺の言葉が分かったのか」

『汝達の言葉は遙か昔に覚えていたのでな』

「遙か昔……か。お前は一体どのくらい生きてるんだ？」

『確か……何千年単位だったな』

「何千年で……」

「まあ、それよりも」

幼体に近づく

『ピィ』

「確かに保護したからな」

『ありがとう……』

炎竜の幼体（後書き）

デ「いやー昨日は助かったよゼレカ」

ゼ「全く、俺に押し付けやがって」

エ「そのわりにはやる気があったよね」

ゼ「頼まれた事は全力で取り組むのが俺の信条だからな、と言って
みる」

デ「照れなくていいぞ」

ゼ「照れてない」

夢の中? (前書き)

久しぶりのラブチュッチュ話です

いやー、甘いです

夢の中？

「いつの間にか夜になっちまったな」

フラワーハウスの世話係であるバルチスに『マグマドラコの幼体を預かったから』って言って置いてきた

だから安心して城に戻るってわけだ

……まあ『ちょっとゼレカさん！これ以上僕の仕事を危険にしないで下さいよ！』という声がした気がするけど、気にしたらまけだよね♪

——城・露天風呂

「ふうー」

ああ、気持ちいい

汗はかくは体は痛い（熱気で）はで大変だったあ

「……シェイドの奴、喜んで貰えたのかな？」

あれからふたりで街まで戻って、あいつはマリーヌの所に、俺は報告に別れたからどうなったのか知りたいな

「いやー、若いっていいね」

とは言っても俺もまだ高校生だけど

「……………」

ハッ！！寝かけてた！

心の中ではイロイロ思ってるけど言葉にはしてないから、『ゼレカさんてあまり喋りませんよね』と言われることがある。心では喋りまくりですけど♪

「そろそろでるか」

ぱちゅ

ガラガラ

——自室へ続く廊下
やっぱりこの時間じゃ警備隊ぐらいしかないよな

当然っちゃん当然だけど

とゆーか、警備隊の隊員て何時休んでるんだろうか？
ガチャ

電気もつけずにベッドにいく

流石に疲れた

「……………」

よくよく自分のベッドを見ると、何故か膨らんでいる
それはそうと、朝起きた時も毛布に魔力を染み込ませた覚えはない
し、風系の魔法を使った覚えもない

……大体の、いやほぼ絶対と言ってもいい程予想はついてるけどね

「……………」

ブックライトに手をかける
カチッ

本を読む為のライトだからそんなに明るくはないが、何があるかを
知るためには十分すぎる

……………やっぱりな

「寝ぼけすぎだろ……エレス」

小声で言う

「……………ん？ゼレカがいる？まだ……夢かな」

「そうだよ。まだ夢の中だよ」

「まだ夢？じゃあ起きたらゼレカいる？」

「もちろん。でも、もう少し夢の中にいよう」

「うん」

そのままエレスを正面から見える位置に移動する。その体勢が押し倒したような格好になっているけど、まあこれは『夢』だから♪

「……クチュ……ジュル……」

「ん……はぁ……あふう」

「……は……エレス、いつもと違うことしてみていい？」

「いつもってというか、起きてる時でしょ？」

「そうだったね」

「痛くないことだったらいいよ」

「そんなことはしないさ」

と言いつつエレスの服を前だけあける

ああ、ご心配なく。見えてる部分はないから

「ん、ゼレカ／／／」

「ペロッ」

「ひぁっ！！」

鎖骨に舌を這わせる

「ペロペロ」

「ん……はぁ……にゅ／／／」

「恥ずかしい？」

「こ、こんなことされて恥ずかしくないわけないよ／＼／」

「それもそうだね」

「むにゅ、現実でも夢でも意地悪して」

「ふふふ、ネローン」

「（ビクッ）ん！」

「はあっ、そろそろ覚めてもいいよ」

「じゃあ……そろそろ起きるね」

「うん、おやすみ」

「おやすみじゃなくて……おはようだ……よ」

「そうだったね」

そのまま寝ちゃったみたい

「ふぁー」

俺まで……眠く……なっ……て……きた

「……おやすみ」

「ん」

「おはよう、エレス」

「ゼレカ、おはよう。今日は夢にゼレカがでてきたよ」

「君の夢に？」

「うん。……ちょっと積極的だったけど／＼／」

「へえ、夢でも君に会ってたんだ。どんなことしてたの？」

「……鎖骨……／＼／」

「鎖骨？」

「な、なんでもないよ／＼／」

「ふふふ、もう覚めてもいいよ」

「！！ゼレカ」

「はっはっは、じゃあ俺はちょっと出かけるから」

「ちよっ、ゼレカ！あれ夢じゃなかったの！？」

「はっはっは」

夢の中？（後書き）

デ「はは、ちょっとした事情があってゼレカとエレスさんはいません。ということでバルチスの紹介だけです」

バルチス

いろいろあってゼレカに捕まった中級悪魔。

茶色の髪で緑の瞳。

身長はゼレカより少し小さい。

性別は男。

バ「えーと、バルチスです。一応ゼレカさんの部下です」

出会いメフィスト（前書き）

そろそろ目標の五十話です。

そういえばたまたまみたら、ユニークが7777でした。

出会いメフィスト

「魔王様、人間達が攻めて来ました!!」

「第四、第五部隊で対処にあたらせて」

「民の救助は如何致しましょう!？」

「第一部隊を救助、不死部隊を囷にしてぎりぎりまで持ちこたえて」

「うわああ!! 毒された魔物だ!!」

「くっ」

ザシュ

「今の内に浄化をすませて、早く!」

「はい! 医療部隊、急げ!」

『はあ!』

くっ、圧倒的に後手にまわったわ

大部分の部隊がない時にここまで攻められるなんて
まさか知られていた!?

でも人間がこっちの情報を得られる筈ないし……

「浄化完了しました！」

「救助完了しました！」

「よし、第三部隊は民の避難にあたつて。残りは人間達を追い返して、できるだけ殺生は避けてね！」

『はい！！』

「全部隊突撃！」

『わぁー！！』

これで一先ずは安心だわ

「魔王様、後ろ！！」

「えっ？」

後ろを振り返ると誰かが斬りかかってきた

ガチン

「くっ」

「…………ふーん、大した洞察力、判断力、瞬発力だ。流石は《ゲノムルート》の魔王だ」

……なんて重い一撃！？ 咄嗟に魔力で腕を覆わなければ確実に腕が折れてた

「あ、貴方は？」

「名乗る程の者でもないですよ。ただ、貴女の敵ではないので御安心を」

「いきなり斬りかかってきて敵じゃないって言われて信じろと？」

「それもそうですね。ではあの人間達を元の世界に帰しますよ」

そう言うと、ロングコートを風に靡かせてる男は戦場の方に向いた

「転々とする鳥、かの者達を帰るべき場所に帰し給え。『強制転移』
ストロングポート

」

パチン

シュワ！！

「!？」

男が指を鳴らしたら人間達はいなくなってた

「何したの？」

「安心して、殺したわけじゃない。自分達の世界に帰しただけだから」

「……『強制転移』。貴方も何処かの世界の魔王？」

「俺自体は魔王じゃない。ちょっと主の指示でこの世界に來ただけさ」

「主って？」

「『この前の書類の返事はまだ？』って言ってましたね」

「あっ！！そういうこと」

確かエレスナーグにそんな事を言われてたわ

「それじゃあ伝言も伝えだし、貴女の力も理解したし帰りますね」

「うん、助かったわ」

「いえ」

そう言ったと思ったら、もう何処かに消えていた

「あっ、名前聞いてなかった」

出会いメフィスト（後書き）

街の民に聞いてみた

「ゼレカさん？強くて、謎めいてる不思議な方です」

「魔王様をいじめるのが好きな、ちょっと危ないひとですね」

「全身真っ黒の怪しいひと」

デ「こんな結果だった」

ゼ「そう思われていたのか……………」

幻惑・困惑・疑惑（前書き）

そろそろ番外編をやりたいです

幻惑・困惑・疑惑

「さてと」

エレスを部屋に置いてさっさとでてきたけど、何しようかなー♪

さっきのエレスの真っ赤な顔、可愛かったなー

「ん？」

おかしい…………

この廊下のデザインも構造も全部同じだが、さっきから全く前にすすんでないようだ

「…………『真実の瞳』」

『夢幻の瞳』を使う

すると絨毯に瞳が反応した

「……………分かってるんだぜ、ヴォルケノ
なにもない筈の絨毯に声をかける

「流石ですねゼレカさん」

絨毯から赤い煙りが立ち上る

「あの程度の幻術では欺けませんか」

「ふっ、生憎と俺は脳や精神に作用する術や技は効かないからな」

煙りがひとの形を形成していく

「そうなのですか。なら私は貴方には勝てないですね」

「よく言うぜ。お前の最も恐ろしい能力は…」

「すとっぷ！それ以上言わなくていいです。あの姿は好きじゃないんですよ」

小さなロリ少女が言うと言実がまずぜ

「それよりもアシユラにはいきなり斬りかかったのに、私には斬りかからないんですね」

「俺はアシユラやヴァジラ、『あいつ』には恨みがあるがお前には無いからな」

「あら……意外と冷静なんですね」

「種族で差別する、なんてことは好きじゃないからな。悪魔にだって下衆な奴もいるし、天使にだって優しい奴もいるからな。もちろん人間にだって」

「………強いんですね」俺に聞こえるか聞こえないかの声で言った
もちろん聞こえたけど

「強いわけじゃないさ。ただ、それぞれの個性をみてるだけだ」

「それぞれの、個性？」

「ああ。力の強い天使や魔力の無い悪魔がいても不思議じゃないさ」

「……………」

「おっと、ごめんごめん」

「謝る必要は無いですよ。……………私は」

何かを伝えようとしている

でも躊躇っている目だ

そして意を決したように見つめてくる

「……………私は『天使』なんですから」

「うん、知っているよ」

「……………そう、だね」

何処か寂しげに返事をしてくる

「じゃあ私そろそろ帰りますね」

「……………ああ。またな」

「はい、また……………必ず！」
そう言って消えてしまった

「…………やっぱり似てるんだよな。あいつに」

幻惑・困惑・疑惑（後書き）

街の人に聞いてみた

「葉月さんの息子さんは毎日毎日怪しげな事をしてますね」

「零花？はっ、きにいらねえ奴だ」

「最近変な物音がして何やっているやら……。この間も異臭騒ぎをおこしてたし…」

ゼ「って、人間の時の評価も今と変わってねえ!!」

デ「実際は料理とか発明とかしてるだけなのにな」

悪戯夢―壊れる日常―（前書き）

もっと甘い話を考えたいです

悪戯夢―壊れる日常―

「はあ……はあ……」

行かなきゃ

「はあ……くっ……」

行かなきゃ、皆が

「はあ……はあ……」

早く、早く！

「あれ？皆帰らないのか」

「あつ零花。今日はそれぞれやらなきゃいけない事があるから」

「華娜衣かなえ以外はな」

「華娜衣に変な事しないようにね」

「しないって。全く、相も変わらず梨絵は心配性だな」

「親友として心配なだけよ」

「そうかよ」

「そういえば多矩夜は何処行ったんだ？」

「…………ヒント、お前が渡した物」

「ああ……」

「じゃ、またな」

「おう、また明日」

華娜衣を迎えに教室に行く

「…………また、『明日』か」

「…………英司」

「あっ零花」

「悪い、待った？」

「ううん、今来たところ」

「ならよかった」

…………何だろう？

…………何か胸騒ぎがする

「ねえ、零花」

「なに？」

「ちょっと、話があるの」
「そう言い机の上に座る」

「話って?」

「……………もし、もしだよ。もし……………私が……………零花のことが好きって
言ったら……………どうする?」

「どうするも何も、今まで気付いて無いと思ってた?」

「え?」

「というか、英司にも梨絵にも多矩夜にも全員に気付かれてたよ」

「ええー!!」

「ふふ、俺も君が好きだよ。君と出会った時から、ずっと」

……………何言ってるんだ、俺

この空気に押されて本音がでちまったな

「……………零花／＼／＼」

……………俺を呼ぶその声に照れと……………悲しみの表情があるのはなんで
だ?

「……………ありがと。零花、零花」

華娜衣の両目からうつすらと涙がでる

「おいおい、泣くなよ」

「零花、ありがと。……幸せに……生きて」

「?何言って…」

ボタン!

「…………ごめんね零花、……さよなら」

「ハッ!」

華娜衣は何処に?

……胸騒ぎがする

「くっ!」

急いで走る

何処にいるか分からないけど、とにかく走る

「華娜衣…英司…梨絵…多矩夜」

何処に行こうとしてるのか自分でも分からない

だけど、足が勝手に進む

「はぁ……はぁ……」

『……ラスト一日』

悪戯夢―壊れる日常―（後書き）

城の使い魔に聞いてみた

「エレスナーグ様？魔王様はとても優しい方ですよ」

「民にも私達にも誰でも分け隔て無く接して頂けますし」

「御側にいられて幸せです」

デ「お前とは真逆の評価だな」

ゼ「当たり前だ」

出会いゝアスタノト&a m p;ベルゼブゝ(前書き)

今回の話は視点を決めてないので地の文がないですよ

出会い〜アスタノト&ベルゼブ〜

「姫様、次の謁見です」

「レイレイ、確かに私『困ってる民の願いを直接聞く!!』』っ言
ったけど、こんなに多いなんて聞いてないよ」

「明日までですから頑張ってください。それより次の謁見ですよ」

「むう」

カツカツ

「どうも。お初にお目にかかります、ゼレカ・ステイルと申します。
我が主より託された書状をお持ちしました」

「主って？」

「我が主は《ニンブルケティック》の魔王です」

「ああ〜エレスの」

「はい。今回の同盟締結に賛成するとの事です」

「姫様、いつの間にそんな約束を？」

「ちよっと前に『敵対してるわけじゃないし、同盟結んじやお』っ
て約束した」

「……………そうですか」

「えっと、ゼレカだっけ。書状を見せてくれる？」

「はい」

「では、私が受け取ります」

「いや、私が読むからいい」

「ですが…」

「私が読む」

「……………わかりました」

「……………うんうん、……………よくわかった。じゃあ私がサインして
同盟締結だね」

「よろしいので？ベルゼブ様に報告しなくても」

「魔王は私だよ」

「そうですけど……………」

「じゃあこれで同盟…」

「……………待て、アスタノト」

「！！ベルゼブ様……………」

「うゆ？どうしたの」

「……………同盟なんか結ばなくても大丈夫だ」

「でもいざって時に…」

「……強いのか弱いのかも分からないのに『いざ』って時どうなるか分からないだろ」

「………」

「………ふう、あんまし他の世界の事情に首突っ込みたくないけど、同盟を認めてもらえないか『幻惑の大魔王』ベルゼブ」

「……俺を知ってるのか」

「そりゃ普段は表にでなくても、『大魔王』なら魔力で分かるさ」

「……お前誰だ？」

「俺はゼレカ・ステイル。『夢幻』のゼレカって言えば分かるかな」

「『夢幻』！？あの男が！？」

「へえ」

「それで、話を戻すけどどうやったら認めてくれるんだ？」

「……そうか、『夢幻』か。……バハムートを殺った………なら話しは簡単だ。俺と闘え」

「なっ、ベルゼブ様何おっしゃって！？」

「ほお、分かりやすいな」

「……いくぞ」

出会い〜アスタノト&ベルゼブ〜（後書き）

城の使い魔に聞いてみた

「とても冷静で忠実に主にお仕えする姿が、正に私達の鏡です」

「頼まれた事は最善・最速で処理する能力の高さ」

「主様に負けず劣らず信頼が高いです」

ゼ「……………」

デ「凄いな、ソルの人気」

ゼ「俺、何かした？」

デ「さあ？」

水浴び（前書き）

初めて原稿書いて投稿してみました

水浴び

「……暑」

「あついね」

「何だってこんな暑いんだ？」

「今日は年になんかいかの『熱砂の流動』だから、地表のおんどが
急激にじょうしょうするんだよ」

「年に何回かって、こんなのが何回もあるのか……」
「そうだよ」

「……じゃあその度に今みたいになるってことか？」
「うん♪」

……『熱砂の流動』の度に一緒に水浴び、か
俺の理性& a m p; 平常心がどこまで持つか……

今日は暑いから露天風呂の隣に穴を創って魔力（水）を流し込んで
水風呂を造った

エレスに「入れば？」って聞いたら「うん」て言ったから気に入っ
てくれて良かった………と思ってたなら、服を掴まれて俺も入ら
せられた

一応タオルをお互い巻いてるから大丈夫（限度があるけど）

「今更だけど目隠ししなくていいの？／＼／」

「むー、ほんとゼレカはお風呂とかは照れるよね。部屋ではそんなことないのに」

「そういう君は俺とは逆だよ」

「つまり、ここならあなたを弄り放題♪ってことだよ」

「……………は？」

ガシッ

「つーかまーえた♪」

「ちよっ／＼／エレス！？／＼／」

いきなり肩を掴まれてエレスの方に向き直される

「ゼレカ、私のタオルはだけさせていい？」

「ま、まままま待った、いったたたいな何ぞ！？」

「ふふっ、やめた方がいい？」

何かを企んでいる目だけど、やめさせないわけにはいかない

「もちろん」

「じゃああ、キスして」

「え？」

格好が格好だから緊張する

「……はいはい／＼／＼」

そつと口づけをする

「……部屋戻ったら酔わせてやる」

聞こえるか聞こえないかの声で言った

「ん？」

「何でもないから楽しみにしてな」

「うん？」

水浴び（後書き）

デ「いい加減評価祭も飽きてきたので、いつも通りの後書きに戻します」

ゼ「……俺限定でいろいろえぐられたけどな」

デ「まあ、基本初めてお前のこと見たらドSか鬼畜かにしか見えな
いもんな」

ゼ「それとこれは別問題じゃね？」

デ「『面接は始まって十秒で決まる』っていうじゃん。それと同じ
で第一印象で大体決まるって事なんだよ」

ゼ「……そんなもんか？」

デ「そんなもんさ」

仕返し（前書き）

祝五十話

仕返し

水風呂から上がって部屋に戻る

「氷解、凍結、凍てつかせろ。『氷の嵐』
ダイヤモンドダスト」

「詠唱を変えるだけでここまで威力がさがるんだね」

「俺が独自に創った詠唱だからな」

「はあく涼しい」

……………ニタア

「エレス、口開けて」

「？」

不思議がりながらも口を開けてくれた

ポイツ

「……………あまい。これっ…」

目がとろんとなってる

「気分はどう、エレス？」

「え！あ、あのゼレカさん」

前に作ったチョコレートを食べさせたから、今酔ってるね♪

「あ、あの、ち近いんですけど……」

「さっきもこうしてたじゃん。君の方から」

「そ、それはそうですけど……」

ギユウツ

「ひあっ!?! な、何して……」

「何って、抱きしめてるだけだよ?」

「あ……う……そうですね／＼／＼」

「さっきはほとんど裸で抱きしめたのに、これで恥ずかしいみたいだね」

「……あう／＼／＼」

顔が真っ赤になって今にも倒れそう

「………ねえエレス。最近よく夢をみるんだ、昔の事の」

「昔、ですか?」

「うん。この世界に来る前の事。なんでだと思う?」

「私は夢についてはあまり詳しく無いので分かりませんが、夢は願望や思い出等を寝ている時に見るらしいですよ」

「……………願望か。確かに当たってる」抱きしめてる体勢から横になる

「でも、俺は後悔しないように生きるって言ったから。……………君を守るって、誓ったからね」

「ゼレカさん……………」

「と、まあ嘘の夢の話は置いといて」

「嘘だったんですか!？」

「エレス、今がどういう状況か分かって？」

俺がエレスを押し倒してるような格好

「……………」

「とっても可愛いよ♪その怯えた様な潤んだ瞳」

「ぜ、ゼレカさん。何か怒ってません？」

「さっき風呂場で攻められた事なんて気にもしてないよ♪」

「……………えっと、すいません」

「謝らなくても怒ってないって。でもせっかくだし、このまま朝までこうしてようよ」

「朝まで!？」

「おやすみ」 「……お、おやすみなさい／＼」

仕返し（後書き）

ゼ「もう、何も失いたくない。何もしてないのに、ただ在るだけなのに消える運命なんて！」

ア「主……」

ゼ「力を得ても、力が無くても、結局は同じなんて！でも俺は、力が無くても助けてみせる。俺がたすけるんだ！」

ア「主よ。嫌いな物があるからと言って捨てては駄目だぞ」

悪戯夢―終焉と始まり―（前書き）

悪戯夢編終わりです

悪戯夢―終焉と始まり―

「はぁ……はぁ……」

……走りながら考える

これは夢だと

でも、本当にあった『葉月零花』の思い出。『葉月零花』の……最後

「はぁ……あそこだ！」

身体は自由がきかない

俺の身体じゃないみたいだ

「華娜衣！」

角を曲がって路地に入る

俺の目に飛び込んできたのは赤い水溜まりだった

「!？」

「あん？誰だお前」

「まあ誰であっても見逃すわけにはいかないけど」

白い服に身を包んだ男が三人いた

「華娜衣！英司！梨絵！多矩夜！」

皆の身体は紅く染まっている

「なら、さっさと始末するか」

「待てよアシユラ。俺にやらせろ」

「止め給えヴァジラ、アシユラ」

「お前等！いったいみんな……なに……」

ザクッ！

斬られた

アシユラでもヴァジラでもないもう一人の男……いや『天使』に

ドサッ

「どうだい？胸を斬られた感覚は」

「はぁ……んっ……か」

「はっ、ざまあねえな！威勢のよさはどうした？」
「滑稽だね」

「て……めえ……ら……みんなに………何……しやがっ………た」

「ほう、まだ喋る力があるか」

「でも駄目ですよミカエル様。こんなのすぐに死にますよ」

「散り際の気力でしょう」

ミカエルは少しだけ口元を上げる

「おもしろい。最後の気力とやらを見てみたいな」

「はぁ………はぁ………」

ミカエルは華娜衣を俺の前に連れてきた

「彼女を助けたいか？」

「華娜…衣」

「今ならぎりぎり間に合う。早く治療し給え」

………

「まだ………生きて」

「ああ、まだ生きられるとも。今治療すればね」

「くっ………」

全身に力を込める

無理矢理立ち上る

「はあ……はあ……」

自分の胸からも出血してる。関係無い

「華娜衣……今……病院に……」

ドスッ

「がはっ！」

華娜衣ごと俺を貫く

そのまま力無く倒れる

「て……てめ……え……」

「おや失礼」

「相変わらず酷い趣味で」

「ミカエル様、他の奴ら全員止め刺しといていいっすか？」

「構わないよ」

「や……やめ……！」

ドスッ

ザクッ

グチャ

「!!」

「ひっひっひ、どんな気分だ？」

「み……んな……」

「そろそろその彼女とお別れだよ、葉月零花くん」

「なん……で……俺の……名前………知って」

「だって、君が彼女達の友達だから」

アシユラが憐れむような目で見下す

「君が彼女達と一緒にいなかったから、私達は『今』彼女達を楽に消す事ができた。私達にとっては恩人てこと。その恩人の名前を知らないわけじゃないか」

「……!」

「私からも礼を言う。君が今、彼女達といたらあと十年は消すチャンスが無かったからね」

「つまりはお前がこいつらを殺したんだよ」

「!!……俺が……殺した……」

「でもお前は運が良い。その罪を償うのに『天使三人』に償わせて貰えるんだからな!」

「……………」

ミカエルが剣を振り上げる

「さらばだ、罪人よ」

……この時、俺は絶望した
世界の全てに

自分自身に……

悪戯夢―終焉と始まり―（後書き）

そして始まりの会話へと続く……

対話（前書き）

この話まで書けたので、もう何時でも先に進められます

対話

『…………おい』

ん？誰か俺を呼んでる

『俺だよ、俺』

「マムート、か」

『やれやれ。起きるのにどれだけ時間かかってるんだ？』

「起きるっても、寝てるんだがな」

『そりゃそうだ』

「で、俺を喚んだからには何かあるんだろ？」

『……強い魔力を感じる。誰の魔力か分からないが、相当な力だ』

「……大天使の誰かだ？」

『分からない。でも、それが誰であっても一つだけ忠告しておく』

「何だよ。何時に無く真面目だな」

『…………自分に、呑まれるなよ』

「…………ああ」

………自分に、か

『まあそれだけ気になったから伝えておく』

「とりあえず魔力が何なのか調べてみるよ」

『そうしろそうしろ。お前に死なれると、せっかく黄泉帰らせたのに全てがパアだからな』

………

『ん？何か言う事でもあったか』

「何もねえよ。じゃあな」

パアッ

『………本当に、呑まれるなよゼレカ』

………

「『カウント終了ー♪』………ってか？」

『ハハッ、氣ヅいてたのか。よく惑わサレなかつタジャねえか』

「……俺はもう決めたからな。『俺』として生きるって」

『生意気なこと吐かスな。ダケドナ、決めたカラ何だってンダ？何があってモ動じないつもりか？』

「そう言ったら」

『フフツ。なあゼレカ。オマエ……………イヤ、止めとこう。後デオモイ知らせてやる』

「お前こそ、精々俺を揺らす方法でも考えてな」

『スグニ後悔するぜ』

「言ってる」

対話（後書き）

エ「デインさん、何かないんですか？」

デ「んー、ゼレカは使えないし（夢にいるから）戦闘もなあ……」

ソ「でしたら、エレスと私の職務を紹介すればいいんじゃないですか？」

エ「ソル！良い考えだね。それに決めましょう」

デ「確かに、何時もはゼレカが入ってくるから新しいな。よし、それにしよう」

ソ「というわけですので、ストーリーはまだ先に進めませんよ」

番外編『七夕』(前書き)

即興です

番外編『七夕』

これはむかーしむかーしの話

ある所にエレスナーグというお姫様がいた

「あつちに逃げたぞ！」

「追え、追え！！」

「もう、しつこいな」

エレスナーグはお付きのソルーティアの目を盗んで街に出掛ける度に、身代金目当ての悪党に追われます

「あっ……！！」

「ははは！ やっと追い詰めたぞ」

「おとなしく捕まってもらおう。なに、抵抗しなけりや乱暴はしな
いぞ」

「だったら……」

悪党が姫を追い詰めた、その時

「ギャアアアア!!」

『!?!』

「何!?!」

魔物の大群が顕れました

「ひ、ひい!」

「あああ!」

悪党達は逃げ出しました

「くっ……逃げなきゃ」

しかし、魔物達は悪党以外は追いかけません

「何で……？」

「それは俺が命令したからさ」

そこに現れたのは魔物飼のゼレカでした

「大丈夫だった？ エレスナーグ」

「は、はい」

「外はひとりじゃ危ないよ。ちゃんと護衛を付けなきゃ」

「外にでるときぐらいは、『姫』だと忘れたいから……」

「……そうか。でも、護衛じゃなくてもだれかと一緒にいた方がいい」

「……」

「…………分かった。そんなに護衛をつけるのが嫌なら、俺が付き合
ってあげるよ」

「え？」

「君がよければ、だけど」

「いいんですか？」

「ああ」

「ありがとうございます！知ってると思いますが、私はエレスナ
ーグです」

「俺はゼレカ。それと敬語は使わなくていいよ」

「じゃあ、私のこともエレスって呼んで」

「はいはい」

こうしてふたりは毎日出会って、毎日楽しく過ごします

しかし、それを知ったソルーティアは別の国の王様に頼んでゼレカを『空の平原』に飛ばしてしまいました

「ゼレカさん、エレスとふたりきりなんて羨まし過ぎます。という訳でベルゼブさん、ゼレカを『空の平原』に飛ばして下さい」

「……いきなりとんでもない頼みごとだな」

「ベル兄ちゃんには恋する乙女の気持ち分からないからね」

「……?」

「／／アスタノトさん、余計な事は言わなくていいんです」

「……」

「アラちゃん、転移法陣の準備しといて」

「オツケー♪」

「……よくわからん」

「あっ、そうだ。メフィストお姉ちゃんが『約束が楽しみ』って言うってたよ」

「……ちゃんといくさ」

ゼレカは他の国の王様の力(?)で『空の平原』に飛ばされてしまいました

しかしそれからのお姫様は毎日部屋に閉じこもり、食事もうくにとらなくなりました

その姿をみかねてソルは言いました

「エレス、星の力が溜まる日にだけはゼレカと会っていいですよ」

その言葉を聞いてから、エレスは次に星の力が溜まる日を待っていました

そして星の力が満ちる日、七月七日にエレスはゼレカに会いに行きました

「ゼレカ！」

「やあ、エレス。ちょっと待ってね」

ゼレカは星の力を使い、魔力で橋を掛けました

「星で出来た川、『天の川』ってとこかな」

「ゼレカ！」

「久しぶりエレス。と言ってもまだ二日も経ってないけどね」

「でも、たえられなかった。ゼレカと会えないから、毎日苦しかった」

「ふふふ、ありがとう」

と言って、ゼレカはエレスの肩に手をまわした

「俺の魔力でずっと橋を掛けてるから。何でも出来るね♪」

「え!?!」

そのまま押し倒した

「ちょ、ぜ、ゼレカ!?!」

「大丈夫大丈夫、怖くないから♪」

そして、そのまま……

「……あれ?」

「おはよう、エレス」

「ん……おはよう」

「随分と楽しそうだったけど、何かおもしろい夢でもみてたの？」

「……夢……だったんだ。……あんまりきのうと変わらなかったけど」

「？」

番外編『七夕』（後書き）

デ「随分とお久しぶりです」

ゼ「サボりやがって」

デ「サボってた訳じゃないぜ。試験勉強で忙しくて時間もとれなかったから、全く更新できなかっただけさ」

ゼ「そうかいそうかい」

デ「今週で試験終わるんで、来週からまた更新しますね」

予兆（前書き）

今回から誰視点か記載します

予兆

エレスナーグ vision

「突然だけどゼレカ、ちょっと行ってほしいところがあるんだけどいい?」

「もちろん。それで何処に行けばいいの?」

「ん……『紅月の荒野』にいったきり調査隊から通信がないから…」

「あー、確かに何も連絡きてなかったな」

「同行者は好きに連れて行っていいよ」

「珍しいね。一緒に行くって言わないなんて」

「今日は城の用事でいっしょに行けないんだ」

「そうか……。じゃあできるだけ早く帰るから、それまで待っててね♪」

「うん、きをつけて♪」

「……もし。もし何かあったら、俺を呼んでね」

「?」

そう言ったゼレカの顔には不安があった

「寂しくなったり、なんとなく呼んでみたいと思っただけでもいいから」

「ふふっ、じゃあそうさせてもらうわ」

「じゃあ行って来るから」

「気をつけてね」

「もちろん」

……その時のゼレカの不安を私が知るのは、もう少し後だった

予兆（後書き）

デ「いやあ、楽しみだなぜレカ」

ゼ「何がだよ」

デ「この後の展開が」

ゼ「全く、思わせぶりな事をチラチラと。伏線を散りばめやがって」

デ「回収するのが楽しみだよ」

ゼ「回収できなかったらどうするんだよ」

デ「構成は既に考えてるから万事OKだ」

ゼ「試験中にな」

デ「それを言うな」

出発（前書き）

続き物に突入ゝ

出発

ゼレカ Vision

「アルフォート」

「呼んだか？主よ」

「お前もシェイドがやったみたいに、ひと形になれるか？」

「もちろんだ。というよりも、普段からひと形に近いが」

「それはそうだけど、シェイドはぱっと見では魔獣って分からなかったからな。あいつの弟なら似たような事が出来るかなーって思ってたさ

「その程度なら普段からしてやれる」

そう言ってアルフォートの体が光った

「……………これでよいか？」

「あー……。……本当に普段とあんま変わんないな」
確かに、普段も魔獣だって全然分かんないけどさ

予想と違ったな

「まあいいか」

「ところで主。何故我にひと形になれと？」

「もうひとり連れて行きたい奴がいるから」

「もうひとり？」

「ヒント、俺の直属の部下」

「……………ああ。あやつか」

——フラワーハウス

「あっぜレカさん、おはようございます」

「おはようさん。で、バルチス。今日は魔物の管理しなくていいぞ」

「本当ですか!？」

「だから今すぐ遠征の準備をしろ」

「……………え？」

「『紅月の荒野』に行くから、大体二・三日の用意な」

「……………ええー!!」

出発（後書き）

デ「相互紹介やっています」

ゼレカ⇄エレス

ゼ「特別な恩人であり俺の主で大切なひと」

エ「大好きなひと♪」

ちょっと休憩？（前書き）

暑い…

ちょっと休憩？

バルチス Vision

どうも、バルチスです

突然ゼレカさんに「遠征の準備をしろ」と言われ、無理矢理連行されました

「どうしたバルチス？独り言が多いぞ」

「……何でもないですよ」

「そうか？」

「主、右方向に数匹の生存反応だ」

「え？」

「オーケー、じゃちょっとバルチスと一緒にいてくれ」

「承知」

「そういう訳だからアルフォートと待ってろ」

「あつゼレカさん」

……行っちゃった

「主なら大丈夫だ」

「え、あっあの……」

「申し遅れた、我はアルフォート。主のけいや……部下だ」

「あっどうも。フラワーハウスの管理者のバルチスです」

な、何か気迫がすごいひとだなあ……

「どうした？ 気軽に接してくれればよいぞ」

「そう？」

「……本当に気軽だな」

「あ、ごっゴメン……」

「いや、それぐらいで構わないぞ。むしろ主と同じ様に我に接してくれた方がよい」

よ、よかった

怒られるかと思ったよ

怖いひとじゃないみたい

なら、もっと僕を知ってもらおう

そうだ

「じゃあ、僕にも普通に喋っていいよ」

これでどうだ

「折角の提案だが、我はこの話し方が普通なのだ。主が話す様な話し方は逆に難しい」

「そ、そうなんだ……」

まずかったかな……

「ふっ。でも、良い提案だと思うぞ」

「そうだった？」

「ああ」

何か、話してみると優しいひとだなあ

「主」

「よう」

「どのような戦果だった？」

「魔物っつーか機械人形マリオネットが何体かだった」

「機械人形？ 神殿防衛人形じゃなかったか」

「神殿防衛人形で……ゴーレムって言えよ」

「ふむ、今はそういうのか……」

お話しについていけません……

「どうだったバルチス？」

「どうとは？」

「アルフォートと話してたんだろ。こいつは初対面の奴には警戒を怠らないから、喋るのも一苦労だったろ」

「いえ、そんな事はないですよ」

「……………」

「ほーう。珍しいなお前が気迫を出さなかったなんて」

「……………別段出す必要が無かったただけだ」

「ふーん」

「そっそれより、マリオネットなんて倒したんですか!？」

「あんなの一撃だぞ」

「……………」

前々から思ってたけど、ゼレカさんって化け物クラスですよね

……

「そんな誉めるな」

「く、口に出てました？」

「読心術だ」

「勝手に読まないでくださいよ！」

「はいはい、さっさと行くぞ」

「御意」

「ちょ、速いですって!!」

ちよつと休憩？（後書き）

エレスナーグ⇄ソルーティア

エ「頼れるお姉ちゃん♪」

ソ「可愛い妹♪」

寛ぎましょう(前書き)

バルチス君の秘密公開

寛ぎましょう

ゼレカ Vision

「……」

あと丸一日いや、半日もあれば紅月の荒野にたどり着くなさつさと終わらせて城に戻りたいんだよな……

『強い魔力を感じる。誰のかは分からないが、相当な力だ』

「……」

……マムートに言われた事が変に気になる

「……………さん」

やっぱり、早く戻らないとな

「ゼレカさん！聞いてます？」

「何も聞いて無かった」

「聞いてくださいよ！」

「はいはい。で、何？」

「少し、休憩しましょうよって言ったんです」

「構わないけど……」

「はぁー、疲れました」

「此処は一部で『マリオネットの処刑場』って言われるほどマリオネットが出て来るから危ないぜ？」

「それを先に言ってくださいよ！」

あれ？言って無かったっけ？

「聞かれなかったから答えなかった」

「それなら先を急ぎますよ」

「おう」

「……」

「どした？」

「いや、あの者は随分と魔物に気に入られてるなと思ったのでな」

「バルチスだろ？あいつ、魔力も大して無いし身体能力も高く無いけど、魔物に好かれる能力だけはあるんだよ」

「本来ならこの辺りなら機械人形がわんさか出て来る筈だからな。ここまで遭遇しないのは初めてだ」

「あいつ自身自分の潜在能力に気付いてるか知らないけど、その力を使いこなせるようになったら『準魔王』クラスの力を出せるぜ」

「おもしろい者を部下にしたものだな」

「だろ？」

「ゼレカさん、アルフォート。早く行きましょうよ！」

「おっといけないいけない。じゃバルチス、先行ってるわ」

「速過ぎですよ！！さっきまで結構後ろにいましたよね！？」

「はっはっはー」

「はあー」

バルチスをおいて先に宿屋に来た

まあアルフォートと一緒にだから、山賊に襲われても平気だろう

あいつ強いし

ガチャ

「はあ、はあ、疲れました」

「遅かったなバルチス」

「それは、そうですよ。速過ぎ、です……」

「テレポートを使わなかっただけましだろ」

「そういえば、何でテレポート、使わないんですか？」

「何の為に紅月の荒野に行くか知ってるか？」

「調査隊の確認ですよね？」

「何で確認しに行ってる？」

「え……通信がないから……あっ！」

「通信がない、すなわち妨害されてるからだ。妨害されてると跳べないんだよ」

「そんな欠点があったんですね」

「万能な魔法なんてないからな。ところで、アルフォートは？」

「宿屋までは一緒だったんですよ」

「呼んだか、主？」

おい……何だその格好……

「何でローブなんだ？」

「シャワーを浴びてきたのだ」
「ですね」

「バルチスも入るといい。汗をかいただろう」

「そうするよ。じゃあ入ってきますね」

テクテク

バルチスが部屋から出ていった

「…………アルフォート、お前結構寛いでるな」

「我はいつもこうだが？」

「そうですか…………」

寛ぎましょう（後書き）

ソルーティア⇔アルフォート

ソ「頼れる方です」

ア「信頼に足る方だ」

齋された真実（前書き）

シリ阿斯全開！

糖度が足りない……

齎された真実

ゼレカ Vision

「ふう、やっと着いたか」

と言っても、予定よりかなり早く着いたけど

「バルチス、調査隊の手掛かりになるものを探すぞ」

「分かりました……けど、少し休ませてください」

「まあ、あの山越えは厳しかっただろうからな。どこかに腰を下ろして、周囲を確認してくればいいさ」

「ありがとうございます……」

さすがに疲れがみえるな

しかしまあ、バルチスがいてくれたおかげで余計な魔物と戦わなくてすんだぜ

「主、我は上から見てる」

「ああ、任せる」

「御意」

「さてと、俺も探すか」

……『紅月の荒野』

……『相当な力のようだ』
なんでその二つが引っ掛かるんだ……

「ゼレカさん」

「ん？」

「変なナイフが落ちてたんですけど」

ナイフ？

「何でナイフなん……か……」

……このナイフ、まさか

「『聖堂の短剣』！」

そうか、だからあの時アシュラに『暗黒の楽園』が効かなかったのか……

「何ですか？」

「天使の武器の一つさ。これは悪魔の力を乱す、いわば『悪魔殺し
デモンキラー
の武器』だ」

「デ、デモンキラーって神の法具ですよね？」

「ああ」

……ちっ、連合会議の時に刺されてたか

「じゃああいつが……」

「どうしたんですか？」

「ん、ああ。いや、ただ今回の黒幕が分かったただけさ」

「黒幕って、人為的な事だったんですね……」

「多分そうだろうな」

こりゃあ思ったよりもやばいな……

「主、やばいぞ。調査隊が神殿防衛人形に追われてたぞ」

「ゴーレム……ああ、そういえばあいつらは身体から電磁波がでてたなあ。じゃあさっさと倒して帰ろうぜ」

「一応は殲滅しておいたぞ」

「おっと」

……アルフォートの一言に転倒しそうになった

「そういうことは先に言えよ。ずっこけるところだったぞ」

「それは見てみたかったな」

「あははは……」

バルチス、お前の笑いがやけにグサツとくるんだが

「まあいいさ。バルチス、アルフォートと調査隊のところに行つてろ」

「はい」

「御意」

……ふたりとも行つたか

「はあー、全く……」 剣を創造する

ガキンッ

「嫌な予感的中したぜ、アシユラ！」

「そうかい？」

振り向きざまに斬り掛かったが、アシユラの剣に止められた

「ああ、あの時お前が紅月の荒野（この場所）にいたわけもなあ！」

そのまま斬り上げる

アシユラは吹き飛ばされながら体勢を戻し、空中で止まる

「ふっ、本当にか？」

「ああ？」

「本当に全て理解したのかと聞いてるんだよ」

「……どういう事だ？」

「君が全て理解しているなら、君は僕に斬り掛からなかった。なぜだか分かるかい？」

「知らねえよ！」

……焦るな、気持ちを落ち着けろ

怒りのままに行動したら『あいつ』の思うつぼだ

「くっくく……、そろそろ教えてあげるよ。そのわけを」

「……………」

「おそらく、僕が此処に居た理由は合ってると思うよ」

「お前が、会議にいた何処かの魔王と手を組んで俺をおびき寄せる為だろ？」

「正解さ♪」

「……その魔王は俺達の中の誰かを狙ってた。違うか？」

「ほーう、そこまで予測しているとは思わなかったよ」

「それと……」

『聖堂の短剣』をみせる

「俺の魔術が効かなかったのはこれのせいだ」

「あー、そこにあったんだそれ。あいつ、回収しておけって言ったのに」

「これでもまだ理解してないって言うのか？」

「ああ、もちろん。肝心の事が理解出来てないみたいだ」

何時から掛けてたか知らないが、眼鏡の位置を直す

「肝心の事？」

「もし、君がそれを知ってたら僕に斬り掛かってこなかったってやつさ」

「……………」

「今、こうして僕と話してる事があいつの狙いなのか」

「ヴァジラの？」

アシュラの眼光が鋭くなった

そして……

「ふふ、あいつが君の主を殺すまでの時間稼ぎ。それが僕の役目さ」

「なん……だと!!」

「それじゃあサヨナラ。ゼレカ」

ふわっ

「……くっ!」

だから……

「アルフォート!」

「何だ?」

「バルチスと調査隊連れて戻ってこい。ゆっくりで構わない!俺は先に行く!!」

「承知」

テレポートで城に跳ぶ

「……エレス、無事で居てくれ!!」

齋された真実（後書き）

アルフォート⇔バルチス

ア「おもしろい男だ」

バ「怖そうだけど優しい」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』(前書き)

ユニーク10000突破記念です

番外編『狼と七人(?)の子山羊』

デ「昔むかーし、あるところに一人の親山羊（悪魔）と七人の子山羊（悪魔）がいました。山羊なのに一人？って疑問はスルーでお願いします」

――

――

――

ソ「じゃあみんな、私はお買い物に行ってくるからお留守番をよろしくお願いします」

エ「はい」

アス「きをつけてね♪」

ソ「はい」

メ「私も行こうか？」

ソ「私一人で大丈夫ですよ。でもありがとう、メフィスト。それと、最近はこの辺りに狂暴な狼がでるから気をつけてください」

アル「凶暴ではなく、狂暴なのか？」

アラ「なんかおもしろいわね」

ソ「私以外の人に扉を開けてはいけませんよ。それでは」

ガチャ

アス「狼か。恐いね♪」

メ「恐がってないよね」アル「鍵を掛けなくてはな」

アラ「どんな狼だろうね」

ベ「……興味は無い」

ゼ「……………」

エ「どうしたの？」

ゼ「誰が狼役だろうって考えてた」

エ「たしかにそうだね。後出てないのは……」

コンコン

扉を叩く音がします

アス「はい」

メ「アスタノト、あけちゃ駄目って言われたでしょ!？」

アス「おもしろそうだから開けてみようと思ったの」

アラ「それはそうね」

アル「と言いつつ開けようとするのはどうかと思うが」

するとエレスナーグが聞きました

エ「誰ですか？」

アシ「世界一美しい狼です」

ゼ「…………お前か！」

アシ「さあ、子山羊達。僕の胃袋を満たす為にこの扉を開けてくれ
給え」

ベ「…………偽るどころか正体丸だしできたな」

ゼ「基本バカだからさ」

アシ「聞き捨てならないね。なら、待ってなよ」

タッタッタ

アス「帰っちゃったね」

ゼ「まだいると思う」

アラ「私達を狙ってるみたいね」

メ「ど、どうしよう？」

ベ「……………恐いのか？」

メ「恐くない、って言ったら嘘になる」

ベ「……」

ギュッ

ベ「……だったら、俺の傍に居ろ。……俺が守ってやる」

メ「ベルゼブ……」

アス・アラ「……………」

バンッ

アシ「お楽しみ中失礼する」

ベ・メ「!……／／／」

アル「なに!？」アス「わぁー、狼が入ってきた」

アシ「鍵が開いてたから失礼させてもらったよ」

ベ「……どうする?」

アル「ある……」

ゼ「エレスが恐がってるみたいだからさっさと追い出す」

とゼレカが剣と銃を手にしていました

アラ「よいしょ、っと」

アシ「ん？なに……を！！」

アラクネが扉を開けたらゼレカが狼と一緒に外に行ってしまいました

エ「あっ……」

バゴン！

ガギン！

パンパーン！

アル「派手にやってるな」

アス「何してるんだろ」

アラ「見なくても分かるけど」

ビチビチビチ、バスーン！

ベ「……」

メ「ベルゼブ、どこ行くの？」

ベ「……手伝ってくる」

ガチャ

ガタン

パンパンパン！

ドキヤーン！

外の音は更に激しさを増しています

エ「ゼレカ……」

ガチャ

ゼ「はぁ……はぁ……助かったぜ、ベルゼブ」

ベ「ふう……ふう……と言ってももう終わりかけだった」

エ「狼は？」

ゼ「ボロボロにしてやった」

家の外――

アシ「きよ、今日のところは負けを認めますよ」

と言って帰っていった

家の中――

エ「ゼレカ、怪我してない？」

ゼ「大丈夫だよ。心配かけてゴメンね」

エ「よかった……」

こうして、七人の子山羊達は狼を倒しましたとき

そして帰ってきた親山羊と幸せに暮らしましたとき

|

—

—

デ「ふう、疲れた」

番外編『狼と七人(?)の子山羊』(後書き)

デ「ゼレカ視点からエレス視点へ、という時に解析してみたらユニークが10000突破しました!」

ゼ「またうまい具合に区切りがよかったな」

デ「ホントですよ。本編はドシリアスなのに、そんなのお構いなしでふざけてたからギャップあります」

ゼ「直前まで真面目だった奴をふざけて出したしな」

デ「ホントはあの役ヴァジラにやらせようかと思ったんだけど、流石にそれはなーって事でアシユラにしたんだ」

ゼ「……それはまずいよな」

デ「それでは」

ゼ・デ『ありがとうございます!!』

緊張？無いですよ（前書き）

シリアスモード突入！………しませんよ

緊張？無いですよ

エレスナーグ vision
ゼレカがフラワーハウスにいる時

「はぁ、行っちゃった」

「もう出発したの？」

「あつ、ソル。いつのまに」

「いまきたところよ」

「ぜんぜん気がつかなかった」

それでも私、気配を感じるちからはけっこうあるのにな……

「ゼレカは部下をひとり連れて行くって」

「部下……ああ、彼のこと」

「知ってるの？」

「知らないよ♪」

「あはは……」

「それよりも、貴女宛の手紙がきてたわよ」

「手紙？だれからだろう」

ソルにわたされた手紙を開けてみる

「えーっと……………」

シャクガからだ

「……………！？」

ガクンっ

私はそのまま床にすわりこんだ

「どうしたの、エレス！」

「……………シャクガ…からの手紙……………だった」

「シャクガ……………妖精族の友達なの？」

「うん……………」

手紙の内容が……………私にしょうげきをあたえた

「なんて書かれてたの？」

……………言おうかどうかまよってた

でも、これがほんとうなら言わないわけにはいかない……………

「ソル。私……」

「大丈夫よエレス。落ち着いて」

「私……」

決心してソルに言う

「私、シャクガに胸のおおきさで負けた!!」

「!! エレス……」

妖精族のシャクガに負けるなんて……

「胸の大きさをなんて些細な事よ。特に、ゼレカは全く気にしてないでしょ？」

「そうかな……」

———その頃

「はっくしょん！」

「風邪か、主よ？」

「体調管理にはきをつけてるんだけどな」

「でも、ゼレカが胸にきょうみが無いのは知ってるけど……」

「あつ、そういえば胸を大きくする方法ってあるわよ」

「えっ！そんな方法があるの！？」

「ええ♪昔から言われてる方法だけど結構効果があると思うわ」

「どうするの？」

「胸を揉むのよ♪」

「……なんだろう」

ソルの笑顔がこわい……

「それじゃあ早速試してみましょ♪」

「じ、自分でするからいいや」

「……とりあえずにげた方がいい気がする」

「自分でじゃ効果が少ないと思うわ」

「だいじょうぶ……。それより今日の仕事は……」

「今日の仕事はありません」

「いつもあんなにあるのに!？」

「ありませんよ」

にげようとしてたのに、いつの間にか背中にもで手をまわされてる

「久しぶりですね。こうするの」

「ソ、ソル。待っ…」

「大丈夫ですよ♪」

「だいじょうぶじゃないよ」

緊張？無いですよ（後書き）

バルチス⇔アラクネ

バ「どうか見つかりませんように……」

ア「見覚えが？」

安らぎ（前書き）

更新ペースがばらばらです

安らぎ

エレスナーグ Vision

「あははは！それは大変だったね」

「笑い事じゃないよアスタノト」

私とアスタノトはバルコニーでお茶をしている

「確かに昔からエレスって身体は成長してないよね」

「そ、そんな事ないよ！それは背も大して伸びてないし胸だってそうだけだよ」

「でも心は成長した。それは絶対だよ」

「そう、かな？」

自分じゃあんまり分からないけど

「そうだよ。だって昔は他人を信じるなんて滅多にしなかったもん。今じゃ考えられないよ」

「確かに……」

「それって、やっぱりゼレカさんの影響でしょ？」

「そうだと思う。ゼレカと一緒にいて安心はあったね」

「安心……そうだ、エレスに聞こうって思った事があるんだけど」
「ん？」

紅茶をすする

「ゼレカさんとどこまで進んだの？」

「！！ケホッ、ケホッ、いきなり何聞くの／／／！」

「だってかれこれ三ヶ月ぐらいたったでしょ？それに世話係って役なんだからそういう事も…」

「そ、そんな事……してないよ／／／」

アスタノトは満足したように笑う

「へえ、まさかそんなとこまでしたんだ」

顔が真っ赤になってるのが分かる

「な、何もしてないって／／／そ、それよりあなたはどうかなの？」

「私？私は毎日無理矢理兄ちゃんを拉致して…」

「やっぱりいい！言わなくていい！！」

あのまま話してたらとんでもないことをいいそうだから止めておく

コンコン

「失礼します。アスタノト様、謁見の時間です」

「もうそんな時間？早いな」

「じゃあ私は帰るね。仕事みたいだから」

「あっ送って行こうか？」

「ううん大丈夫。またね」

「うん、またね」

時間を見ると、結構たっていた

早く帰らないと

安らぎ（後書き）

アラクネ⇄メフィスト

ア「頼れる親友」

メ「しっかり者の親友」

魔神の姿・始まり（前書き）

シリ阿斯あんどダーク

魔神の姿・始まり

ソルーティア Vision

「……」

……結界ですね

この城と城下街の分離結界ですか

分離結界の用途は周りに見付からず特定の人物のみを閉じ込める

おそらく、狙いはエレスですね

しかし、今エレスはリリードネメスに行っているので好都合です

「……そろそろ出て来てはいかがですか？」

「ほう、俺に気付くとはな」

バルコニーの上から光と共に声が聞こえてきた

その背中からは白い翼が羽えている

「天使!？」

「ふん、そんなことはどうでもいい。赤血の魔王は何処だ？」

やはり狙いはエレスでしたか……

「何処だと聞いてるんだ！あいつがゼレカを引き付けてる間に始末しちまいたいんだよ！！」

ゼレカさんを引き付ける？

「……此処にはいませんよ」

なら、少しでも時間を稼いがなくては

「エレスは今別の魔界に居ます。しばらく帰ってきませんよ？」

「……ちっ、なら仕方ねえ」

殺気が消えた

「とりあえずはお前に消えてもらうか」

……わけではないようですね

エレスナーグ vision

……ちよつと遅くなっちゃったかな？

リリードネメスからニブルケティックまで戻るのはすぐだったけど、城下街まで戻るのが時間かかった

「……あれ？」

誰もいない……

いつもこの時間ならひとがたくさんいるのに……

「……」『……もし、何かあったら俺を呼んでね』

ゼレカの言葉を思い出す

「……早く帰ろう」

急いで城にもどる

ソルーティア vision

「はぁ……はぁ……」

「はっはは！中々楽しかったぞ女！」

強い……

魔王……いや、大魔王並の力ですね

「くっ……」

出血が止まらない

私の足元は黒い水溜まりのようになってる

「あと一息で潰れるな」

「そうですね……」

「魔王を始末しに來たのに、まさかここまで楽しめる奴がいるとは思ひもなかったぜ！」

「そうですか……それは光榮ですね……」

……痛みで氣絶しそうですよ

でも、今は少しでも時間を……

「そういえば……貴方の……名前を……聞いて……ませんでしたね……。
教えて……頂けません？」

「はっ！ 良いだろう！ 俺は天使ヴァジラ！」

そういつて羽を散らせる

……エレス

無事で居て

魔神の姿・始まり（後書き）

メフィスト⇄ベルゼブ

メ「愛してるよ」

ベ「……お前は俺がずっと守ってやる」

魔神の姿・帰還（前書き）

……
眠い

魔神の姿・帰還

エレスナーグ Vision

「……………着いた!」

謁見の間が見えてきた

もう少し!

ガチャ

扉を開けた

……そこには血まみれのソルと白い羽を散らせている天使がいた

「…………ソル?」

「エレス!?!」

「ふん、やっと来たか」

「エレス、逃げて!」

「…………あなたがソルを傷つけたの?」

「だったら何だ？」

「……許さない。許さない！！よくも私の家族を！」

「…………エレス」

「『魔王化』！！」

魔力を解き放つ

私の体が黒い煙りのようなものに包まれる

パシュー！

「ふん、『魔王化』か…………おもしろいじゃねえかよ！」

「くっ…………」

またあの天使の魔力が強くなった

でも、今の私には魔力の強さなんて無視できる

「全てを包み込む闇の力、在るべきところに在るものを正し、理を示せ。『リフレクトシールド』」

この魔法を使えば少しは時間がとれる

「なんだよ、詠唱したから攻撃してくると思ったのによ。つまらねえな！碎け『ブラストファング』！」

「……短縮詠唱」

でも、今の私には効かない

バシユ

「なに!？」

「これが私の魔法『リフレクトシールド』の能力。相手の一切の魔法を受け付けない」

もちろん、弱点もあるけどね

「一切の魔法を受け付けない、か……ふ、はは、ふははは!! いぜ、気に入った! なら、魔術だけでぶちやぶってやるぜ!!」

「結果は見えてるけどね」

『リフレクトシールド』が破れるって、結果が

でも、もう少しで完成するから……

??? vision

「……ちっ、結界か」

直接城まで跳んだのによ

「……………無事で居てくれよエレス、ソル」

城目指して全力で走る

エレスナーグ Vision

「はぁ……………はぁ……………」

「ふん、未だ破れないか。だけど、お前の魔力が持ちそうにないな。せつかく楽しかったのによ」

「やっぱり…破れなかったみたい…だね」

でも、もう終わり

「そうじゃねえ、破る方法が解っただけだよ」

「どうやって？」 「教えてやるよ。走れ、奪え！ 『ライトニングフレア』！！！」

「……………やっぱりばれたか」

「確かにその魔法は強力だけどな、弾けるのは属性が単体の場合のみだ。属性が複数なら弾けないだろ？」

「……………その通り。でもね」

『リフレクトシールド』が炎と雷を飲み込んで消滅する

その魔力が私に流れる

「なっ!!」

「弱点はわかってるから、改良したの。消える時にその魔法を魔力に変換して私に流れるように」

「だが、それでどうする？さっきの魔法はもう効かない」

「だからあなたを終わりにする」

ゼレカ、力を貸して……

「汚れし魂、その術を奪う力を行使したまえ。『冥界の揺り籠』！」

天使の周りから紫色の煙りが立ち上る

「こんな魔法を喰らうかよ！」

天使が上に飛んだ

「それを待ってたの。弾け飛べ『アルテ・エデン』！」

「その魔法は!!」

黒い球体が天使を包む

「ぐああああ!!」

パァン

……ありがと、ゼレカ

「ふう、倒した」

ペタン

「あれ？体に力が入らないや」

「エレス、大丈夫？」

「私は大丈夫だけど、ソルの方こそ危ないよ」

「少しずつ回復させてるから平気。それよりいつの間にあんな魔法覚えたの？」

「覚えてたってゆうよりも『勘』かな。詠唱もあってたし」

「勘？」

「前にゼレカが使ってるのを見て、とっさにやってみたの」

「だろうな……」

『！？』

煙りの中から声が聞こえてきた

「まだ……倒れなかったの！？」

「あれが…完全詠唱で…魔力を…もつと込めてれば、跡形もな
く…消えてたぜ」

「そんな…」

「くっ」

体も動かない……

魔力も尽きた……

「今度こそ………終わりだ!! 『エクスキューショナー!』」

どうしよう……

「エレス、逃げて!」

「動けない」

どうしよう……

「はぁ……はぁ………始末完了」

どうしよう……

『もし、何かあったら俺を呼んでね』

ゼレカ……

「ゼレカー！」

パスッ

「!？」

「お呼びですか？姫様」

そこには、黒いコートを着た、見慣れた、ひとがいた

「ゼレカ？ゼレカ！」

魔神の姿・帰還（後書き）

デ「やあー、お決まりパティーンでしたね」

ゼ「そうだろうよ」

デ「というかお久しぶりでーす」

ゼ「そっか、リレーやってもんな」

デ「思い付きでやってみたりレーだったけど、結構長いね」

ゼ「お前が楽だからだろ」

デ「痛いお言葉です」

魔神の姿・カクセイ（前書き）

ダーク指数が！

魔神の姿・カクセイ

ゼレカ Vision

「間一髪だったね」

紫色の光を斬り裂いた

「ゼレカ……来てくれるって、信じてたよ！」

「もちろん。約束だからね」

「ゼ、ゼレカさん……」

ソルが無理に身体を起こそうとしてよろめく

「おっと、大丈夫？」

大丈夫なわけではないけど

……みたところ外傷と出血が原因か

「癒しの力よ。『ファーストヒール応急処置』」

「す、すみません」

「あんまり喋らない方がいいよ。結構重傷みたいだからね」

「そう、ですね……」

「うん……。エレス、ソルの傍にいて」

「わかった」

少し強めに魔力を込めた結界を張る

「さて、と」

後ろを向く

「久しぶりだな、ヴァジラ」

「ちっ、面倒な奴が来たぜ。足止めも満足にできやしねえのか、あいつはよ」

「アシユラなら俺に全てばらして、すぐ帰ったぜ。おかげですぐ駆け付けられたしな」

「たっく、何のつもりだよ」

「それはそうと」

剣を構える

「去る気は無いのか？」

「ねえな。赤血の魔王を殺しに来たつもりだが、お前を殺しても変わらねえしよ！」

カキイン！

互いに剣をぶつける

俺の剣はさっきアシユラに会った時に造った『夢現』

この剣には風の魔力を込めてあるから、振る度に空気を支配できる

「何だ、それ？ 気流でも生み出してんのか？」

「気流じゃない、『風』さ」

ヴァジラを取り巻くようにして風が生まれる

「祖は永久の罪人。その犯し罪を洗う術は、四方八天浄火のみ。燃え尽きろ『バーニングストリーム』！」

中級の炎だが、回りを取り囲む風と交わって爆発的な炎になる

「……っ、こんなもん喰らうかよ！！」

ヴァジラが水でつくった巨大な剣を振るう

水と炎がぶつかり、蒸気が生まれる

かかった！

これで奴の視界はゼロ

蒸気目掛けて走る

「ちっ、どこだ……！」

「遅い、『ランサー・ソロ』」

グサッ

槍を象った魔力を心臓に突き刺す

「……終わりだ」

「………てめえがな……！」

「!？」

首を掴まれた

「な……ん……だ……と……？」

確かにランサー・ソロで心臓を貫いたのに

「何も蒸気で視界が奪われたのは俺だけじゃねえんだぜ」

「くっ………まさか……外した……のか」

「左手を代償にな。だが、お前を仕留めるのに左手一本で済めば安いものだよ……！」

くっ、どうする!?

「消し飛ばー!!」
『炎衝撃』^{ハウリング}!!!」

「かはっ……」

……何が起きた?

……首を掴まれて投げられたただけだぞ?

ドンっ

俺の体は鈍い音をたてて床に叩きつけられた……気がする

「どうだ、俺の最強の技は?」

「……はっ……たい……したこと、ねえ……よ」

「ちっ、やっぱり片腕であれっぽっちの魔力じゃその程度か。……
それでも充分過ぎるみてえだがな」

……んだ、あれ?

……あんなもんまともに喰らったら木っ端みじんじゃねえか

「はあ……はあ……」

グサッ

「!?!?」

あいつの剣が俺の左手を深々と貫いた

「これで動けねえだろ？ 待ってな、先に魔王から片付けるからよ」

ガチャン

「待て！！ ふたりに手を出すな！！」

「安心しろ、お前もすぐに後を追わせてやる。そういえば『あいつら』とも会えるじゃねえか」

「あいつら……？」

ドクン

……………やめろ

「お前を殺す前に殺したやつらさ。良かったな、全員一緒に」

ドクン

……………やめろ

「あばよ、『吸血魔王』」
ドクン

「ヤメろー！ー！！」

――
――

――

――憎い

みんなを殺したあいつらが

――憎い

ふたりを傷つこようとしているあいつが

――憎い

……誰も守れない、俺が

――ねえ、誰かを守りたいと思うのは、弱さの証なのか？

――みんなを傷つけさせたくない、その為の力は無力？

――どんな力も、弱い心のまえでは意味を為さないの？

――ねえ、誰か、答えてよ……

『あア、オマエの言うトオリさ』

『守りたい、ナンテ考エは弱さのアカシ』

——弱さ……

『傷つけない、スナワチ無力ダ』

——無力……

『支えきれない心、ムイミだぜ？』

——無意味……

——君は何でも知ってるね

——じゃあ、力を手に入れる為には、どうすればいい？

『簡単サ。復讐、憎しみ、嫉妬、怒り、悲しみ、喪失、狂気。そして絶望ダ』

『オレにはそのスベテが宿っている。全てを破壊シ、無に帰す力がホシイダロ？』

——欲しい

——どんな力でもいいよ

——俺の望みが叶うなら

『なら、オレに手をノバセ。オレの力をカシテやるよ』

――力

――手を、のばす……

――！

『ヒヒッ。サア、絶望を味わわせてヤロウぜ、アイボウ？』

――ふふっ、力だ

――力が溢れてくる！

――そうだな、絶望をくれてやるか、『零花』？

――

――

――

――

「……………ヒヒッ」

魔神の姿・カクセイ（後書き）

——闇は素晴らしい

——どんな者も等しく受け入れる

——優しく包み込む

——安らぎを与える

——それゆえに、全ての者は簡単に堕ちる

——『自分』という闇に……………

魔神の姿・狂気

s a d
k i n g (前書き)

番外編企画中

魔神の姿・狂気 **s a d k i n g**

エレスナーグ V i s i o n

カキン！

「ゼレカ……」

ゼレカは今、天使ときりあっている
なにを話しているのかはわからない

ボワァ！

「！！」

突然、大きな炎が燃え上がった

多分ゼレカの魔法だと思う

シュワッ

今度は白い煙りがでてきた

煙り、じゃなくて蒸気かな？

「あっ……」

あれ『ランサー・ソロ』だ

じゃあゼレカが勝ったってこと？

そんな私の考えをあざむくように手がのびる

ガン！

「え？」

ゼレカが吹き飛ばされた

ガシッ

「あっ！」

結界が消える

何が起きたのか意識がついていけない

だめ……

冷静にならなきゃ……

ゼレカが負けるわけない……

うん……

大丈夫……

落ち着いたみたい

でも、落ち着きを取り戻した私の前には光が射していた

「…………っ」

驚きで言葉がでない

逃げることはできない

間に合うわけがない

「ん……」

咄嗟に目をとじた

「…………ヒヒッ」

……………

……………？

あれ？

何もおこらない

おそろおそろ目をあけてみる

「フフッ」

ゼレ……カ？

！！？

あの姿！！

「ゼレ…」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ」

「あっ……」

こつちを見たゼレカの目……

『紅』かった……

いつもの目じゃない……

血に飢えた吸血悪魔（私達）みたいな、目……

「久しぶりだなア、ヴァジラ」

「ああ？何言ってるんだ」

「オマエと会うのは『あの時』以来だろ。オマエラが俺達を殺した時、な」

「……狂ったのか？」

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それ

ではれて100点だよお？」

「……………」

「マアイイサ、話を戻そう。マエから聞きたいと思ってたことがあるんだテンシサマ」

「聞きてえことだと？」

「俺のムネを貫いた感触、どうだった？どんな気分だった？」「ハッ！そうか、『怒り・憎しみ』だったか！なら答えてやるよ！とっても気持ち良かったぞ？」

「だよな！ヤッパリそうだよな！いやー、よかった。俺と同じ考えみたいで」

「はあ？」

ガシッ

「俺にもやらせろよ。心臓^{ムネ}を貫く感触、考えただけで心躍るぜ」

……………違う

……………こんなの

……………ゼレカじゃない

「っ！」

「サヨナラだ、ヴァジラ！」

「ゼレカ、やめて!!」

パリン

「あ……………」

剣が、折れてる？

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ……………」

「おや？ 噛み付く気力も無いのかい？」

「……………くそっ」

さっきまでゼレカが刺そうとしていた天使の他に、もうひとり天使がいた

「やあゼレカ。『その姿』になったんだね」

魔神の姿・狂気

s a d k i n g (後書き)

デ「やあみなさん。しばらく本編で出番がないので集まってもらいました」

メ「そうなの？」

アラ「まだ出番がないのね」

アス「それより、あの子のゼレカさんとエレスが気になります」

ベ「……俺も気になる」

デ「はっはっは。見事意見が分かれましたね。というよりもリリースド兄妹は自分の出番そっちのけで本編が気になるなんてどうなんだ？」

アス「別に心配なんてしてませんよ？」

ベ「……俺が視点の過去話があるからな」

デ「おおっと、爆弾発言。なら話題を変えて、本編の時間はみなさんは何してました？」

アラ「さっきの話しを詳しく聞きたいけれど、私は自分の魔界で人探しをしてたわよ」

メ「私は魔王の仕事をしてたわ」

ア「お兄ちゃんと遊んでた！」

ベ「……アスタノトと遊んでた」

デ「わぁー、性格がでますね。あとリリード兄妹はもう少し魔王と
いう自覚を持ってくださいね」

ベ「……あいつらだって似たようなもんだろ」

魔神の姿・狂気 n e g a t i v e g o d d e m o n (前書き)

次回からは零花が魔界トリップしてきた話が始まります

魔神の姿・狂気 **negative goddemon**

ゼレカ Vision

なんだ……

この気持ち……

この力……

フツ、ハハツ、アハハ！

そうか

懐かしい『魔神^{オレ}』の力じゃないか！

「フツ」

ヴァジラの放った魔力がゴミのようだ

速度だって亀が歩いてるみたい

弱い……

それでも、いまのエレスとソルが喰らったら間違いない死ぬ

マモラナキヤな、ふたりを。ククツそのための力だからな

バキン

こんな剣一本折れなかったのか、さっきの俺は

アハハ！ヤッパ守りたいなんて思うのは弱いな

さあーて

脚に魔力を纏わせて歩く

一瞬でふたりの後ろに来た

その後ふたりを抱えて横にずれる

フフツ、エレス。怖くて目をつぶっちゃってるよ

アア、可愛いな

目の前に俺がいたらどんな顔するだろう？

おっ、目をあけたな

「ゼレ…」

「アア、心配すんなエレス。すぐ片付けてやるからよ」

全く、怯えてる君をみているととても興奮する

マア俺は『ヤサシイ』からな

そんなことはしない

もうひとつの楽しみもあるし

「久しぶりだなア、ヴァジラ」

マズハあいさつから、これは常識だ

「ああ？何言ってるんだ」

「オマエと会うのは『あの時』以来だろ。オマエラが俺達を殺した時、な」

フフツ

「……狂ったのか？」

惜しい！

一つは正解だ

「アハハ、25点の回答だ。残りは『怒り・憎しみ・絶望』。それではれて100点だよお？」

「……………」

アレ？難しかったか

「マアイイサ、話を戻そう。マエから聞きたいと思ってたことがあるんだテンシサマ」

「聞きてえことだと？」

そう、オレが聞きたかったこと

なんて答えてくれるかな？

「俺のムネを貫いた感触、どうだった？どんな気分だった？」

「ハハッ！そうか、『怒り・憎しみ』だったか！なら答えてやるよ！
！とっても気持ち良かったぞ？」

ヒヒッ、オレの予想通り

「だよな！ヤッパリそうだよな！いやー、よかった。俺と同じ考え
みたいで」

「はあ？」

剣を新しく四本創った

ガシッ

ヴァジラの両手両足に刺した

左手は動かないって言ってたけど、この方が確実だからね♪

「俺にもやらせろよ。心臓^{ムネ}を貫く感触、考えただけで心躍るぜ」

楽しみだなあ

「っ！」

「サヨナラだ、ヴァジラ！」

元から持ってた剣をヴァジラの心臓目掛けて突き刺す

「ゼレカ、やめて!!」

「っ!？」

――

――

――

エレス、俺を呼んだ？

オマエじゃない。オレだ

いや、俺だよ。何かあったら呼んでって言ったから

マアどっちだっていいだろ？オレには関係無い

お前には無くても、俺にはある。『やめて』って言われたから

!？何言ってるんだ。アイツを殺したいって言っただろ!？

言ってるじゃない。俺は言ってるじゃない。俺は『守りたい』って言ったんだ

……チツ。思ったより早かったな。ん？

――
――
――
パリン

折れてんな

「あ……………」

「やれやれ、全く君は手がかかるね」

「お前が余計なことしたからだろ……」

「おや？ 噛み付く気力も無いのかい？」

「……………くそっ」

「やあゼレカ。『その姿』になったんだね」

「フフツ、そうだなアシユラ。ご忠告感謝しなきゃなア？」

「別に忠告したつもりはないさ。ただ君のその姿に興味があるだけだよ」

「ナラ、試してみるか？ 今なら消滅への特急キップもやるぜ。片道限定の」

「それは興味があるね。でも、生憎と今日は帰らなきゃ行けないんだ」

「オレから逃げ切れる…と」

もういい……

何言っただ！アイツラをぶっ潰しちまえよ！

エレスが言っただろ？やめてって。だから、逃げるなら見逃す

オマエは！自分の目的を忘れたのか！

忘れてない。だけど、今の俺は『ゼレカ・ハヅキ』。お前が言うて
る目的は『葉月零花』の目的だ。俺じゃない

だからオレが出て来たんだろ！？

エレスの前では『ゼレカ・ハヅキ』で居たい。もう彼女に『葉月零
花（あんな俺）』を見せたくないんだよ

このバカヤロー！！

シュウウー

「……見逃してやるよ」

「あれ？戻っちゃったのかい？」

「だったらどうした？」

「アシュラ、俺は帰るとは言って…」

「『あの方』からの御命令だ」

「……わかったよ」

「いや、何でもない。では、これにて失礼」

アシュラとヴァジラは光に包まれ、消えた

「ゼレカ、戻った？」

弱々しい声で聞いてくる

「うん、戻ったよ」

エレスの頭を撫でる

「だから……安心……し……て……」

ドサッ

そのまま力なく床に倒れる

「ゼレカ!？」

意識が飛ぶ前にエレスの声が聞こえた

魔神の姿・狂気 n e g a t i v e g o d d e m o n (後書き)

誰かが呼んでる――

今の俺の知ってるひと――

今の俺の大切なひと――

今の俺の……――

m y b o r d e r l i n e

始まりの時

m y b o r d e r l i n e (前書き)

番外編どころでやろうかな……

my borderline

……………あれ？

俺、どうなったんだ？

『やっと目が覚めたか』

「マムート……」

久しぶりに会ったような気がするな

『そうだな。それより、せっかく封じ込めてたのに何でつかったんだ？』

……………

「ふたりを守ろうと思ったら声が聞こえてきたんだ。そしたら、その声に導かれるように意識が同調した、それだけさ」

『……………わかってるか？』

「何がだ？」

『その意識が誰の意識か』

「その事か。もちろんわかってる」

『そうか』

「あれは俺の……いや、ちょっと前の俺だ。そうだろう？」

『その通り。お前が今と昔を決別するために隠した、まごうことなきお前自身だ』

「……………隠した」

『お前のあの時の気持ちさ』

「……………」

みんなを殺された時（あの時）、か

『その思いを忘れる、とは言わない。生物には、頭で理解出来ても体ではわからない事だってある』

「そうか。珍しく神らしい事言ったな」

『これが本業だからな』

「……………なあ、マムート。『魔神化』をもう一度制御する方法を教えてください」

『……………ふっ』

「何だ？」

『なにを言ってるんだお前は。一度は制御出来たんだ、教えるものにも答はお前の中だろ』

「俺の……中に……」

『もうひとりのお前に頼らずに魔神化をつかう決心はついたか？』

「ああ」

『よし。なら行ってこい！そして思い出せ！』

フワァ

|

||

|||

my borderline (後書き)

アスタノト台ゼレカ

ア「お兄ちゃんに似てますね」

ゼ「エレスを無邪気にした感じだね」

g e a o f d e s t i n y 出会い・始まり（前書き）

糖度不足につき、番外編鋭意製作中です

gea of destiny 出会い・始まり

——これは何時の記憶だ？

——とても懐かしい

——でも、そんな昔の記憶じゃない

——そうだ……

——これは、俺が初めてニンブルケティック（この世界）に来た時の記憶だ

gea of destiny 運命の歯車

——

——

——

……ここか

片膝をついて下を向いている

「召喚成功です」

顔を上げる

周りには見知らぬ服装をしたひとが数人程いた

その中でひとりだけ違った服装をしたひとが近付いてきた

「ようこそ、異界の方。私はソルーティア、そしてここは魔界です」
ニンブルケティック

「……ああ」

「貴方をお呼びした理由ですが……」

「いや、その辺の説明は要らない」

どうせ俺の目的は一つだけだ

「そうですか。それなら……」

「せいこうしたの？」

ソルーティアと名乗った女性の後ろから聞こえた

「エレスナーグ様。いらっしゃったのですか？」

………

なんかぎこちないな

「とりあえずはよろこそ。私はこの城の主のエレスナーグ・クルスト・エル・ニンブルケティック。あなた、名前は？」

「……ゼレカだ」

「そう……ゼレカね。一応はせつめいしておくわ。あなたを召喚したのはこの世界を救ってもらうためよ」

ありきたりだな……

「具体的に何をすればいいかは私が指示するから、それをこなしてそれとあなたに拒……」

「わかった」

「!……そう」拒みなんかしない

『アイツラ』をぶっ潰せるなら

「それなら明日から働いてもらうから今日は休みなさい」

「……ああ」

「それでは、お部屋までご案内しますね」

ソルーティアについていく

gea of destiny 出会い・始まり（後書き）

デ「リレーも一段落ついたところで、新しい事でも始めよう！」

ゼ「本当は？」

デ「このままだとシリアス過多でほのぼの不足です」

ゼ「そうかよ」

エ「具体的には何をするんです？」

デ「ゼレカとエレスさんと今日は居ないけどソルーティアさんであの頃の感想を」

ゼ「……あの頃って……俺はやさぐれまくってたから今とは別人みたいだぞ？」

エ「んー、私も悩んでたから、今とは別人みたいだと思う」

デ「それが今はらぶらぶと……」

g e a o f D e s t i n y 神話(前書き)

前書きのネタが……

gea of Destiny 神話

「こちらのお部屋をおつかい下さい」

「ああ」

「それと明日の朝になったら、先程の『儀式の間』の隣にある『玉座の間』にいらして下さい」

「……わかった」

「あと、わからないことがあれば…」

「それなら明日にでもきくよ」

「承知しました。それでは、ごゆっくり」

パタン

「……………」

随分と普通の部屋だな

目立つ物がベッドしかない

「……まあ、どうでもいいけど」

そのままベッドに横になり目を綴じる

………

……何処だここ

『お前の意識の中だ』

……ああ、自称『神』か

『自称言うな。俺は本物の神様だ』

……それで、何だ？

『いろいろ話し忘れたことがあるからな』そうか、そういえばまだ具体的に俺の力について話してもらって無かったな

『他にも伝えることがあるけど、先ずはお前の能力説明をするぞ。まず一つ目、お前の身体能力を上げた。これは基本的な運動能力をこの世界に合わせて強化したんだ、この世界で言う魔王クラスまでな』

運動能力の強化……

『二つ目、魔力を付与した。この世界では魔力がつかえるからな。お前の本々の魔力を数十倍にしておいた。それだけの魔力なら誰が

相手でもボロ負けっつーことはないだろ』

魔力、か

『そして三つ目、物質を創造する力。お前の魔力をつかい、物質を想像して創造する能力だ。ただし、生物は創れないからな』

……分かった

『お前の能力説明はこのぐらいだろ。次は魔力の説明だ。一応お前には全ての属性を扱えるようにしておいた。全ての属性を扱えるなんて滅多にいないんだぜ？』

……属性っていうと『炎』や『水』のことだろ

『属性は火・水・風・地の基本属性と、光・闇の特殊属性、時・空の次元属性がある』

……『氷』や『雷』なんかはないのか？

『氷は水と光か闇、雷は風と地を複合してつかうとできる。いわゆる複合属性ってやつだな』

……成る程な

『魔法に関しては自分で試してみ。お前の得意な属性を見付けたりしてな。後はなんかあるか？』

……俺やみんなを殺したあいつらは誰なんだ？

『……………』

そうか、神にもわからないことがあるのか

『天使だ。それも普通の天使じゃない、大天使』

……大…天使……

『とは言っても、今のお前じゃ勝てない。絶対にな』

……どうすれば勝てる

『まずはお前の力を理解しろ。そしてその力を操れ。その為に、今はこの世界に慣れろ』

……ああ

『よし。これで伝えることは全部伝えたぜ』

……一応礼は言っとく

『お？どんな心境の変化だ？』

……ありがとな、自称神

『おい！いいけどよ、別に』

……ふん

『……………頼んだぞ』

.....
?

gea of Destiny 神話（後書き）

デ「はーい、それじゃあゼレカとソルーティアさん、あの頃はどんな第一印象でした？」

ゼ「俺は前言った通りやさぐれたから『城のメイド』ぐらいにしか思っ
てなかったぞ」

ソ「ゼレカさん私の事そう思っていたのですか……」

ゼ「いや、あの頃は本気で周りに興味なかったからさ」

ソ「……まあいいですけど。私は面白そうなひとだと思いましたよ」

ゼ「あの俺を見て？」

ソ「ええ。そう思いましたよ？」

ゼ「そうなのか……」

ソ「今では本当に面白いですけどね」

ゼ「面白いか……確かに『あれ』で半殺しにされた覚えは……」

ソ「ゼレカさん、ちょっと血の池地獄で遊泳してみますか？」

ゼ「遠慮しておきます……」

g e a o f d e s t i n y 準備中(前書き)

今日の天候の変わりやすいこと……

gea of destiny 準備中

「……………」

まだ薄暗い……

「……『想像創造』でも試してみるか」

柄の青い剣を想像する

刃、鞘、形、色、重さ、必要な情報を想像して意識を集中させる

「……………できた」

想像した通りの剣が創造されていた

「……………便利な力だ」

他にも武器を造っておこう

そして次に先端の黒い槍を想像する

必要な情報を想像した後、先端の方に水のイメージを付け加えてみた

「……………水の魔力が宿った槍か」

後は消耗品として剣を五本程造っておこう

如何にも普通の剣を造った

「次は魔法を試すか……」

手に力を入れる

……何も起きない

「詠唱でもいるのか？」

そんなもん知らないぜ……

「……魔法は後回しにして、もっと武器を造るか」

――

……で、これ何処にしまうか？

間に合わせて剣が五本、槍が一本、短剣が十本、銃が四丁

魔力を込めて造ったのが闇の剣、水の槍、炎の短剣、風の銃

普段つかう予定の青い剣、刃を増やした短剣、少し長めの紅い短剣、黒い杖

「……こんなに持ち運べないぞ？」

ん、そういえば『空』って空間のことだよな

魔法はつかえなくても杖に『空』を付与すればいいんじゃない？

黒い杖に異空間をイメージする

「……できた」

振ってみると空間が割れた

その中に普通の短剣をいれてみる

もう一度杖を振る

空間が消えた

違う場所でまた杖を振る

割れた空間の中に手を入れる

すると短剣があつた

「これは便利だな」

その中に普段つかう武器以外を入れる

杖を振る

「……服もこっちの世界っぽいのにしておこう」

今の俺は制服のままだ

死んでから着替えるあれも無かったからな

確か、周りのやつらはローブを着てたからそんなかんじの服がいいのか

俺は羽織るタイプの黒いロングコートと青いトップス、黒いボトムスを想像する

ある程度の衝撃は和らげるように属性を指定しないで魔力を込める

「こんなもんだろ」

今着ている服は異空間に入れて、創造した服を着た

腰に剣を差してコートの内側に二本の短剣を入れ、ボトムスの足の部分に杖をしまう

「……そろそろ行ってみるか」

g e a o f d e s t i n y 準備中（後書き）

デ「お前しかでてねえ」

ゼ「そうだな」

デ「このまま語らせると一人で喋る危ない子になるから…」

ゼ「誰が危ない子だ！」

デ「とは言ってお前これみよがしに部屋で一人喋ってたよね？」

ゼ「!！」

gea of destiny 主の問題（前書き）

早いところいつもの日常編に戻したいです

gea of destiny 主の問題

「……………昨日の部屋の隣だったよな」

俺に与えられた部屋から昨日の部屋に向かう

「……………『玉座の間』、ここか」

扉を叩こうとする

……………ん？

「もう一度言ってみなさい!!」

「だから、『赤の宝心』レッド・ハートをとって来たら女を下さいって言ったんですよ。それともお姫様、あんたが相手をしてくれるか？」

「マローニ様、誰に口を聞いて…」

「俺は魔界連合軍結集組織『空撃部隊』隊長だぞ？そっちこそ誰に口を聞いているか分かってるか？」

「くっ……」

「いい、ソル」

「わかりました……」

「マローニ、一応あなた達は私の部下。それだけは覚えておくこと」

「へっ、はいよ」

「報酬の件も考えておくわ」

「おっ、期待してもいいってことか?」

「それは働き次第」

「ならさつさと『赤の宝心』をとってくるさ。というわけで行くぜ」

扉が開く

「ん? 誰だお前?」

「……」

「ああ、お前が例の『救世主』か。へっ、弱そうな奴だぜ」

「……失礼する」

扉を閉める

「ああ、いらっしやいましたね」

「一応はようこそ」

「……どうも。それで、俺はどうすればいい?」

「話しが早いね。まあいいわ、とりあえずあなたには『赤の宝心』

をとってきてもらいたいの」

「それは何処で手に入るんだ？」

「『レッドファング』という魔物の体内にあるわ」

「わかった」

さっきの奴と同じ仕事か

後ろを向いて扉に向かう

「待つて」

「……………何か？」

「あなたは報酬をよこせとは言ってこないのね」

「……………興味ないからな」

「そう」

扉を開ける

「……………な……………」

「？」

扉の向こうでエレスナーグが何か言っていた気がした

——
そういえば『レッドファング』というのは何処にいるんだ？

自室まで来て思った

まあいいか……

外に出よう

………外はどっちだ？

「あのー……」

誰かに後ろから声をかけられた

「……何か？」

「もしかしてお客さんですか？」

「……そんなところかな」

「あっ、やっぱり！はじめまして、私クレアと言います！わからないことや不便があったら何でもお申しつけ下さい」

………声が大きい

まあ、こいつに聞いておくか

「………なら、『レッドファング』は何処に行けばあえる？」

「レ、『レッドファング』！？何しに行くんですか！？」

「…………『赤の宝心』をとり」

「『赤の宝心』ってことは姫様の頼みですか。それならこの城の裏口から出たところの荒野を真っ直ぐ行った森にいますよ」

「…………そうか。後もう一つ、裏口って何処だ？」

「裏口はその階段から下の階に行って右側に進んだところにあります」

「…………ああ、助かった」

「いえいえ、これが私のお仕事ですから」

クレアと名乗った女性とわかれて階段を下り、裏口に向かった

gea of destiny 主の問題（後書き）

ゼ「あはは、全く今と雰囲気違う……」

エ「お互い暗いね」

ソ「二、三ヶ月前の出来事ですよ？」

ゼ「そうか、まだそんな……と言っても魔界こっちと下界あっちじゃ四倍ぐらい時間の進み具合が違うから俺の感覚で一年は経ったかな」

ソ「一年ですか……人間の体感速度は早いですね」

ゼ「悪魔（魔神）になっても体感速度は変わらないけど」

エ「あつ、そっか。この頃のゼレカはまだ人間だったんだよね？」

ゼ「そうだよ。『あの時』から魔神になったんだから」

エ「『あの時』か。客観的に見てみたいな」

g e a o f d e s t i n y 共通(前書き)

今回は少し長めです

gea of destiny 共通

「…………ちっ」

城を出てからどのくらい経った？

走っていないから確かに遅いと思うが結構経ったぞ

「……………ん？」

視界の端に緑がちらついた

「……………着いたか」

真っ直ぐ歩いてたつもりが少しずれたな

「……………さあーて、狩るか」

剣を抜いて森に入る

ところどころの木に爪の跡や尻尾らしきものがぶつかった跡がある

「……………そういえば『レッドファング』ってどんなやつだ？」

さっきのメイドにそれを聞くのを忘れた

「グルルル」

「……………」

目の前に赤いトカゲみたいなのが現れた

「……………わぁーお」

別に驚く事でもないけど……

「グワァア！」

「…………おっと」

噛み付いてきた牙を剣で押さえ……

スパッ

簡単に切断できた

「……………脆い」

「グァァアー！」

レッドファングが痛みで尻尾をぶつけてきた

「……………くっ」

まともに脇腹に喰らいそのまま左に飛ばされた

「……………ん？」

そんなに痛みが無い

これが『身体強化』……

魔法……そうか

「アアアア！」

「……………奔流、激流、全てを洗い流す水。『スプラッシュアウト』」

レッドファングの周りから水の壁が出て、レッドファングを飲み込む

「……………すげえな」

シューー

水が引いたらレッドファングは倒れてた

「……………こいつの体内にあるのか」

剣を真心突き立てた

グチュ

真っ黒の液体が飛び出る

「……………ん」

心臓ら辺に紅い宝石があった

「……これが『紅の宝心』か」

拳より少し大きい澄んだ紅い色の完全な球体が採れた

「……他には」

試してみたら爪や牙、尻尾の中にも宝石があった、けど色も濁った赤だった

「………一通りは持って帰るか」

丈夫な硬度の袋を想像する

その中に宝石を入れる

「……後何体か狩るか」

――

「………ふう」

十数体程狩ったな

魔法も少しだけつかえるようになったし、いい訓練になった

「……帰るか。……速度、流れ、突き抜ける風。『リードフロウ』」

さっき覚えた風の魔法

これを足に纏えば三倍の速度で歩ける

「……………」

――

「……………あっという間だったな」

走って見たらあっさり城の裏口に着いた

ガチャ

扉を開けて中に入り階段を上がる

「……………そうだ」

杖を取り出して振る

重いから異空間に預けておいたんだった

「……………重い」

拳より少し大きいぐらいのが数十個と小さな石ころのカケラみたいなのがどっぷりつまった袋を引きずる

ズルズル

玉座の間に着いた

「どうですか姫様？ 『紅の宝石』をたくさん集めてきましたよ？」

「私が頼んだのは『紅の宝心』のはずよ？」

「冗談言わないで下さいよ。あんな物妄言の代物ですぜ？」

「……まあいいわ。宝石の方でも数十個でそれなりの物になるから」

「数十個？五個集めてきただけで大したものだろ？このカケラ一個だって集めるのに此処の一個小隊何チーム遣うと思ってんだ」

「それもそうね……」

「エレス…」

「あんたなんか頼まなきゃいけない程、今は衰退してるわ」

「言うなー、姫様。で、報酬は？」

「はあー。しばらく分のお金を…」

「それよりよ、『あれ』くれよ『あれ』」

「……何？」

「王家に伝わる秘宝『黒け…』」

ダン！

「あなたは一体どれだけ私を馬鹿にすれば気が済むの！」

「マローニ様、姫様に対しての宣戦布告ととっても？」

「はっ！この俺にそんな事言って大丈夫か？今だって命懸けで姫様の頼みを真っ当してるんだ。俺が聞かなきゃ誰が聞くんだ？」

……………むかつく

話を聞いて確信したが、こいつはむかつく……

エレスナーグを馬鹿にして……………あれ？

むかつく？

俺がむかっていたのはみんなを、俺を殺した天使だ

他の誰かの為にむかつく必要はない

でも、なんとなくむかつく

だから、助けてやりたい

そう思うのはなんでだ？

ガチャ

「…失礼する」

気付いたら扉を開けてた

「あっ？」

「……つく。ゼレカ、何の用」

エレスナーグの座っている机に近づく

重たい袋をひきづって

ドサッ

袋を机の上に置く

「…頼まれた物だ。この紅い球でよかったか？」

「え!？」

「はぁ!？」

「……『紅の宝心』。こんな、こんなにたくさん……」

「これで間違いないか？」

「……うん。確かに、あってるよ」

「……そうか」

「おい、まて! お前あれを何処で…」

「……狩ったんだよ、『レッドファング』を」

「狩ったって、俺も狩ったぞ!？」

「……お前は牙や尻尾を斬ってびびりながら集めてたんだろ。その証拠に転んだ跡や牙が少しだけ折れたレッドフアングもいたからな。お前はびびってた、それだけだ」

「なんだとこの…」

「……それでゼレカ。報酬は何かいいか言ってみなさい」

「……別にいいよ。強いて言えばこの世界について教えてくれればいいさ。それじゃあ」

後ろを向いて扉に近づく

「じゃあ後でこの部屋に来て。この世界について教えてあげる」

「…ああ」

ガチャ

「……それで？」

「………わかった。金でいい」

「そう……」

………とりあえずすっきりした

……誰かの為に怒る、か

gea of destiny 共通（後書き）

ゼ「なつかしいなあー」

エ「この時はホントにおどろいたよ」

ソ「まさかあんな量を持ってきて『……別にいい』ですもんね」

エ「あはは、そっくり」

ゼ「俺が聞いてもそっくりだと思った……」

エ「この後って、ふたりで話すところだね？」

ソ「エレスが私に『少しふたりで話しがしたい』って言うから私出てきませんよ」

ゼ「へえー。あの時から俺に興味がわいたと」

エ「……ん、ん／＼／＼」

ソ「凶星ですもんね」

PV100000突破記念『特別対談』(前書き)

デ「100000……励みになります！」

PV10000突破記念『特別対談』

デ「やあー、暗い！ということで番外編でー…」

コッソン！

デ「痛っ」

ゼ「バカヤロー、何本編シリアスの真っ最中なのに雰囲気ぶち壊してやがるんだ」

デ「だからだろ？連続してあんなことやっていると気分が沈むしよ」

ゼ「はあ。まあいいか、とりあえずは一段落着いたからな」

デ「今回の番外編は何にしようか迷ったんだけど、とりあえずシリアスモードになる前みたいにはのぼの・あまあま・コメディ―路線で進行しようと思う」

エ「ホントに最近は少なかったですもんね」

デ「書いてるこっちも『糖度たりねー!!』と何度思ったことか」

ゼ「あー、まあいいんじゃないか」

デ「ということで、この話は普段の話の何倍かの長さを予定してます」

――
デ「っと、まあ前置きも終わったところで何する？」

ゼ「それを考えとけよ」

エ「後書きでやってたりレーを本人の前で言うとかおもしろそうじゃないですか？」

デ「いや、それだとひとりだけネタバレするから」

ゼ「言う相手をランダムにすればいいだろ？」

デ「ああ、それもそうか」

――
デ「それじゃあ参加者はこんな感じで」

ゼレカ・エレス・ソル・アルフォート・メフィスト・ベルゼブ・アスタノト・アラクネ・バルチス・シェイド・マリーナ

デ「シェイドとマリーナが新しく加わったね」

ゼ「それはいいが、あのふたりと会ったのって俺だけじゃね？」

デ「気にしない気にしない」

エ「どうやって決めるんです？」

デ「くじで決めようと思う」

エ「完全にランダムですね」

デ「そこがおもしろくなるところですよ」

ゼ「……一応聞くが、誰がそのくじをひくんだ？」

デ「俺が……といたいところだけど、絶対仕組んでるとわれそうだからエレスさんにひいてもらおうと思う」

エ「私ですか？」

ゼ「それなら安心だな」

デ「さあ、それではひいちゃってください！」

エ「んゝつと、よつと」

ゼ「誰だった？」

エ「フートだよ」

ゼ「………？」

エ「アルフォートがそう呼んでいいって」

ゼ「あいつが……ほお……」

アル「我か」

デ「じゃ、その部屋で待機しててください」

アル「ふむ」

エ「それじゃあフートの相手は………っと」

ゼ「おっ」

デ「へえ」

——対談部屋

シ「おっと、お前かアル」

アル「ご無沙汰でしたな兄上」

シ「堅苦しいな。昔みたいに話せよ」

アル「そうか？なら、そうする」

シ「変わり身早いな」

アル「それもそうだが兄さん。こんな長話していいの？」

シ「ああ。別にゆっくりでいいってゼレカに言われた」

アル「……主らしいや」

シ「とは言っても、あんま時間かけんのも悪いか」

アル「そうだな」

シ「何を言うんだっけ？」

アル「相手に対して思ってること」

シ「そうだったそうだった」

シ「お前は、立派に誇れる弟だよ」

アル「……そんなことを改まって言われると照れる」

シ「ふっ、お前の番だぞ」

アル「……兄さんは、とても弟想いの兄さんだ」

シ「……ほんと、照れるな」

アル「そうだよな」

——スタジオ？

デ「いきなり兄弟の感動の再会でしたね」

エ「ホント感動的でした」

ゼ「アルフォート……俺はお前がわからないぞ」

デ「それでは次、いってみましょう」

エ「次は、っと」

デ「あはは」

ゼ「まあ妥当だろ」

デ「面白みは無いけど」

——対談部屋

マ「あら？」

シ「マリーナ？」

マ「貴方でしたの」

シ「まあお前相手なら言うことは決まってるけど」

マ「私もよ」

シ「俺の」

『大切なひと』マ「私の」

——スタジオ

デ「短い会話になったけど」

エ「お互いの信頼が伝わってきますね」

ゼ「……これを公開していいのか？俺もこれをやると思うと憂鬱なんだが……」

デ「公開しなきゃわからないだろ？誰が誰に何を言うのか」

ゼ「……悪趣味」

デ「それじゃあ次いつてみよう」

エ「えい、あれ？」

ゼ「おい、接点あるのか？」

デ「どうでしょう？」

—— 対談部屋

アス「やつほく、久しぶりマリリン」

マ「アスちゃん！わあー本当に久しぶり」

アス「まだ放浪してるの？」

マ「ええ。でも今は家に帰ってるわ」

アス「そっか、確かニンブルケティックにお家があったんだっけ」

マ「またすぐに旅にでるから、その時にリリードネメシスに遊びに行くね」

アス「うん！楽しみに待ってるよ！」

マ「私の初めてのお友達」

アス「命の恩人さん♪」

——スタジオ

デ「知り合いだった、というね」

ゼ「（そういえば遊びに行くって言ってまだ行ってなかったな）知らなかった」

デ「お前結局遊びに行っていないし」

ゼ「……お前、マムートの親戚か友達？」

デ「いや」

ゼ「そうか」

デ「さあーて…」

ゼ「おいディン。エレスは？」

デ「ん」

ゼ「ん？」

—— 対談部屋

アス「あはっ♪私、友達に恵まれてる」

エ「そうだね♪私も同じ」

アス「お互い魔王になってから昔みたいに出会えなくなっちゃったけど、今でも約束忘れてない？」

エ「もちろん。『ずっとずっと友達で、親友でいよう』」

アス「親友で、幼なじみで、同僚で、ずっと昔から一緒だったね」

エ「これからも一緒にいよう」

アス「何があっても」

—— スタジオ

ゼ「えっと……ベルゼブ、お前どう思う？」

ベ「……百合」

ゼ「そうじゃなくて、なんで同性同士なのに今までで一番ラブいの

か……って百合だから？」

ベ「……ゼレカ、一つ言っておくがこの世界は女性同士と重婚は可能だからな」

ゼ「それは知ってる、というかお前に名前で呼ばれたのってすげー久しぶり」

ベ「……今は隊長じゃないだろ」

ゼ「そうだけど」

デ「投げました」

ゼ「いてっ、何しやがる」

デ「ふっふっふ、見るがいい」

ゼ「何を見ろって……」

デ「ははは」

ゼ「………消せよ？カメラ」

ベ「……さっさと行ってこい」

アス「ゼレカさん、楽しみに見てますから」

ゼ「……………」

——対談部屋

ゼ「カメラが廻ってると思うと憂鬱だ……」

エ「まあいいじゃない。だってみんな条件おなじなんだしさ♪」

ゼ「……………何だかすごく楽しそうにみえるけど？」

エ「そう？なんでだろう♪」

ゼ「……………周りにつつぬけの状態で言えと？どう思ってるか」

エ「もちろん♪」

ゼ「（完璧Sモード入ってるな）……………ホントに俺が恥ずかしいと思う時はSだよねエレスって」

エ「そうかな？私は困った顔をみるのが好きなだけなんだけど」

ゼ「そのわりには一緒に寝てる時とかは目をあわせないよね」

エ「だって、恥ずかしいから」

ゼ「まさに今その気持ち……………あっ」

エ「どうしたの？」

ゼ「（…………この会話外につつぬけだったんだ）……………ふう、忘れてた。エレス、俺の大切に主で助けてくれた俺のお姫様」チュッ

エ「ふふふ。だったら、貴方は私を籠から出して世界を教えてください
た大好きなひとだよゼレカ」

――スタジオ

アス「ゼレカさんて結構大胆な事するんだ」

ベ「……ヘタレではないな」

アス「それはお兄ちゃんでしょ」

ベ「言わなくていい」

エ「ただいま」

アス「エレス、結構誘ってたね」

エ「そうだった？いつもとあんまり変わらないよ」

アス「そうなの！？いつもあんな感じ！？」

エ「あ、でもお風呂の時よりはそうでもないかな」

アス「お風呂？」

エ「みんなで入れるシャワーみたいなもの」

アス「~~~~~！／／／／／」

プシュー

エ「あれ？アスタノト？」

ベ「……ははっ」

デ「果てしなく面白いけど、次始まってるよ？」

——対談部屋

ゼ「ってことかな」

ソ「そうだったんですか。私の予想とは違っていました」

ゼ「大体は間違ってたけどね」

ソ「いえ、おおまかな部分は合っても基本概念の違いは決定的ですから」

ゼ「ははは……。君……貴女らしいや」

ソ「……ゼレカさん。私、一応は貴方より年下ですよ？」

ゼ「そうだけど……雰囲気的にさ」

ソ「私に限らず女性は実年齢より高い年齢だと思われるのをよしと
はしません」

ゼ「ふーむ。なら、俺を呼び捨てで呼んでみてよ」

ソ「呼び捨て……ですか？」

ゼ「エレスという時の雰囲気なら十分年下に思えるからさ」

ソ「そう……ですか。えーと……ぜ、ぜ、ゼレカ／／……」

ゼ「よく出来ました」

ソ「へ、変じゃなかったですか？／／／」

ゼ「大丈夫だよ。君とエレスって本当の姉妹みたいだね。いつもしてる事が恥ずかしいなんて」

ソ「ゼレカ……さん、貴方にだけお話ししておきますね」

ゼ「何を？」

ソ「実は……」

——スタジオ

デ「ストップー!!」

エ「ど、どうしたんですか!？」

デ「あははは……次、いってみようか？」

エ「え、でもゼレカまだ戻って来てませんけど？」

デ「それは大丈夫、次の相手はメフィストだから先に対談してもらえばいいさ」

エ「じゃあメフィストの相手を選びますね」

デ「（びっくりしたぜ）」

エ「よっと、うん。ピッタリ」

デ「面白い結果になりました」

——対談部屋2へ続く廊下

ベ「……メフィスト？」

メ「あら、ベルゼブ。貴方もその部屋に呼ばれたのね」

ベ「（……まさか対談じゃないよな。ふたり同時に呼ばれたし）……ああ」

ガチャ

ベ「……」

メ「誰も居ない？もしかして、対談？」

ベ「……多分そうだろうな（……ゼレカ、すまんお前の気持ちだよ

くわかった)」

メ「ははは！よかった。ベルゼブが私をどう思ってるのか聞けて」

ベ「……言わなきゃ駄目なのか？」

メ「私が先に言おうか？」

ベ「……笑うなよ。……お前は俺が生涯を通して守ってやる。……だから、お前を好きでいていいか？」

メ「もちろんよ。……嬉しい。貴方に、私の運命の王子様に言われるなんて」

ベ「……／＼王子って、俺は大魔王だ」

メ「照れてる」

ベ「……／＼否定はしない」

——スタジオ

デ「ラブラブだなー」

エ「大人な関係ですね。いいなあ……」

ゼ「結構進展してたんだ」

エ「あれ、ゼレカいつの間に帰ってきたの？」

ゼ「結構早い段階で帰ってたよ」

エ「そうだった？」

デ「カメラだけきつてもう少し待てばよかった」

ゼ「そういえば次は誰だ？」

デ「一応ベルゼブとアラクネ何だけど……」

ゼ「だけど？」

デ「カメラみてみ」

ゼ「？」

——対談部屋2

メ「あははは、ベルゼブ」

ベ「……カメラ廻ってるんだぞ？／／／」

メ「別にいいじゃない。それよりも……」

——スタジオ

デ「終わる気配が一切無い」

ゼ「……………だな」

エ「アラクネの相手も一応決めたけど……………」

ゼ「……………残ってるのってたしか……………」

——対談部屋3

バ「……………」

ア「ねえ」

バ「は、はい！」

ア「貴方って、どこかで私と会ったことある？」

バ「い、いえ、今日が初対面です」

ア「そう……。貴方によく似た人が知り合いにいたものだから、ごめんなさいね」

バ「いえ……………」

ア「何処に行ったのかなあ……………」

バ「……………その人ってどんな人なんですか？」

ア「……………あの人は私を人としても、悪魔としても理解してくれた、たった一人の大切な人。『私と同じひとは何処にも居ない！』って

言った時も『この世界にお前と同じひとが沢山いたら、俺は誰を愛せばいいかわからなくなるだろ？だから、お前はひとり。俺が愛するお前はひとりさ』って」

バ「……そうなんですか。ありがとうございます、話してくれて」

ア「うふふ、何か貴方になら話してもいいかなーって思ったの」

バ（ボソツ）「……悪いなアラクネ、もう少し待っててくれ」

ア「ん？」

バ「何でもないです」

——スタジオ

エ「ばれなかったね」

ゼ「ちょっと本性でてたけど」

デ「さあーて、いよいよ大詰めになってきた。それと、全員終わったらどつきりしかけるから」

ゼ「……どつきりしかけるって言っているのか？」

——対談部屋3

バ「はあー」

アル「どうした？」

バ「のろけ話を聞いてた」

アル「ふっ、それは災難だったな」

バ「いやあ、ただののろけならいいんだけど、内容がね……」

アル「過激だったと？」

バ「それなら恥ずかしいで済むから全然大丈夫。ただ、その相手がね……」

アル「……苦勞してるんだな」

バ「ホント、助かるよアルフォートが居てくれて」

ア「ふっ、お前は面白いからな、特別だ」

——スタジオ

ゼ「……なんか今までで一番スムーズかつ清々しく進んだな」

エ「友情みたいなのが伝わってきます」

デ「さて、一通り終わったかな」

ゼ「どっきりか？」

エ「どんなびつくりがあるんですか？」

デ「ふっふっふ。それは……」

ゼ・エ『それは？』

デ「それは……」

PV100000突破記念『特別対談』（後書き）

ゼ「びっくりしたわ！後書きまでひっぱるな！」

エ「もしかしてこれがどっきりですか？」

デ「まさか。どっきりってのはこの番外編について」

ゼ「番外編？」

デ「この番外編って実は本編が暗いからって理由じゃないんだぜ？
途中まではそれが理由だったけど」

ゼ「どっちだよ……」

エ「じゃあ何かの記念なんですね」

デ「大正解！PV100000記念だぜ」

ゼ「おおー、それはありがたい」

エ「読者の皆さん、ありがとうございます」

デ「それではー」

g e a o f d e s t i n y 種族と魔法（前書き）

夏が……終わる……だと！？

gea of destiny 種族と魔法

「よくきたわね」

「……一応来いと言われたからな」

「とりあえず座って」

促されるまま椅子に座る

「さっきはありがとう」

「……別に、なんかむかついたから」

「……それで、この世界の事を教えてほしかったのよね？」

「……ああ。全く別の世界に来たわけだから」

「この世界は魔界『ニンブルケティック』。あなたが元々何処の世界にいたのかは知らないけど、ここには悪魔しか住んでないわ」

「……悪魔って一くくりにしてもどのぐらいの種族が住んでる？」

「種族のことは知ってるのね」

「……自称イタい奴に知らされてたからな」

「まず、私やソルをはじめとした『吸血悪魔』」

この娘吸血鬼だったんだ……

「次に、好戦的なのが多い武闘悪魔とも呼ばれる『不死悪魔』。でも不死と言われてても死ぬけどね」

「……不死なのに死ぬのか？」

「不死と呼ばれるゆえんが回復速度だから。回復速度を上回る力で攻撃されれば、あっけなく死ぬわ」

「……ふーん……」

「そして一番多い種族が城下街で暮らしてる『吸収悪魔』。空気中の魔力を吸収して魔力を補充してるから、戦闘能力はほとんどない」

「……なるほど、種族について大体分かった」

「後は……それぞれの在り方かしらね。さっき言ったように『吸収悪魔』は空気中の魔力を吸収して生きてる。『不死悪魔』は体内の魔力を回復させつつ外部からも魔力を補給できるわ」

「……吸血悪魔は？」

「その名の通り血をすって魔力を得ているの。血は魔力の塊みたいなものだから。でも、中には『赤血』の持ち主もいる」

「……『赤血』？」

「血が赤い悪魔のことよ。普通の悪魔は血が黒いわ。だから、赤血の悪魔は昔から狙われ続けてきた。同じ赤血の悪魔からも、普通の

悪魔からも」

……

「話しが逸れたわね。『吸血悪魔』で『赤血』っていうのが一番厄介なの。赤血の場合は赤血をすわなければ力が衰えてくし、普通の血をすっても魔力が大して得られないから」

「……………そうなのか。それで、君は一体どのくらい血を吸ってないんだ？」

「えっ!？」

「赤血……………なんだろう？君は」

「……………よく分かったわね。私が赤血だって」

「話している君の顔が怯えてたからだ」

「……………ニンブルケティック家は代々赤血なんだ。だから王でいられた、あいつが来るまでは……………」

「……………？」

最後の方はわざと小さな声で言っただけらしい

「そんな感じかな。他には？」

「……………魔法について聞きたいかな」

「魔法？ いいけど、つかうのは難しいよ」

「…………構わないさ」

それで『あいつら』を倒せるなら……

「魔法……魔術とも呼ばれてるけど、呼び方が違うだけでほんしつに変わりはないわ。それで、魔法の発動には詠唱と魔力が必要になる。これが魔法の基本概念よ」

「……詠唱はどうやって知ればいい？」

「すでに完成された魔法にはあらかじめ創られた詠唱がある。それは魔術書なんかに載ってる」

「……なら、完成されてない魔法の詠唱は？」

「それは普通の魔法がつかえてから考えればいい。……そうね、『中級以上の魔法』がつかえるようになったら教えてあげるわ」

「……そうか。中級ってゆうのがどの程度かは知らないが、漆黑、迷走……」

「!？」

「鎖された道を探す愚者に安寧なる眠りを込めて。『深闇の羽衣』デルトビュラ」

辺りに真っ黒な膜ができ、この部屋を包む

「……大した魔力も込めないで殺傷能力もゼロにしておいたから心

配は無い」

「うそ……これって……」

「これは中級以上なのか？」

「……上級魔術。それも大昔につかわれた『対大型魔物用捕獲魔術』……何処でこれを？」

「……部屋にあった本に書いてあった」

「……それが魔術書よ。その本に別の魔法も書いてある」

「………そうか」

「それなら、さっそく教えてあげる。新しい魔法の創り方」

「……これで、少しは勝利に近づいたのか」

gea of destiny 種族と魔法（後書き）

デ「ボツシーンやってみようか」

ゼ「……………何を怯えているんだ？」

エ「……………何が？」

ゼ「……………そうか、これだけは言っておく。俺は君と敵対するつもりはない」

エ「信用できない、って言ったら？」

ゼ「……………俺には目的がある。その目的の為に、俺は力がほしい」

エ「……………わかった。新しいまじつを教えてあげる。……………噛んじやった」

ゼ「言いにくいもんな」

デ「と、まあこんな具合とどっちにしようかなって思いました」

エ「ホントに噛んじやうかと思った」

ゼ「そういえばあえて魔術じゃなくて魔法って言ってたね」

g e a o f d e s t i n y イケニエ（前書き）

学校があつたので停滞してました

gea of destiny イケニエ

「……っということ。わかった？」

「ああ。教えてくれてありがとな」

「手柄をたてた者にはそれそうおうの報酬をあげるのが王族のつとめだから」

「そうか。それじゃあな」

「あつ、言い忘れてたけど陽がおちたらまたさっきのところに来て」

「……わかった」

カチャ

……魔術も覚えた

これで勝てる……はずだ

確証がないのが不思議だ

なぜ？

これだけ力があれば勝てる、そう思ってたのに

『絶対に勝てない』そう思う……

ああ、そうか……

理解した

誰も俺を信じてないからか

俺を信じてるのは俺だけ

だから確証が無いんだ

此処に居るやつらも俺を救世主なんて思っていない

昨日の夜に聞いたあの会話……

――

「エレス、今度の救世主は頼れそうじゃない？」

「別に、どうせ頼る気もないしどうでもいい」

「……ねえ、そろそろ『あいつ』をこの世界から追い出す事を考えた方がいいわ」

「それが出来たらくろうししないよ。いちいち『イケニエ』を召喚したりしない」

(……………)

「『イケニエ』か……。でも、これじゃあ何時まで経っても『あいつ』の支配下」

「……私には、どうする事も出来ないもん。ただ、あいつに従って
機嫌をとるだけ」

「エレス、私以外のひとに頼ることも大切よ。だから、今回は仕事を彼に任せてみたら？」

「……あの『イケニエ』に？」

「貴女の為にも、誰かに頼ることは必要。それが私の気持ち」

「ソルがそこまで言うんだったらそうしてみる」

扉の向こうから聞こえてきた会話。それが異様に耳に残った

――

イケニエか……

そんなもんだと思ったさ。俺の扱いなんて

それでも、誰からも信じてもらえないよりはマシだ……

だから、俺は逃げない

g e a o f d e s t i n y イケニエ（後書き）

何処にいる？――

話していると周りを笑顔にしてくれた君は――

照れて優しさをみせないけど、本当に優しい貴女は――

――
掴み所が無く、フワフワと浮いてるようで誰とでも打ち解ける君は――

そして、俺を必要と、信頼して、愛してくれた貴女は――

一体、何処？――

g e a o f d e s t i n y 新たな決意（前書き）

前話のゼレカとギャップがありますが、まだ夢から覚めてません

gea of destiny 新たな決意

俺は今湖にいる

城から少し、いや結構離れた赤く濁った湖だ

「……ぐえ」

みているだけで気持ち悪くなりそうな色だったので、早いところ用事を済ませる

まず適当な石ころを投げ入れ水面下に振動を伝わらせる。その後革袋（異空間から取り出した）の中から何かの生肉を沈める

「……気付いたか」

その直後湖の中に黒い影が現れる

その影は徐々に大きくなり、そして水面から出て来た

「ぎゃ……」

「悪いな、説明するのが面倒なんだ」

水面から出て来た青い魚の様な生き物を槍で仕留める

魚は優に20メートルを越えるぐらいの大きさだったが、魚の急所であるエラ（？）に相当する部分を狙ったから大きさ関係無く、一たまりもないだろう

「さてと……」

魚を地面に引っ張り出して口の中に入る

……真っ暗だ。わかつてはいたけど

そのまま勘で進んで肝(?)に到着した

途中槍で無理矢理道を作ったが、気にする程でもないだろ

左手で持っていたペンライトを着けて周囲を確認する

「これが『秘薬の肝』^{エリックハート}か」

ただの肝にしか見えないけど……

早速その肝を無傷のまま取り出す。一応ダミーと変えながら

この肝が無くてもしいつは死なないらしい。だからダミーとすり替えて、治療してやれば元通りってわけだ

「……にしても肝のダミーの色がなぜに真っ青？」

普通肝って言ったらピンクっぽいイメージだけどなあ……

なんてことを思いつつ『秘薬の肝』を丁寧に紙(もちろん頑丈なように造って)で包んで異空間ボックスに入れる

「さあ、戻るか」

来た道を引き返して外に出る

……息が苦しい

どうやら治療する前に目を覚ましたらしく再び水中に戻ったようだ
随分タフなんだな

「て、感心してる場合じゃねえ」

急いで地上に戻る。が、

「あれ？息出来てる？」

水中なのに普通に喋れるし苦しくもない

ま、いっか。分からない事があればまた聞いてみよう

「ふうー、結構深く潜ってやがったな」

水面から上がり服を乾かす。その間に魚もどきの体内で見つけた物
を見ている

「……よくわからん。という事で全て土産にして渡すか」
革袋を取り出してその中に……

「……随分と肉が余ってるな」

確かこの生肉は持ち帰ってこなくていいって言ってたな

「という訳で残りはこの湖に投げ入れていくか」

余っていた全ての生肉を放り込む

「じゃ、帰りましょうか…」

「ギュルルル」

「ん？」

何かの鳴き声が背後から聞こえてきた

「あれ？まさか怒ってる？」

『いえ、怒っていませんよ』

……………はい？

「もしかして言葉通じてる？」

『もちろん』

……………うん、まあ生き返り異世界に來たり魔法が使えたりしてるわけだから、今更誰と言葉が通じようが驚かないさ

「えーっと、怒ってないなら何用で？」

『お礼に参りました』

「お礼？」

『貴方のおかげで仲間の『秘薬の肝』が摘出された事と食糧を与えてもらった事にです』

まさか肝を摘出して感謝されるとは思ってもいなかった

『一般に『秘薬の肝』と呼ばれる物は、私達の身体に良い影響を与えません。ですので、私達の群れにいる肝を持つ仲間の肝を摘出してもらい、本当に助かりました』

「そうなのか」

『ええ。それも命を奪うわけでもなく肝のみを摘出するなんて、普通の悪魔では考えられない行動です』

だって俺人間だもん。悪魔では無いから

「別にいいってことさ。じゃあ、俺は帰るんで」

『わかりました。ではこれを』

そう言って小さな青い笛が目の前に浮いていた

『この笛をこの湖で吹いていただければ、おもてなしをさせていただけます』

「どうも。また来る事があればそうさせてもらうよ」

空中に浮いていた笛を受け取り礼を言った

後はいつも通り（といっても二回目だが）『リードフロウ』を使い速さを上げて城に向かう

「はあー。どうせ戻ってエレスナグに渡しに行ったら、あいつがいるんだろうな。まあ、すぐに黙らせてやるけどさ。なんか陰悪な感じだし。そういえばソーティアもあんまし好意的な態度ではなかったな、あいつに對して。いよーっし、今回はフレンドリーな感じで話すか。なんて独り言言ってる間に到着」

裏口から入る

……：そういえば何で俺は毎回裏口から入ってるんだ？まあ裏口と言っても城下街の裏門を通って入っているわけだが

おかげで街のひととは一回も会ったことがない

次からは正門から入ろ……

「とかなんとか考えてると玉座の間に続く廊下まで来たわけだ」

扉を開けず聞き耳をたてる

「今度はちゃんと『秘薬の肝』を採ってきましたよ？」

「随分小さいわね」

「そんなことはないですよ。それだけあれば不治の病だって完治できるはず」

「色が灰色なのは？」

「もとからそんな色でした」

「………はあー。偽物ね、これ」

「言い掛かりはこまりますよ、姫様」

やっぱりな。まーたあいつがでかい顔してる

「『秘薬の肝』の色は灰色じゃないわ。それに、ところどころ傷ついている。これがもし本物だとしても、価値はない」

「はっ、何言ってた？なら自分で採ってくればいいだろ。仮にも魔王なんだからよ」

そろそろ準備しておくか。どんな反応するかな

「まあ、仕方ないか。所詮形だけの姫じゃ、空撃部隊（俺達）に頼るしかないよな？」

「……エレス、始末してもいい？」

確かな怒気がこもった声が聞こえた。多分あいつには聞こえてないだろ

「だめ。それはだめだよ」

「だけど……！」

「それで、姫様よう。“あれ”はいつになったら貰えるんだ？」

「渡す気なんてない。特に貴方には」

「へえ、そう言っちゃうか。なら、少しは痛い目を見てもら…」

「しっつれーい」

勢いよく扉を開けた

「ちっ」

「どうしたの？」

「いやあ、頼まれた物を持ってきましたよ」

異空間に手をつっ込んで紙包を取り出す

「よっ、と」

大体樹齡二百年の木の切り株程の大きさ

「もしかしなくてもそれって……」

「『エリクハート』だけど？」

「やっぱり？」

その会話を聞くなりマローニとかいう奴の顔が青くなる

「ちゃんと無傷で手に入れてきたから」

「ふふっ、ご苦労様。褒美は何がいい？」

「とりあえず何もない。まあ思いついたらでいいや」

「そう、わかったわ。それじゃあ後でまた呼ぶから」

「了解」

なんてやり取りをしてる内に隣にいたあいつがいなくなってた

「じゃあ」

「ええ」

部屋から出る

「おい」

そのまま自分の部屋に向かう途中呼び止められた

「……………何だ？」

さっきの奴が話し掛けてきた

「お前、自分が何の為にこの世界に呼ばれたか知ってるか？」

ここからなら玉座の間まで声が届かないだろう……

「別に、興味ない」

「教えてやるよ。お前は…」

「『イケニエの為』だろ？知ってるよ」

鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔になってる

「……なっ、なら何で……!!」

「居場所があるから。それだけだ」

自室に向かう

「誰かが俺を必要としてくれるなら、どんな目的でもいい。たとえばイケニエでも、復讐に駆られて全てに絶望してるよりは」

「……ちっ、駄目だったか。なら……」

微かにそんな声が後ろから聞こえた

gea of destiny 新たな決意（後書き）

ゼ「漸く俺らしくなってきた場面だな」

エ「正直私も依頼を頼んで、ゼレカが帰って来た時に別人かと思った」

ゼ「いやあー、誰かに必要とされるっていいね」

ソ「……一応あの場に私も居ましたよ？」

g e a o f d e s t i n y 門（前書き）

スランプ気味になってしまいました

gea of destiny 門

ベッドの上に腰掛ける

「…………ふう」

…………やっぱり、『居場所』があるだけで落ち着く

どんな必要のされかたでも、ただがむしやらに突っ走って自信を無くして無力を噛み締めるより全然居心地がいいや

「……………目的を忘れるつもりはないけど」

それは俺が黄泉がえった意味だから。必ず果たす目的だから……
胸に掛かっているペンダントを握りしめる

コンコン

「ゼレカ、居る？」

「ああ、居るよ」

カチャ

「何か用事？」

「うん、まあ」

イスに座る様にエレスナーグにうながす

「そういえばさっきに比べてずいぶんと明るくなったね」

「んー、まあイロイロと決めたから」「ふーん……。話を戻すけど城下街って行ってみた？」

「全くと言っていい程行ってない」

「やっぱり。なら、ちょっと私と行ってみない？」

おお！これはいわゆる『デート』ってやつですか

「……褒美としてね」

あっさり否定されちゃいました

「たしかにどんな所かわからないからお願いしようかな」

「じゃあ早く準備して。場所は正門で」

そう言ってさっさと部屋を出て行った

「……………正門でどこだ？」

そういえば裏口からしか入ったことないから、正門がどこなのかわからん。それに『正門』なのに『裏口』っておかしいか？普通『裏門』だろ？それとも俺が勝手に裏口と呼んでるだけであって実は裏門なのか？でも昨日のメイドは『裏口』って言ってたぞ？

「ん？『さっき』？」

たしか今エレスナーグは『さっきと比べて』って言って無かったか？
そして俺は一つの答に行き着いた

「……………時間の流れが違うのか」

そう考えれば納得できる

俺が居た世界、『人間界』と『魔界』とでは時間の流れが違う。そういうことにしておこう

……………まあ後で聞いてみるか

「今はとりあえず準備して正門をみつけるか」

というわけで鏡を造る。一からではなく創造で

「！！？」

鏡を見て気付いた

「左目が緑色になってる……………」

多分自分を神だと言ってる奴が変えたんだろう

「それにしても気付かなかったな」

他にも身体に何かされてないか調べたいが、エレスナーグを待たせ

るわけにはいかないからやめる

「む、胸に穴があいてる……」

とかだったらかつこよかったのにな……

部屋を出て一階まで降りる

おそらく、裏口とは真逆の方向に進めば正門につけると思ったからだ

「えっと、こっちが裏口だからあっちに行けばいいのかな？」

そのまま進むと思ったとおり正門らしき場所に着いた

「なるほど、ここが正門か。たしかに堂々としているな」

門が高くそびえ立っている

軽く50メートル以上はあるんじゃないか？ いや、確実にそれ以上あるよこれ……

「……いったい誰が入るんだ？ この城の半分の高さまであるだろ」

門に心を奪われた俺は漸くここに来た理由を思い出し、エレスナーグを待つ

女の子だから準備が長いんだろうな……

g e a o f d e s t i n y 門（後書き）

ゼ「あー、そういえばこの時鏡見て初めて左目が緑になってるって気付いたんだった」

エ「そうなの？ てっきり初めから気付いてるとばかり思ってた」

ゼ「……そっか、その事については話さずにいたんだった。つっても、瞳の色なんか気にしてな……くは無かったけど初対面から緑だったから、話さなくてもいいかなって」

エ「いまはもう知ってるからいいけど、あの時に話してほしかったな」

ゼ「ふふふ、そう？」

デ「最近出番がないぜ」

gea of destiny 探索(前書き)

デ「はっはっは、お久しぶりです、ちょっとさぼっちゃいました」

ゼ「さぼりすぎだ!!」

デ「まあまあそんな怒らないで」

ゼ「毎日毎日睡眠時間削ってゲームばっかやりやがってよ! あげくに学校までさぼる始末、やりすぎだ!」

デ「もうプレイ時間80時間越えたからそろそろ続きを書こうと思っとな」

ゼ「発売してから十日ちよいで80越えかよ……」

デ「基本全作そんなかんじだ」

ゼ「……駄目作者」

gea of destiny 探索

……長い！あれから何時間経った？どう考えても忘れてるとしか思えないんだが！さっさと準備をしろって言ったわりには俺がいつもの十分の一程度の速さで行動してもまだ時間が余ってるぐらいだぞ？

「早かったわね」

なんてことを考えていたら後ろから声が聞こえてきた

「そうだった？」

ついさっき来たところだ、と言わないのは俺なりの抵抗

「それより、早く街を案内してあげるわ」

「ああ、頼むよ」

エレスナーグが門番に門を開けるように言う

「…………へえー」

門から城の外に出る

そこには如何にもRPGにでてくるような街だった

空の色は灰色で、太陽が陰も形もみえないことを除けば

「……………何っーか、思ってたより普通だな」

「そうなの？」

「俺の想像ではゴツゴツした岩に家を創って、その岩のてっぺんからマグマが流れてるってイメージだったから」

「ふふっ、何そのイメージ？」

「意外と普通の街だったな」

「悪魔に対してのイメージ、かわった？」

「うん」

「っと、まずはここ」

屋根にとてつもなくでかい牙が乗っかってる建物に来た

「……………」

「早くはいるよ」

「あ、ああ」

建物の中にはいると酒場のような場所だった

「ようこそ『悪魔達の眼』デビルズアイへ。あら、新人さん？」

「どうも……………」

「此処はギルドよ」

「ギルドか……」

依頼人の依頼を請けて盗賊や魔物を倒したり、道具や武器なんかを納めたりするの？

「私はメトリア。悪魔達の眼の受付をしてるわ」

「はづk……ゼレカです」

あぶねえ……本名名乗るとこだった

「ゼレカ君、ね。貴方、どこかのギルドに所属してる？」

「いえ、無所属ですけど……」

「だったら、悪魔達の眼に所属しなよ」

……人間が入ってもいいのだろうか？

「あれっ？」

俺が入っても大丈夫かエレスナーグに聞こうと思ったら姿が見えない……

「どうしたの？」

後ろから声が聞こえる

「なんでもないよ」

『君を探してた』なんて言えないさ……

「どこ行ってたんだ？」

「いろいろあるの」

「そうですか。それより……」

「入らないの？」

「ギルド？」

「入っておいて困ることもないし、むしろ入って損をするってことはないわ」

「そうなのか」

後ろを向いていたからもう一度後ろを向く

「入る？」

「はい」

「わかったわ。………はいっ、後はそのギルドカードに名前を書いて」

「……………随分簡単な手続きだな」

ゲームと同じくらい早いぞ？」

「書きました」

「じゃあそのカードが貴方の証明書だから」

「はい」

「登録はおわった？じゃあ次行くわよ」

デビルズアイから出る

「どうだった？」

「んー、まあ普通にギルドだった」

「ギルドだもん」

「そういえば聞いてなかったけどデビルズアイは何のギルドなの？」

「基本『何でも屋』。特にこれと言ったかたよりはないわ」

「便利屋ってことか」

「そういうことね。次はここよ」

「武具屋？」

……俺に武器も防具も必要ないんだけどなあ

「そういえば貴方、武器や防具はどうしてるの？」

「…………造ってる」

「造るって、鍛冶屋だったの？」

「いや……………想像で」

「……………」

「……………」

絶対病んでるって思われてるよ。少なく俺だったらそう思うね

「……………本当だよ？」

「……………そうなの？」

「じゃあ今から造るから見てて」

何を造ろうか……

あんまし弱い武器だと『造れても使えない』と思われたくないしな
刀身が蒼く発光して、水の属性を付与した刀……………

「……………っと、ほら」

「ほ、ホントだ。どこから取り出したわけでもないし、ホントに

造ったんだ……」

「一応属性も付けたし、魔力もまあまあ込めたからそれなりの性能だと思うぞ？」

「へえ……」

そんなに驚かなかったな……。もっと驚くと思ったんだが

「それなら武具は必要ないわね。後は装飾屋でも……」

その時、激しい轟音と吹き飛ばされそうな風が吹いてきた

「きゃっ!?!」

「くっ!」

………収まった、みたいだ

「なんだ今の？」

「闘技場のほうから……まさか!!」

「あっ、おい」

彼女に何か心当たりがあるみたいだったから後を追う

gea of destiny 探索(後書き)

エ「そういえばこの時が初めてのデートだったね♪」

ゼ「そうだな。そして初めて弄られたのが顔合わせた直後だったっけ」

エ「そうだった？」

ゼ「俺と目が合ったら『眼中になんかありません』みたいな目をしてたぞ」

エ「あははは……」

ゼ「あの時から『この娘ドSかもしれない……』って思ってたけど、ドではなかったな」

エ「そう？ いじめるのが好きだけど」

ゼ「……（アルコールを摂取したら一切そんなそぶりは見せないけどな）ボソッ」

エ「？」

g e a o f d e s t i n y 黒い血の刀（前書き）

このままいくと後三、四話ぐらいで《運命の歯車》が終わり、それから二、三話（気分が増えますが）で日常にもどります

gea of destiny 黒い血の刀

「……………くっ！」

思ったより早いな……

風の魔術でも使ってたのか？

「エレスナーグ、この先に何があるんだ？」

「闘技場。そこに……」

「？」

「……………っ」

「エレ……」

「ウオオオオア！！」

「！？」

「何だ、今の！？」

「まずいっ……………」

ガチャン！！

闘技場の扉を蹴り開ける

「こっち！」

「ああ！」

階段を駆け上がり観客席についた

「くっ！」

「……」

……酷い有様だ

観客席から下を見るとそこら中に猫の様な薄赤色の『何か』が転がっていた。それには所々鎧の様な物や青い布がついている

「まさか………」

「ええ、これみんな此処の兵士よ」

やっぱり……だけど血が壁や床にすら付着していないっていうのはどういうことだ？ 悪魔の血液は一部のやつを除いては黒いって言うてたから、あの赤色は血液ではないはず

「……………この感じ」

「これって………」

……………確か、空撃部隊の隊長とか言ってた奴の魔力

「アハハハ!! コレデオレハサイキョウダ!!」

「あれは!!?」

「どうしたんだ?」

「あいつの持ってる『刀』……」

「『刀』?」

この世界にも刀があるんだな

「あれはこの国の王に代々受け継がれてきた『黒血刀』」

「ヒヤッヒヤヒヤヒヤ!」

「その刀はとてつもない力を秘めているけど、資格が無いものや赤血じゃないものが手にすると刀に自我を支配されてしまうの」

「なるほど、だからこの国の王に代々受け継がれてきたわけか」

「こうなると破壊衝動のむくままに破壊を繰り返すわ。だから、その前に刀と本体を引き離す」

「わかった。なら、俺がやるよ」

さっき造った剣を構える

「刀を離せばいいんだろ?」

「ええ」

「じゃあ、此処で見てて。よっと」

観客席から飛び降りる

「ハハハハ、オマエモシヌカ？」

「悪いが一度死んだ身なんでね、また死ぬわけにはいかないんだ」
次元から短剣を一本取り出し、詠唱にはいる

「顕れる焰。『ファイヤーボール』」

小さな火の玉をマローネに放つ

「ナンダ？コレ」

すると、刀を振り上げてその風圧で火の玉を掻き消した

「……………顕れる焰。『ファイヤーボール』」

もう一度火の玉をつくり、放つ

「ナンドヤツテモオンナジダ！」

再び刀を振り上げて火を消しにかかった

「引っ掛かったな」

「ナニ？」

火の玉の中から、さっき俺がだした短剣が出てきた

「アタラナイ」

「どうかな」

風の魔術をつかい後ろに周りこんだ

そのまま剣で刀を持っている左手を斬る……が

「ヒツカカッタノハドツチダ？」

グニュ

まるでスライムを斬った感触、つまり手応えが無かった

「偽物！？」

「ゼレカ、後ろ！」

「オソイ」

「ふっ」

振り下ろされた刀が弾かれる

「セーフっと」

さつき火の玉と一緒に投げた短剣が当たって、弾いた

その短剣に風の魔力を流し込む

「チィッ！アアアア！」

一気に間合いを詰めて斬り掛かってくる

それをかわしながら新しい短剣を三本取り出し、それぞれ火・水・土の魔力を流す

「これで準備完了」

四本の短剣を空目掛けて投げる

「そおらよっ！」

振り下ろされる刀を下から力一杯斬り上げる

「クッ、ウオオオオア！！」

「なんだ？」

……確かさっきの爆発の時の掛け声

「キエローー！！『ダークネスミスト』！！」

辺りから黒い霧が立ち込める

「これは……………そうか！伏せろ、エレスナーグ！」

「う、うん」

「キエエエエー!!」

次の瞬間、さっきと同じ爆発が起こった

「ハハハハ！シンダカ」

「誰がだ？」

「風の魔力をつかって跳躍していたのさ」

あいつは無事みたいだな……

「我、元素の加護を受け、世界の理を使役する。破壊と創造を行使し、守護する力をほつする」

空中で四本の短剣を持ち、マローネを囲むように投げる

「ナラバモウイチド…」

「遅い。『アブソリュートエレメンタル』!!」

短剣からそれぞれの魔力を解き放ち包囲する

「自分のしたことを悔いろ」

そして、火に焼かれ岩に刺さり風に刻まれ水に流された

「ギィヤアアア!!」

カランカラン

完全に刀と本体に分かれた

「やれやれ、結構魔力消費したな」

足元に落ちた刀を拾う

「ゼレカ!? それに触ったら貴方も…」

「ん? やばかった?」

「え………?」

赤血なら大丈夫って言ってたから試しに持ってみたけど、ホントに強い力を感じる

もしかしてこれがあれば……

「おっと、何考えてんだ俺は」

さっさと観客席に戻らなきゃな

近くの扉から出て階段で上に上がる

「ゼレカ、大丈夫?」

階段の途中でエレスナーグが心配そうに言う

「大丈夫大丈夫、はいっ」

黒血刀を渡す

これでとりあえずは安心だな

「ありがとう」

「あいつ、どうするんだ？」

「後で話を聞いておくけど、今は動けないだろうからこのまま」

「わかった。それなら城に戻った方がいいんじゃないか？」

「そうね、貴方も疲れただろうからゆっくり休んで」

「そうさせてもらう」

さっきの魔術で魔力つかいすぎた……

「それじゃあ戻るわよ」

「ああ」

gea of destiny 黒い血の刀（後書き）

ゼ「……………」

エ「どうしたのゼレカ？」

ゼ「そういえばこの頃のエレスはあんまり俺を名前で呼ばないと思
って」

エ「そう？」

ゼ「今はほとんど名前だけど、この頃は『貴方』とか『ねえ』とか
で呼んでたまに名前を言ってくれるじゃん」

エ「それを言うならゼレカだって、『エレスナーク』とか『お姫様』
あつ、それは今でも呼んでるっけ。とにかく、エレスとは呼んでな
かったよ？」

ゼ「ふっ、それもそうだね」

エ「ゼレカ」

ゼ「エレス」

g e a o f d e s t i n y 過去の虚像と天使の少女（前書き）

デ「久しぶりの更新で、多少雰囲気が変わってるかもです」

gea of destiny 過去の虚像と天使の少女

.....
.....
.....

なあ、カナ。どうして名前……って言っても漢字だけだけど変えたんだ？

んー、気分の問題？

気分って……

やあ、本当の理由は別にあるんだけどね

どんな……って聞くのは野暮だから聞かないけど、なんかヤバイ事にでも関わったのか？

事件絡みじゃないから安心して。ホントにちょっとしたことだから

そうか。それなら安心だ

そういうレイだって全面的に名前変えたじゃん

全面的の使い方間違ってる。……まあ、『レイカ霊花』から『ゼレカ零花』にな
ったわけだけど

パツと見ると変わってないように見える

そもそも男にレイカはないだろ。普通女の名前だし

そう？私は好きだけど

俺もお前の名前は『華娜衣』より『叶』の方が好きさ

ふふふ。じゃあこれからは二人きりのときだけこの名前で呼ぼう？

ああ、そうだな

レイ……

カナ……

……
……
……

「……………夢……………か」

……………随分懐かしい夢だったな

あれは今から……………どのくらい前だったけな

少なくとも、まだレイって呼ばれてたから英司達に会う以前か……………

「……………そういえば俺はどうしたんだっけ？」

「お目覚めになりましたようで」

声は（ここが俺の割り当てられた部屋なら）扉のほうから聞こえてきた

「あ、ああ。えっと、ソルーティアさんでしたっけ」

「はい。名前を覚えていただい光栄です。それと、ソルーティアで構わないですよ」

「そうですか。それで俺はどうなったのですか？」

「覚えておられないのも無理ないと思います。昨日姫様と戻って来た際に突然倒れられたので」

「あははは……」

……ぶっ倒れたのか。やっぱ魔力を考えなしに使うとそうなるのか

「なので今日は一日自由に過ごして回復に当てるようにと」

「わかりました。それじゃあ今日はゆっくりと過ごさせてもらいますね」

「それでは……あつ、もう一つ言い忘れました」

「はい？」

「そんなにかしこまらないで、くだけた話し方でいいですよ」

パタン

言うことを伝えてでていってしまった

「んー、何するかな……」

今日一日ってことは俺の体感時間で約四日ってことだろ。とりあえずはもっと魔術の訓練をしてすぐばてないように、後は……

「大天使の情報でも集めるか……」

知ってる奴がいればだけど……

空間をイメージして足に魔力を込める。行き先は昨日みた山

そのまま跳躍する

――

「よっ、と」

……成功みたいだな

俗にいうテレポートやワープってやつか

「……ふう」

先ずは魔術の方から克服しないとな

……そういえば克服するって言ったけど魔術を使いまくってればいいのか？まあ、それでいいだろ

「よっ」

詠唱破棄というものを使って、炎を槍状に形成した

「おおっ、できた。すごい中二っぽかったけどできるもんなんだ」

この原理を使えば属性の付いてない武器を即座に属性付きにできる

「ウォーーン！！」

「ん？」

上の崖からだ

「ちょっと行ってみるか……」

崖って程でもないか

「よっ」

崖をよじ登ったら、そこには馬程の大きさの狼らしき生物が一、二……六匹いる。どう考えてもさっきの叫び声の元だろう

そんな事より気になるのは…

「『あの娘』を追ってるのか」

狼らしき生物（以下狼）が集団で追っかけてるのは確かだろう。ち
ようど魔力の扱い方を練習するところだったし、

「倒しちまってもいいよな」

剣を取り出し狼の群れの前へ飛び出す

「頭上にご注意、無駄に終わる。『ライティングデッカー』」

狼が密集していると真ん中に雷を落とす

『ギャウウウ！？』

「ちっ、一匹しか仕留められなかったか」

剣を上段に構えて次の術に入る

『ギュアアア！！』

カキンッ！

構えた剣で狼の爪を受け止める

「伝導しろ、炎。『トーテムインフェルノ』」

受け止めた剣から炎を伝わらせて対峙していた狼を焼き尽くす

『……ア』

断末魔すらあげず黒焦げになる

「あと四匹」

一番近くにいた狼の下に滑り込み、思いっ切り切断する

『グルルル！？』

『ギャアア！』

大量の黒い液体をぶちまけながら、次の狼を仕留める詠唱にはいる

「斬り刻め。跡形も残さずに。『ストームカッター』」

俺を中心に暴風を起こさせ、三匹まとめて刻む

「ラスト一匹……っ！？」

やっば……残りの奴が女の子の方に向かってる。短剣を三本出して闇を込めてぶん投げる

「間に合え！」

一番殺傷能力の高い闇を限界まで込めた短剣だけど、不安が残る……

「ちっ！」

そう思った時には飛び出していた。無意識に速さまで加速させて

「……全く、何やってんだ、俺は」

剣を構える

「はあああっ！」

ザシュッ

瞬時に近寄って後ろ右足をぶった斬る。そのまま体勢をくずした狼の爪を剣で受け止める

パリッ

「おっと……!?!」

剣が耐え切れず真っ二つに折れた……けど、

「後ろがから空き、残念だったな」

さっき投げた短剣が狼に刺さった

『ギャオオオオ!!』

断末魔をあげて倒れる。……結構危なかった

「ふう……、大丈夫? 怪我はなかった……!?!」

「助けてくれてありがとう。さっきの魔物に追われていたんだ」

……振り返って女の子の方を向いた。まだあどけなさの残る顔に相應の背丈、深紅の髪を無造作に、だけれどだらしなさはなく神々し

く降ろしている。その髪よりも深い紅の瞳

そして……その背中から生える、真っ白な一對の『翼』……

「……君、名前は？」

どう考えてもこの娘は天使ないし大天使だ。一番手っ取り早いのは無理矢理『あいつら』の居場所を聞きだしそこに行って殺すことだでも、それじゃあ『あいつら』とやってる事は変わらない

だから……

「私？私はヴォルケノ。みてのとおり天使だよ」

「俺はゼレカ。一応人間だ」

「人間？悪魔じゃないの」

「いろいろ込み入った事情があるけど、人間だ」

「ふーん」

……だから

「この辺は危ないから、早く帰った方がいいよ」

「うん、わかった。またね、ゼレカ」

「ああ」

……俺なりのやり方で復讐する

そう心の中で呟く前に彼女は霞のように消えた

gea of destiny 過去の虚像と天使の少女（後書き）

デ「ネタバレしない程度に、伏線を説明しよう」

ゼ「ああ、アウト」

デ「なんでだ？」

ゼ「伏線の説明〓ネタバレになるからだ」

デ「今の発言がどう影響するか、期待が膨らむな。あつ、そういえばゲストで『今の』ヴォルケノさんを招いているから」

ゼ「……は？」

ヴ「どーも、こんにちは。天使のヴォルケノです」

ゼ「……おいディン、お前は何がしたいんだ？」

デ「だって、シリアス続きなんだから後書きぐらいギャグでいこうや」

ヴ「あのか？」

ゼ「ヴォルケノ、こいつは無視していいからな」

ヴ「そうなの？」

デ「おいおい、何いってんだ。そもそもせっかくお呼びしたんだか

ら伏線の説明を…」

ゼ「ヴォル、こいつ燃やしていいぞ」

ヴ「は〜い♪」

デ「何物騒な事言って、熱っ!？」

gea of destiny 血（前書き）

デ「『運命の歯車編』クライマックスです」

ゼ「いよいよ俺とエレスの出会いの全貌が明らかに」

エ「それではどうぞ」

gea of destiny 血

「…………やれやれ」

ヴォルケノに会った後にまた魔術の訓練してへとへとになって帰って来たっていうのに、自分がどのくらい強くなったかわからない

「やっぱり一日そこの訓練じゃ意味ないか」

……初めてこっちに来た時よりは冷静になったかな

後は……

コンコン

「はい」

ガチャ

「ゼレカ……」

「どうした？」

死なないようにイケニエになる方法、か

「……………」

俺はこの居場所を放したくない。こんど自分に不信を持ったら、立

ち直るかどうかわからない

「……るから」

「ん？」

「私が！私が守るから。安心して」

「…………え？」

エレスナーグに何を言われたか、しばらく理解できなかった。最初は俺の境遇の事がばれたんだと思ってた

「あはは、ごめん、変な事言ったね。……本当に、ごめん」

その言葉を聞いて、その意味がイケニエがどうこうだと気が付いた

「そんな謝る事じゃないよ。ふふつ、君も年相応なところがあるんだね」

「むう、私もう14歳だよ！」

「俺は16。それに14ってやっぱり相応じゃん」

「え！？ゼレカって私より年上だったの！？」

ありゃ、そっちに興味いっちゃったか

「そうだよ」

「異界から来たっていつでも16でそこまで世間知らずだったんだ……」

おいおい、随分失礼なこと言ってるぞ？それに、人間界と魔界まかいじゃおそらく年齢の数え方が違うだらうし

「ああ……それは記憶喪失って事で納得しといて」

「記憶喪失なの？」

「全然」

「じゃあ納得できない」

「そうだな……もう少ししたら話すよ」

「そう……」

「？」

やけに寂しそうな雰囲気をかもしだしてる

「まあそんなことより、今日は一日休日にしてあげたんだからゆっくり休んでよ」

「有り難く休ませてもらうな」

「じゃあ……ね」

「ああ」

ガチャ

「……」

今のエレスナーク、あの時の華娜衣にそっくりだった

「多分、俺に言わず片付けるつもりだろ」

……今度は、失うわけにはいかない

同じ失敗を繰り返すことはしない

『それがお前の望みか?』

突如、頭の中に声が響いた

「……あんたか」

『ああ。みんなの神様マムートだ』

「（自称）が抜けているぞ」

『だから自称じゃないって』

「そんなことはどうでもいい。それより、さっきの言葉はどういう意味だ?」

『ん? ああ。そのままの意味だ。お前は大天使を殺すんだろ? それなのに危険を侵してまであの娘を助ける必要があるか?』

「あるさ。今までの俺はもう死んだんだ。だからこの場所は今の俺の唯一の居場所。それを守りたい、されただけだ」

『もしお前が死んだらどうする？お前の最愛の者を殺した大天使への復讐は、遂げられないままだ』

「……なあマムート。お前、大天使に恨みでもあるのか？」

『っ!？』

「凶星か」

『……私は……』

「いやいいさ。お前が何をしてても、俺をこの世界に生き返らせてくれたんだ。だからあんたは俺の恩人だよ」

『……恩神だ』

「こだわるな……」

『ははっ。そうか、お前は俺の想像以上に面白い奴だ』

「それはどうも」

『もう一度だけ聞いていいか？』

「構わない」

『あの娘を助ける必要はあるのか?』

「この際だ、居場所云々無しにして言う。俺を助けると言って自分の命を懸ける少女を、命を懸けて助けたいだけだ」

『……そうか。お前でよかった』

「何がだ?」

『いや、なんでもない』

マムートが合わせた両手から光が溢れる。そして両手を限界まで離す
そこには一本の紅い剣があった

「これは?」

『《煉帝剣》。その名が冠する通り煉獄の皇帝が生涯愛用していた
剣』

「《煉帝剣》……」

『というのは嘘だ』

「おいっ!」

『はっはっは。しかし、死んで天国にも地獄にもいけず蘇生という煉獄で皇帝の様に願いを叶えようとするお前が使う剣の名前にしては上出来だろ?』

「……ああ」

『これをお前に託す。お前の願いを叶える為に』

「わかった。有り難く使わせてもらう」

受け取った煉帝剣を腰に差す

『まあ、お前自信の意思に従えばいいさ。お前の覚悟もわかったし、俺から言うことはなにもない』

それからマムートの声が聞こえなかった

武器の確認をして装備を整える

「さて、と。行くか」

この辺りで一番強い魔力がある場所へ跳ぶ

——闘技場

「ここって……闘技場か」

入口に着いたので中に入る

おそらくもう戦闘状態であると思っておいたほうがいいだろ。アニメやゲームでも奇襲の威力は激しいし、最初から覚悟して行く

「あの扉だ！」

走った勢いのまま扉を蹴り開ける

「!？」

その光景は予想以上に酷かった。周りには兵士がごろごろ倒れ込み、黒の液体をぶちまけ、壁は崩壊し、煙りをあげて火が燃えている。昨日の奴が斬ったときよりもっと酷い有様……

「はあ……はあ……くっ！ゼレカさん」

呆然と見ていると右側の壁に誰かもたれ掛かつてる

「ソルーティア！大丈夫か！」

外傷が多く、服が真っ黒に染まっている箇所がある程だ

「はあ……私の事より、エレスを……」

「エレスナーグは何処に……」

『終わりだ!!』

闘技場を振り返る

「!!」

闘技場の半分程の大きさの橙色のドラゴンが腕を振り上げエレスナーグを潰そうとしていた

反射的に身体が動く

「間に合え！」

詠唱を破棄した風の魔術で限界まで速度を高めて跳んだ

よしっ！

彼女を抱えて後方に跳ぶ

バキッ

『む？』

「っ！エレスナーグ、おい！」

その姿を見て戦慄する

彼女の小さい身体から大量の『紅』が流れてる……

「…んっ……ぜ……レカ？」

「意識はあるな。待ってろ、すぐ止血するから」

「な……ん……で……今日……は……休んで……て……て……」

「喋るな、もう少しだから。よし」

『誰だ、お前は？』

橙色のドラゴンが俺に気付いた

「ゼレカ…逃げて…あいつは…バハムート。大…魔王…だから…勝てな…」

「関係ねえよ、そんなの」

「……え？……」

「お前は命懸けで俺を守ろうとしてくれた。勝てないってわかっているのに。それと同じだよ」

エレスナーグをおろしてバハムートに向かう

「俺はゼレカ。この世界の救世主だ！」

『はっ、救世主だど？笑わせてくれるわ！』

腕を振り上げて俺目掛けて叩きつけてくる

カキンッ！

それを空間から取り出した剣で受け止める

『ほう？俺の一撃を止めるか』

「天光降り注ぐ裁きの雷、彼の者に終わりを。
『ボルテイション雷の乱射』！」

頭上から貫通に特化させた雷が複数墜ちる

『上級魔術か！』

雷がバハムートに全て命中する……だが、気は抜けない

『なかなかだったな』

バハムートの右腕は無くなっていたが、他は大したダメージを与えられていないようだ

『死ね!』

爪を突き刺してくる。それを剣で止めるが、剣にひびがいった

後一回、もってくれ

「汚れし魂、その罪を償う術を行使したまえ。知るべき理は我の言葉。『冥界の揺り籠』!！」

足元から怨念のような結界がバハムートを閉じ込める

そして怨念の煙りが結界の中を浸蝕していく

『ぐっ、だがこの程度、大魔王たる俺には効かん!』

「それは単なる事前準備だ」

この術も上級なんだがな

『準備だ? だからどうし…』

「消し飛ば!！」
アルテエデン
『暗黒の楽園』!！」

漆黒の小さな球体が結界の中に顕れる。その球体が徐々に大きさを増していく

俺の闇の魔力をありったけ使った最上級魔術、禁術とも呼ばれるらしい

『グアアアア!!』

バツン!!!

冥界の揺り籠ごと巻き込んで小規模の爆発を起こした

「……………」

『ふ、はっはっは!!! 面白い、面白いぞ救世主よ』

全身ボロボロになりあちこちから流血しているのに笑ってやがる……。なにか自信があるのか？ 不死悪魔なのか？ いや、それはないな。『ハデストケージ』も『アルテエデン』も連続した攻撃だから、何度も殺していることになる。じゃあなんなんだ？

「……大魔王の…力」

「エレスナーグ？」

「私達魔王には……『魔王化』っていうのが…できるの。あいつ…は『大魔王化』をして……同じ大魔王以上じゃないと…死なないようになっただのよ」

「厄介だな……」

「……ゼレカ……お願い……あいつを……倒して……」

目に涙を浮かべて俺に頼む

「あいつは……私の国を……めっちゃめちゃにした。そして……みんなを苦しめて、許せない……」

「……ああ。俺があいつを倒すよ。約束だ」

無理だとわかっていても、その願いを受け取る

「私の血を飲めば……あなたも……魔王と同じ力が得られるわ。……あなたなら……大魔王と同じぐらい……強くなれる」

止血した箇所から僅かに血がでてくる

「止血した箇所が!？」

「私は……長い年月血を吸って……ないもん。これが赤血をもつ者の宿命よ……。自分と……同じ血をもつ者なんていない。そのせいで……回復もしない。でも、赤血は……飲めば飲むだけ……力が得られる。だから、私を全て飲んで、ゼレカ……」

「エレスナーグ……わかった」

目を閉じて彼女の腕の傷口からでてくる血を飲む

コクン、コクン

『何をしている？』

コクン……

「でもな、全ては飲まないぜ。お前はまだ生きなきゃいけないんだから」

ドクン

……全身から力を感じる

ドクン

……俺が俺じゃないみたいにな

ドクン

瞳が、紅く、紅くなっている

バサッ

服も変化した。ロングコートではなく漆黒のローブ

そして……真っ黒な『翼』があった

『なっ、まさか……赤血を取り入れたのか！？』

「……」

『くっ！荒ぶれ！我が眷属達よ！『ナイトメアカーニバル』！！』

雷と風と炎が変幻自在に襲い掛かってくる

それを片手で受け止める

『何だと！？ならば、『ジェネラルバースト』！！』

魔力を凝縮した玉を打ち出した

「………」

それを『腰に差していた剣』で両断する

『愚かな！！それを両断したら大爆は…』

ギュルル

剣が玉の魔力を吸い込んでいく

「この剣は、魔力を吸収する。だから、どんな魔術もこの《煉帝剣》の前には無力だ」

『魔力を吸収する剣！？』

俺の魔力を煉帝剣に吸わせる

『馬鹿な！！俺が、大魔王のバハムートが、こんな奴に負けてたまるかあああ！！！！！！』

「……終わりだ。虚限煉帝剣！！」

バハムートの腕を真っ二つにし、そのまま体全体を二つに別ける

もう奴は声をあげることもしない

グチャア

闘技場の床に真っ黒い液体がぶちまけられる

足元にいる少女を抱えて観客席まで飛ぶ

「約束は果たしたよ、エレスナーグ」

gea of destiny 血（後書き）

許し

——恋人と仲間の仇を討つ

——そんなことを考えてた

——俺には何もできなかった

——仇を討つという意志は変わった

——他のひとを愛してしまった

——いたたまれなくなった

——答はでてる

——許されなくても

——それでも言いたかった

——ごめん……………

The end of memory (前書き)

ゼ「運命の歯車は再び動き出す……」

デ「過去話ラストです」

The end of memory

エレスナーグは治療室に運びこまれて、治療を受けることになった止血した意味がないらしく、徐々に傷口が拡がってるらしい

その原因は、さっき彼女から言われた通りなのだろう

赤血をもつ者の宿命、か

吸血悪魔である彼女にとって赤血以外を摂取できないというのは致命的だ

だけど、それは『悪魔』での常識……

カチャ

エレスナーグはベッドの上で右腕を点滴につながれていた

ソルーティアも医務係のひと達も赤血を探しに治療室からでている相当エレスナーグの容態が悪いらしく、もって今日か明日が限界だといっていた

「……ゼレカ？」

「ああ」

「バハムートは？」

「約束通り、ちゃんと倒したよ」

「そう……ありがとう」

「いや、俺が勝てたのは君のおかげだ。『魔王化』しなきゃ勝てなかった」

「そんなことないよ。ゼレカは、私の願いを、約束を叶えてくれた。まるで神様みたいに」

「神じゃなくて魔王じゃないのか」

「ん〜でも、ゼレカは魔王じゃないし……そうだ！ゼレカの場合は『魔王』よりも『大魔王』よりも強くて、神様みたいだから『魔神』だよ」

「『魔神』か……カッコイイな」

「でしょ？」

「……危険な状態だっていつてたのに、こんなに明るいの自分かもう永くないってわかっているからなのか？」

「エレスナーグ……」

「エレスでいいよ。ゼレカにはエレスって呼んでほしい」

「そうか。じゃあエレス」

「なあに？」

「教えてあげるよ。俺は一度死んだんだ」

「……え？」

「俺は大天使に殺された、ただの人間なんだ」

「人……間……」

「だから、この世界の常識は全く知らなかった。これが俺の全て」

俺がこの話をしたのは、君が今から死ぬからじゃない

「……そう、だったんだ。私と似てるね」

「似てる？」

「うん。私はお父さんとお母さんを大天使に殺されているんだ。それからは周りの大人達の態度が変わって、みんな私を狙った。赤血目当てでね。そして私のお兄ちゃんがその大人達を追放した。でもお兄ちゃんも王を継ぐってときに……」

「ごめん……辛いこと思いださせちゃって」

「ううん。ゼレカに聞いてもらってすっきりした。王になってから、ソル以外の誰にも頼らなかったから。全部私がどうにかしないと、って」

……思いもよらなかった

俺がエレスをほっとけないって思ったのは、華娜衣に似てるからじゃない……俺に似てるからなんだ

「……君は俺に似てるな」

「私があなたと？」

「うん。なんでも自分でしよい込むところも、他人に心が開けないのも、本当は臆病なところも」

「そっか……」

「俺は君のことが好きになったよ」

「私も。あなたが大好き」

「それはよかった。……さて、そろそろ寝たほうがいいよ」

「……怖い」

震えてる手をとる

「大丈夫。起きるまでずっと放さないから」

「……うん！約束、だよ？」

「約束だ。だから、安心しておやすみ」

「おやすみ……」

もう体力の限界だったのだろう……

「それじゃあ……」

俺が握っているのは点滴をしているほうの手だ

その点滴の基の方の管を外し、針をつける

そして……

ブスッ

「ぐっ」

俺の左手首の血管に突き刺した

ドクン

ドクン

俺の血が、管を伝ってエレスの中に注がれる

「お前はまだ生きなきゃいけないんだから」

さっきの言葉をもう一度言う

「はぁ……人間の血は赤いんだぜ。だから、君の宿命はもう終わり。」

これで普通に暮らせるさ」

ドクン

ドクン

………

………いつの間にか寝てたみたいだ

エレスの顔を見る

「よかった。顔に生気が戻ってる」

俺とエレスの管を抜き取り、包帯を巻いた

流石に流血が激しく魔術がつかえない

「……あれ？私……」

「気分はどう？ エレス」

「ゼレカ……ってことは、私まだ生きてる？」

「当たり前さ。ちゃんとここに生きてる」

握っている手を見せる

「手、ずっと握っててくれたんだ」

「約束だからな」

「……………」

ポタ

手の上に一粒の液体がこぼれ落ちる

「ゼレカ……グスツ、ありがとう………」

「そんな大袈裟な事でもないよ」

「グスツ……私、今までソル以外のひとから……グスツ、こんなに優しくしてもらったことないから」

ぎゅっ

手は放さず、優しく抱いた

「落ち着くまでこうしてるから」

「ありがとう。もう落ち着たよ」

「そうか」

手は放さずに解放する

「まだあんまり動かない方がいいよ。他人の血を大量に輸血したんだから」

「他人、って赤血のひと居たの？」

「ああ」

「でも、まだソルは帰って来てないみたいだけど？」

自分の人差し指を噛む

じわりと血がでてきた

「それはそうだよ。だって、俺の血を輸血したんだもん」

キョトンとした顔になった

「えっ、でも、私赤血じゃなきゃ輸血なんて……」

人差し指を見せる

「こういうこと」

「えっ!!?」

「人間はみんな赤血なんだよ」

「そうだったんだ……」

じゅっと俺の指を見つめてくる

ああー……

「飲んでもいいよ」

「ふえっ!?! いや、いいよ!?!」

「もう何年も飲んでないんでしょう? 回復力をあげるって意味でも飲んで損はないと思うよ」

「……そ、それじゃあ／＼／＼」

なんで赤くなっただんだ?

かぷっ

「ひゃあ!」

「にゅ? どうひはの(ん? どうしたの)」

「いや、なんでもない……」

思いつきりなんでもあるよ

血を吸われる時、めっちゃめっちゃ気持ち良くなる

やっぱ……クセになりそう

チュウツ チュウツ

「もういいや」

「はぁ…はぁ…もういいの？」

俺的にはもっと吸ってほしかった

「これ以上飲むと久しぶりだから酔いそう」

「酔うんだ……」

人間でいうところの酒みたいなものだからか？

「ゼレカ……お願いばかりしてわるいけど、もう一つお願いしていい？」

「ああ、いいさ」

「じゃあ……ずっと一緒にいて」

期待と不安が込められた瞳で見てくる

俺の答は決まってるけどね

「もちろん。ゼレカ（俺）の居場所は此処だけだから」

俺の答に満足したのか満面の笑みを浮かべている

「改めてよろしくね、ゼレカ！」

「こちらこそよろしく」

「ふふふっ」

「はははっ」

ガチャ

不意に扉が開かれた

「エレ…ス？」

ソルーティアが帰ってきた

「あっ、ソル。おかえ…」

ガバッ

「よかった…助かったのね……」

「うん……」

こうして見ていると姉妹のようだな……二人って……

「でも、どうして助かったの？」

「ゼレカが私に血をくれたの」

「え？だってゼレカさんは…」

「俺は赤血だよ。流石に身体の半分近くの血をエレスに輸血したから証拠はみせられないけど」

「そうですか……」

ソルーティアがエレスの方を向く

「あっそうだ。ゼレカはこれからもここにいてくれるって」

「!!…そう……」

すごく穏やかな瞳でエレスを見ている

……あれ？本当に姉妹なんじゃないのか？

「ソルーティア、もう…」

「ソルでいいです。エレスが認めた方なのですから」

「そうか？ならソル」

「はい」

「もうエレスも安定してるみたいだから、俺は休ませてもらうわ」
身体の半分程は失血してるからな。そういえばよく死なないな、俺

「わかりました。ゆっくりお休み下さい」

「じゃあ、またあとでね」

「ああ。というかエレスも、半分程は俺の血なわけだから慣れるまで安静にしてなよ」

「うん」

ガチャ

……

……

「ここが……俺の居場所。とても暖かい……安らぐ場所。復讐に取り付かれた俺を正気にもどしてくれた」

大天使の事は一回忘れよう

けど、忘れちゃいけない

その時がくるまでは忘れよう

だって今は……

「こんなにも嬉しいから……」

……そうか。そういえばそうだったな

『どうだ？ゼレカ。魔神化に必要なことはわかったか？』

「ああ……。全て、思い出したぜ」

『そうか』

「守る気持ちと煉帝剣、この二つだ」

『そういえばお前、煉帝剣ずっと使ってなかったな。どうしたんだ？』

「ちゃんとあるさ。大切にしまっている」

『ならばもどれ。お前の世界に』

「ああ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0191t/>

吸血魔王と赤血魔神

2011年11月14日00時30分発行